

人類史における活格言語、能格言語

－内容類型学の視点から－

石田 修一

目次：

はじめに

I. 内容類型学の原理の理論的前提と言語諸類型

I-1. 内容類型学の理論的前提、

I-2. 言語諸類型－類別型、活格型、能格型、主格型－と主要な包含事象

II. 活格言語像をめぐって

II-1. 述語と項の類型学（関係類型学）における活格言語像とその一般の問題点

II-2. 内容類型学における活格言語

II-2-1 語彙レベルの特徴

II-2-2 統語レベルの特徴

II-2-3 形態レベルの特徴

①動詞の二系列（活格系列と不活格系列）人称接辞

②動作態（Aktionsart）

③活格言語のディアテシスとしてのヴァージョン（version）

④所有表現の特徴

⑤格構成の特徴；活格と不活格

III. 能格言語像をめぐって

III-1. 内容類型学における能格言語

III-1-1 語彙レベルの特徴

III-1-2 統語レベルの特徴

①活格言語の二方向発展と能格言語のシンタグラマ

②能格類型の文成分の語順

III-1-3 形態レベルの特徴

①動詞の二系列（能格～絶対格系列）接辞

②「逆受身」構文についての内容類型学の立場

③名詞の格

④動詞語形変化の分野における形態的包含事象

⑤態（voice）の対立の欠如

III-2 能格言語の主格化過程

IV. 類別型言語の動向－初期活格型言語との接点

IV-1. 名詞

IV-2. 動詞

あとがき

V. 補遺 グルジア語は能格言語か主格言語か

はじめに

わが国で内容類型学構想が紹介されてすでに 30 年弱になると思われるが、依然と

してその概念や用語の理解は各様であることに気が付く。活格言語や能格言語についてはすでに斯界では周知の了解であって、今さら本稿筆者ごときが容喙すべきでないと考えて来たが、最近になって、例えば関係類型学と内容類型学では類型像に相当乖離があることが判って来た¹。つまり、分類の基準を巡って二種の言語類型学が存在し、その何れを採るかによって類型像は大きく異なるのである。ただし、いまここでいう関係類型学とは、述語と項 (A, S, P[or O]) の関係のあり方によって言語類型を論ずる類型論一般を一括りにした呼称であることを前提とした上で、内容類型学と関係類型学を概略的に対照、図示して見る²。:

関係類型学	内容類型学
述語と項の関係の類型学； 述語と項 A,S,P [ないしは O] の関係のあり方から類型を判定する	総体系的類型学(構造総体の類型学)； 階層 (語彙→統語→形態→形態音素) を成す構造総体としての類型を判定する
A,S,P(O)項の関係の基準は、項の形態の有無(有徴・無徴) と Pivot テスト	構造体の意味と形式総体が基準 語彙の一次性と文法の二次性；形式と内容の弁証法
対格型、能格型、それを基本とした分離型	類別型、活格型、能格型、主格 (対格) 型
他動詞・自動詞対立の固定	他動詞・自動詞対立の歴史性
共時的類型学； 各類型の循環的变化	通時類型学； 各類型の弁証法的、歴史的、不可逆的發展

¹ 山口巖著「類型学序説」(京大学術出版, 1995, p.59-60) は次のように指摘する:「欧米あるいは日本における能格性の取り扱い、主として A, P および S の関係のあり方という形式的なクリテリアに基いて定義されているから、クリモフのいう能格言語類型と活格言語類型の区別がつかない。両者ともこれらの関係が同じだからである。これを区別するためには動詞の意味の分類、あるいはこれと相関する名詞の性の分類原理、格の体系のあり方などを考える必要がある」。つまり、構造内各階層を貫く諸特徴(包含事象)の相関性・連関性・一体性を確認する必要がある、という指摘である。能格型と活格型とも A, P, S の関係が同じだという指摘については、筆者は保留条件を付けなければならないと考えるが、これについては後述する。

本稿は元々、科研補助金による講演会(2018年2月2日名大)で行なった文字通りの拙い報告「クリモフの『内容類型学の原理』の出版から見てきたもの:ロシア・ソヴィエト言語類型論からの視点」がきっかけである。それを少しでも償う懺悔のつもりで書き始めた。同じ趣旨で、その後類型学研究会(2018年3月31日専修大)でその中間報告「活格言語、能格言語をめぐる誤認—内容類型学の視点から」の機会を得た。今回も結局あまり改善できなかったが、少しでもと思ってその改稿を試みたのが本稿である。

² ただし、近年の関係類型学の分野では、他動性、自動性を固定するが、項を固定せず、各類型によってプロトタイプの A(gens), P(atiens)から順次ハイパーロール的拡張が進行して、項の性格が変化して行くとした上で、そのハイパーロール項と他動性、自動性との関係を論ずる研究者(A.E.Kibrik)がいる。[石田 2014, p.116-145]。

I. 内容類型学の原理の理論的前提と言語諸類型

I-1. 内容類型学の理論的前提

① まずは意味（内容）が形式を規定する。そこで、言語構造体の中では語彙組織が文法組織を規定する。文法組織の中では統語が形態を、形態が形態音素を、規定する関係にある。別言すれば、言語構造は語彙組織を頂点として音組織を最下層に置く階層的依存関係にある、すなわち、語彙→統語→形態→形態音素という下向きの支配関係によって構造化される組織体系である（語彙の一次性と文法の二次性）。

② 内容類型学は、総体系的類型学である。語彙、統語、形態、形態音素各レベル（階層）は、連係相呼応して一つの統一的全体（体系）を構成する。この相呼応する統一的諸特徴を包含事象 *implication* という。その包含事象の束が類型を構成する。

③ 意識、思考分野の変化、変動を受けて類型は変化する。その変化に真っ先に反応するのは語彙組織であり、続いて語彙組織の変化は統語へ、次いで形態組織へ、形態音素組織へと波及して行く。したがって、一般に、語彙や統語は次段階の変化の先駆けを反映し、形態は先行段階の残滓を反映する、つまり形態は相対的に保守性をもつ分野である。付言すれば、形態手段は語彙的手段と統語的手段の転置 (*transposition*) であるというテーゼは、内容類型学の枠外で形成されて来たものである³。

④ 類型は一つの統一的全体を構成する諸特徴の論理的必然性、体系性、一貫性を前提とする理論的装置であり尺度であるが、類型は変化して行くから、現実の言語は、形態面では前段階位相の諸要素を残滓・保守しつつ語彙と統語面では次段階位相の改新を遂げる、というズレ（矛盾）を内包する類型種 (*typological class*) として存在する。そこで、類型種内には、包含事象とともに、前段階の諸要素の残滓、次段階の先駆け要素である随件事象 (*frequentalia*) が多発的に現れることになる。すなわち現実の言語は包含事象と随件事象の矛盾を内包しつつ、相対的に一つの全体を構成す

³ ヴィノグラードフ (В.В.Виноградов) は次のように指摘している：「形態上の形はすなわち沈殿した統語形式である。形態には、統語や語彙に存在しない、また以前存在しなかったものは何も存在しない。形態要素と形態範疇の歴史は、すなわち統語的境界線の転移（シフト）の歴史であり、統語階層から形態階層への変換の歴史である。この転移は不断である。形態範疇は、統語範疇と不可分一体である。形態範疇には、相関関係の絶えざる変化が起っており、これらの再編への刺激、揺さ振りは統語に発するものである。統語は、文法の構造上の核心である。生きた言語に内在する文法は、常に建設途上にあり、機械的な区分や切断には堪え得ない。それは、語の文法的な形や意義は、語彙的な意味と密接に関連しているからである」。したがって、「能格的形態法なしに能格的統語法は存在せず、逆に対格的統語法なしに対格的形態法は存在しない」という結論の後半部は正しいが、前半部は誤った認識であろう。対格型であれ能格型であれ、上述の構造化原理は同じである。あるいはまた同じ理由で、「能格性は何よりもまず名詞の格表示として現れ、この意味で形態的現象である。形態論を抜きにして能格性はありません」とも、誤認であると言わざるを得ない。これについても後述する。

るのである。類型は、形式と内容の弁証法的な関係を前提とした概念である。欧米や我が国の類型学は「混合型」という概念を用いるが、クリモフは、混合型を認定することは純粋型を認定していることを自白しているに等しく、不要な概念であり「形容矛盾 *contradictio in adjecto*」である、と批判している[クリモフ 2016, p.36]。

⑤ 言語の変化を惹起するのは意識である。意識分野の変動因子を、意味的決定因子 *semantic determinant*、あるいは意味的動因子 *semantic stymulus* という。すなわち、類別言語では類別原理、活格言語では活性・不活性原理、能格言語では作因性・叙実性 (*agentive-factitive*) 原理、主格言語では主体・客体原理である。

⑥ 人類史における言語は、この動因子の変換によって下表左列→右列へと変換して来た。すなわち構造化過程は主体の能動化過程、主観的要素の増大過程である。この過程は不可逆的である。発展方向は、語彙→統語→形態→形態音素へと上から下へ波及しつつ、さらに左から右へ進化発展して来た。

⑦ 内容類型学が分類する言語類型は、類別型、活格型、能格型、主格型である⁴。これは自然分類であって人工・人為（論理的）的な基準による分類ではない⁵。

1-2. 言語諸類型—類別型、活格型、能格型、主格型—と主要な包含事象：

以下はクリモフが掲げる各類型の一覧表である[クリモフ 2016, p.109]。同表は、語彙、統語、形態各レベルの典型的な包含事象が互いに関係し合っ統一した体系を成すことを示している。加えて、同表は、上から下への階層レベル間の関係においても、左列から右列へ向う各類型間の関係においても、論理的な空間的な連続性（方向性）を示すとともに時間的（歴史的）な連続性（方向性）も示している。同表は内容類型学にとって基幹的な重要性をもつため過去の拙稿にも繰り返し紹介して来たが、ここでは表の上下に、意味的決定因子（意味的動因子）の共時的・通時的連続性、諸類型間の論理的連続性・方向性（類型的隔たり *typological distance*）と史的（通時的）連続性・方向性（不可逆性）を鳥瞰できるように若干の補足を行った。

例えば、活格型言語の構造化原理—意味的決定因子・動因子—は活性・不活性原理であり、それによって森羅万象を活性か不活性かによって分類する、すなわち名詞も動詞もその分類原理に従う。この語彙の分類原理が統語法に及ぶと、活格構文と不活

⁴ [クリモフ 1999, p.243-244 他]では、形式類型学でいう孤立型のような、語彙レベルの機能性の高さだけで主体・客体関係を表す言語を「中立型」として想定していたが、[クリモフ 1999, p.108]では、同類型を「他の言語類型の何れかの枠の中に収まりそうもない、というほとんど消極的な事情で分離」したが、動詞語彙と名詞語彙の構造化原理のような「内容類型学的な研究が全く未完であるため」確かさが劣るとして、これを排除している。

⁵ [クリモフ 2016, p.68-69 他多数箇所]で、自然分類の重要性が繰り返し強調されている。

格構文を指定する。また動詞述語は、述語と一体的に機能する述語の説明的補完成分として、「直接」と「間接」の補語を未分化に融合した近い補語と状況語一般を未分化に融合した遠い補語という要素を引きずる。こうした統語法を受けて、形態は初期段階では文成分は不定格（無形態）のままにして動詞語形中に活格・不活格系列の接辞を組み込んで文成分との相関性を標示する（文成分との相互呼応 cross-reference を示す）が、やがて文成分に活格・不活格系列接辞と機能的に同じ活格・不活格という文法格が発達して行く。以上の語彙・統語・形態レベル(各階層)が一つの全体として統一的な体系を成す場合に初めて類型が認定される。したがって、この類型は、以下で見るように、A,P,S 項の関係のあり方の違いが類型だとする類型学とは全く異なる類型像を結ぶことになる。クリモフが再三強調しているように、「任意の言語レベルの何がしかの言語特徴がさらに大きな呼応特徴組織に含まれるという事実抜きには、一般的に言って、恐らくその特徴の類型的関与性について納得し難いであろう」、「あれこれの構造特徴を、言語類型のより大きい呼応特徴組織に組込むことができるまでは、これ等の特徴の類型的関与性に重大な疑念が残る可能性がある」[クリモフ 2016, p.31-32, 35]。

活格型は、やがて上述の形式と内容の弁証法によって次段階の能格言語か主格言語へ向けて進化発展して来た。では、活格型の起源にはどんな言語が想定されるのか、また活格性のみならず能格性とは何か—これらについては以下で検討したい。

類別原理(→有生・無生原理)→活性・不活性原理→作因性・叙実性原理→ 主体・客体原理

		類別型	活格型	能格型	主格型
語彙	名詞	多類別事物	活性類～不活性類	∅	∅
	動詞	(?)	活格動詞～状態動詞	能格動詞～絶対動詞	他動詞～自動詞
統語	構文	?	活格構文～不活格構文	能格構文～絶対構文	主格構文
	補語	?	近い補語～遠い補語	『直接』補語～『間接』補語	直接補語～間接補語
形態	名詞曲用	∅	活格～不活格	能格～絶対格	主格～対格
	動詞活用	多類別・ 人称接辞	活格系列～不活格系列 人称接辞	能格系列～絶対格系列 人称接辞	主体系列～(客体)系列 人称接辞

バントゥー諸語（活格型よりの類別型言語）

ナ・デネ諸語（幾分類別型特徴をもつ活格型）

アブハズ・アディゲ諸語（活格構造要素をもつ能格型）

エスキモー・アリュート諸語（同上）

ナフ・ダゲスタン諸語（能格性優勢だが著しく主格化傾向を示す）

（基本は主格型だが活格性残滓要素を保存）カルトヴェリ諸語

（同上）エニセイ諸語

（基本は主格型）印欧諸語

II. 活格言語像をめぐって

II-1. 述語と項の類型学（関係類型学）における活格言語像とその一般的問題点

上述のように、欧米や我が国での多くの議論において、活格言語を関係類型学の枠に嵌め込んで理解するのが一般的である。すなわち、他動詞あるいは自動詞と項の関係の違いとして類型を捉える議論が繰り返されている。この類型論にとっては他動詞と自動詞の区分原理は自明の理であるから、議論はいきおい動詞の語彙化原理よりも形式的な S, A, P（あるいは O）項の分類いわゆるアラインメント（alignment）の諸相に集中される。これらの議論についてはすでに一般には熟知されていることであるから、本稿筆者自身の再確認のための覚え書きとしてのみ略述して見る：三つの言語類型（対格型、能格型、活格型）がある。対格型は他動詞の動作（行為）者項 A と自動詞の唯一項 S は同様に、他動詞の被動作者項 P(O) は別様に標示される言語（ $A=S \neq P[O]$ ）；能格型は他動詞の被動作者項 P(O) と自動詞の唯一項 S は同様に、他動詞の動作（行為）者項 A は別様に標示される言語（ $A \neq S = P[O]$ ）；活格型は自動詞の唯一項が他動詞の動作（行為）者項と同様に標示される場合（S-a）と被動作者項と同様に標示される場合（S-p[あるいは S-o]）に分裂する言語である。自動詞に対する項の分裂が起るのは、次の二つのケースにおいてである。S-a になるか S-p（S-o）になるかは、動作者項の意味の如何に関らずプロトタイプとして一定の動詞毎に初めから決っている場合（分裂-S 言語）と話者の意志によって動作者項が意志や制御の意味を込めているかどうかすなわち意志的か無意志的かによって S-a になったり S-p（S-o）になる（流動的-S 言語）場合である⁶。勿論、これら三類型以外に、項に付される形態の有無に拘って中立型（ $S=A=P$ ）、三分割型（三立型 $S \neq A \neq P$ ）、二重斜格型（ $S \neq A = P$ ）を分類する諸論があることは筆者も承知しているが、これらは上の三分類以上に内容を見捨てて専ら形式的基準に依拠した分類である上、統一的組織体系として例証されるものではなく、正にクリモフが言う「言語内類型」にすぎず⁷、ここでは取り上げない。

以上は欧米語圏から輸入された活格言語の紹介や能格言語論であって、内容類型学における活格言語像や能格言語像とは大きく異なる。例えばディクソンの場合、何においても他動詞と自動詞は絶対の原理であり、この前提と A, S, O 項関係の枠組みで世界の言語は全て説明する⁸。勿論、彼は能格型言語と対格型言語が基幹的な言語類型

⁶ Wikipedia の「活格言語」解説にはこうした認識が典型的に反映されている。

⁷ クリモフは類型、類型種、言語内類型という三つの概念を区別し、類型を言語内類型にすり替えることを批判している[クリモフ 2016, p.27,35, 165, 260-262]。

⁸ R.M.W.Dixon, *Ergativity*, Cambridge University Press, 1979[1994] は、述語と項の能格論の文献

であるとする観点を堅持しつつ、ロシアから次第に欧米に広がって来た活格型 active type が視野に入って来ると、自己の能格論に如何に活格型類型を組み込むかという論究の中で、S が分裂する第三類型（活格型）を認めるに至ったと思われる。その事情は次の記述に現れている：

「注目すべきは、一部の学者は、統語機能をマークするために三つの基本タイプ(型)があると主張していることである: 対格型、能格型、分離S型(しばしば『活格型 active』とかその他様々な名称で呼ばれる—例えば Dahlstrom 1983; Klimov 1973) である。例えば、ミツウン (Mithun 1991a :542) は、分離 S 組織は『対格組織と能格組織の混成物 (hybrid) ではない』と強調する⁹。学者のこうした見解があるにせよ、分離 S 組織が能格型と対格型の混合を含むこと—S_a は A と同様に、また O とは異なってマークされ (対格性の基準)、一方 S_o は O と同様に、また A とは異なってマークされる (能格性の基準)—は明白である。筆者は、分離 S 組織が『それ自体として一貫した、意味的な動機性を持った文法組織である』とするミツウンに完全に同意したいと思う。他の種類の分裂 (分離) 能格文法、例えば名詞句の意味的性質によって決定される分裂 (分離) を含む、§4.2 に記述されるべき種類も同様である。文法的システムが分裂的であるという事実は、一貫性あるいは安定性あるいは意味的原理の如何なる欠如を意味するものではない。統語的に認定済みの対格型と能格型という二つの単純なパターンと、本章を通して例証したこれ等二つのパターンの多数の組合せが存在するのである。能格的特徴と対格的特徴を組み合わせる多様な手法は全て、文法的に一貫性を持ち意味的に精巧な組織を作り出すことができる。我々にとって難しいのは、分離 S 言語の A と O に対して如何なる「格名称」を使うべきか、という点である。A と O のどちらも、ある自動詞に対しては S と同じく、それ以外の自動詞には S と異なっているのであるから、主格・対格と絶対格・能格という名称は等しく妥当である—つまり、これ等の組合せの一方を他方に対して優先して選択することには動機性がなかろう。どの特定の言語でも A 標示と O 標示間の相対的な有標性を考慮したいかもしれないが、A に対しては能格を使い、O に対しては対格を使うことは一つの可能性である。

の中では最も系統的に全容を解説した原論的著書であるということが出来る。

⁹ [Dixon 1994, p.77-78] ([ディクソン, 2018, 96-97]) に指示された文献—Dahlstrom, A. Agent-patient languages and split case marking systems, 1983, BLS, 9.37-46; Mithun, M. Active/agentive case marking and its motivations, 1991, Lg, 67, 510-46; Klimov, G.A. Očerok obščej teorii ergativnosti (Outline of a general theory of ergativity), Moscow, Nauka, 1973 (Климов, Г.А. Очерк общей теории эргативности, Москва, Наука, 1973) —ディクソンはクリモフでは参考文献に[Климов1973]だけを挙げているが、クリモフはその後1977年[クリモフ1999]、1983年[クリモフ2016]、1980年[クリモフ2015]にはその後の発展が見られ、重大な修正・精密化を行っている。この点がクリモフの内容類型学を紹介する上で、決定的な難点である。

一つの解決法は、分裂的 S 言語に対して能格、絶対格、対格あるいは主格の何れも使わず、ただ A 標示と O 標示という用語を貼り付けることである」[Dixon, Ergativity, p.77-78] ([ディクソン, 2018, 96-97])。

こうして今日では、概ね三類型は一般的に認定された類型だということができよう。しかし、欧米に広がるこの三つの類型の認定は、項のアラインメントの変態タイプを中心とした認定である。内容類型学から見て真っ先に気付くのは、述語と項の関係の類型学の特徴は、項を基準にしてすなわち項の側から述語（動詞）を眺めることである。他動詞と自動詞は固定した概念であるから当然、項から見れば自動詞が分裂する関係に映る。ここでは動詞論は後景に退くのである。

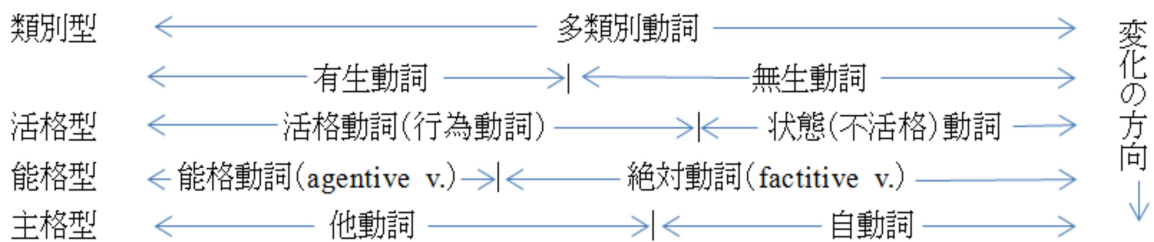
ところが、一般的に言って、内容類型学は、動詞の語彙化原理の側から、動詞語のシフトの側から項の変態を観ているということができる。内容類型学にとって最も重要なのは、上の理論的前提で述べたように、語彙の構造化原理なканずく動詞の構造化原理であり、それこそが類型を構造化する核心である。クリモフは繰り返し、言語の「構造的支配要素の役割は、その類型に特徴的な語彙の構造化原理である。少なくとも最も研究が進んだ言語類型—主格型、能格型、活格型—の研究の実際は、そこで主導的役割を担うのはこれら諸類型に機能する動詞語の語彙化原理であることを証明している」；三類型の「言語構造全体にとっての動詞語の語彙化原理の基幹的な重要性が鮮明に浮上している (...通時面では、これら三組織の歴史はある程度動詞の語彙化原理の再編に従って提示できる)」[クリモフ 2016, p.104-105, 150, 205-206, 254 他]。すなわち、形態面から見た文類型の、動詞型→混合型→名詞型の歴史的再編方向も、動詞語にこそ再編の原動力が潜んでいることを証明するのである。すなわち形態的には、活格性、能格性、主格（対格）性との関係を 1) まるごと動詞語形中だけに組込む動詞型、2) この関係を動詞語形中にもそれと統語的に関係する名詞成分中にも標示する混合型、3) その関係を専ら名詞成分の格形によってだけ標示する名詞型、という文モデルが知られている。これは、動詞語形だけに成分間の統語関係を標示して、名詞成分項を無格（ゼロ格、ハダカ格）のまま統語関係を表す動詞型にも次第にその動詞語形（接辞指標）に混濁・衰退傾向が生じて、これを代償すべく名詞成分項にその関係を標示する手法が萌芽して動詞語にも成分項にも標識を共起させる混合型が生じ、さらに動詞語に組込まれる標識が完全に消滅して、成分項のみが標示機能（格組織）を担う名詞型に至る、という歴史的連続性を表している。構文の形態タイプのこうした通時的変化法則性は、「共時面でも通時面でもこれら類型諸組織で構造的核となる

のは、文構造全体を一定のやり方で構造化する動詞語彙素であることの帰結である」[クリモフ 2016, p. 253]。

動詞こそ原点である。動詞から名詞に変化は波及して行くのであり、名詞形の変化は遅れるのである。分裂（分離）能格性（split ergativity）の一例として統語法と形態法の分裂（分離）について、次のような定式化が欧米の研究に度々見かけられる。例えば、名詞の格形式には能格・絶対格をもつ一方で、動詞の呼応には主格・対格組織をもつ言語が多数存在するが、能格・絶対格の動詞呼応が主格・対格組織の格組織化と組み合さる言語は存在しない、と言われる。これは言い換えれば、統語法は主格・対格的だが、形態法は能格・絶対格である言語は多数存在するが、その逆は存在しない、という経験的事実を述べたものである[クリモフ 2016, p.218]。ただし、欧米のこれらの定式化には常に、何故そうなのかという理由は示されないままである。内容類型学はその理由を説明する：すでに理論的前提として上に述べたが、形態は統語に比べて保守的であること、論理的連続性においても歴史的連続性においても、類型的再編は統語レベルが先行し、形態レベルは統語レベルに遅れて波及して行くからであり、内容類型学から観ても、関係類型学が提示するこの実経験的定式化は理論的にも正しい定式化と認定できる。これら事象の把握にとって弁証法的観点が必須である所以である。

ところで、この他動詞と自動詞という動詞の語彙化原理は主格（対格）言語の語彙化原理であり、この原理のプリズム越しに非主格言語を眺めれば、やはり人工的・人為的分類に行き着かざるを得ない。その上、他動性と自動性というメタ言語なら条件付きで許容するとしても、項の A, P, S（あるいは A, O, S）分類そのものを活格型言語の活性・不活性原理による活性項と不活性項の区分に適合させるには無理が生ずる。これらの項分類の間には齟齬が生じざるを得ない。他動詞/自動詞と A, P(O), S のプリズム越しに眺めれば、所詮 Sa, Sp(So)のような分裂として記述せざるを得ない。すなわち、この原理を通せば、自動詞は言わば A (Sa) 自動詞と P (Sp) 自動詞（あるいは O 自動詞）に分裂することになる。ところが、こうした事態は何も活格言語の場合だけに限らない。能格言語の語彙化原理を A, P(O), S の枠組みに収め込もうとすると、やはり無理が生じる。何故かと言えば、内容類型学が理解する能格動詞の絶対動詞の語彙化原理は、上に再確認した関係類型学の理解と異なるからである。能格言語についてはあらためて後述するが、能格動詞がカバーする他動性の意味範囲は、対象（客体）に対する波及作用が改造・改変的な動詞までである。能格言語では、対象（客体）に対する波及作用が表面的であるとされる、打つ・叩く、つねる、引っ張る、咬みつ

く、待つ、頼む、罵る、呼ぶ、等々大量の意味的他動詞が絶対動詞に入っており、関係類型学が想定する他動詞範囲よりはるかに縮小されるからである。したがって、活格言語で自動詞の「分裂」を言うのであれば、何故能格言語では他動詞が「分裂」していることを定式化しないのか、と言わざるを得ない。さらに、付言すれば、基準的な能格言語における能格は主体格専用ではなく、状況格（斜格）を兼務している（詳細については後述）。いま、各類型間の動詞語彙素の意味機能範囲を素描すれば、次のようになるであろう：



この概略図からすれば、能格言語の他動詞もまた A (Aa) 他動詞と P (Ap) 他動詞（あるいは O[Ao]他動詞）に「分裂」することになる。クリモフは、分類は人為・人工的分類でなく自然分類であるべきことを再三強調しているが、活格言語、能格言語の、諸事実を極度に捨象し形式化したこうしたピヴォット構想が果してこれら類型の実像を正確に捕捉できるのか、という疑問は拭い去れず、ここにはやはり主格・対格言語から観念的に抽象した基準での人為性・人工性を疑わざるを得ない¹⁰。一般論として述べれば、実体抜きに關係が独り歩きしている印象を受ける。「あるものの属性は、他の物に対するそのものの關係から生じるのではなく、むしろ、こうした關係において自らを実証するにすぎない」（マルクス）という発言が想起されるが¹¹、動詞の語彙化原理にこそ、その「關係」を現象化させるカギが潜んでいると考えるのである。

II-2. 内容類型学における活格言語

活格言語類型は長い間伝統的な能格論の枠の中で能格言語の一変種として議論されて来たのであるが、1930-40年代からのソヴィエト期の「言語と思考研究所」を中心

¹⁰ 「内容類型学的な分類は、歴史との關係を欠いた人工的分類とは異なって、『真の自然分類はどんな形であれ、諸対象の歴史的発展の結果形成された、分類すべき諸対象間の正に連関と相關性をこそ反映すべきである』」[クリモフ 2016, p. 211, 270] ; cf. 註 5 ; cf. 「形式類型学的分類は恐らくその全てのケースで部分的分類と見なすべきであるのに対して、内容類型学的分類は一種の全体的分類という資格付けを得るのである」[クリモフ 2016, p.171]—ここで言われている部分的分類とは、例えば「言語内類型」(cf. 註 7) を指している。内容類型学が総体系類型学である点については上述 I-1 ;

¹¹ マルクス「資本論」I 第 1 卷, 河出書房, p.54

とした類型学研究が能格構造の起源問題を意識的に追究する中で試行錯誤を重ねながらも¹²、次第にその個々の構造部分が繋がりはじめ、70年代になって初めてG.A.クリモフによって各階層レベルの統一的複合体としての活格言語の全容が提示されたのである。さらに言えば、本来活格構造の解明なしには能格構造の真の姿は掴めないこと、すなわち活格言語抜きに能格論などあり得ないことも解って来た。クリモフが集大成した内容類型学によって初めて伝統的な能格論も再検討を迫られることになったのである。能格論の中で最も重要な成果と思われるのは、能格言語の動詞の語彙化原理やディアテシスの問題の解明であろう。さらに今日、活格構造の起源が部分的に姿を見せ始めており、これの解明も内容類型学の重要な任務の一つとして浮上して来ている。また、活格構造から能格構造へあるいは主格構造への、人類史における言語史全体の鳥瞰図を初めて提示したのも、クリモフの仕事に含まれている¹³。さらにまた、同氏によれば、現行の活格言語は主として北米のナ・デネ、スー、マスコギの諸語と南米のトゥピ・（グ）ワラニ諸語等の言語に立証され、また近西アジアの古語（フルリ・ウラルトゥ語、エラム語）、エスキモー・アリュート諸語等に活格的な様相が見られるという。さらに、印欧諸語やカルトヴェリ諸語、アフロ・アジア諸語、エニセイ諸語、ケチュマラ諸語等のような今日主格言語の過去に活格的段階位相が追跡される。

さて、内容類型学における活格構造について概略する前に再度、内容類型学に言う活格言語が如何に関係類型学における活格言語観と異なるかを、Wikipediaの解説によって確認しておく：「活格言語とは、自動詞のただ一つの項（S）が、場合によって、他動詞の動作主項（A）と同じように標示されたり、他動詞の被動者項（P）と同じように標示されたりする言語のことをいう。自動詞の項Sの標示の仕方がその言語に特有の分類に従って変わる。自動詞は一般に、主語が動詞作用に意志あるいは制御を及ぼすことができる動詞（意志動詞、非能格動詞）と、できない動詞（非意志動詞、非対格動詞）に分けることができる（この分類は言語によって異なる）。活格言語では、このような分類に従って格の使い方が異なるわけである」。

¹² 悪名高いN.Ja.マール説の混乱もその途上でのエピソードの一つである。

¹³ 活格言語の研究史については、[クリモフ 1999]第1章がそれに当てられている。また、1973年[クリモフ 1973]から1977年[クリモフ 1999]、1980年[クリモフ 2015]、1983年[クリモフ 2016]へかけて、クリモフの能格構造認識には正に弁証法的発展が見られる。後続著書では修正・精密化される部分が処々に見られ、1973年以後の後続著書の記述との整合性が不分明である点を感じられる、注意して読む必要があると考える。わが国の多くの能格論がクリモフを参考文献に挙げる場合も同じである（cf.註9）。

11-2-1. 語彙レベルの特徴。 内容類型学における活格型言語は、上述のように、その階層構造全体に活性原理と不活性原理が貫徹する類型である。特に活性と不活性（有生と無生に近い）対立による名詞分類と動詞分類の相互呼応性の原理が残余の包含事象全体の機能を決定づける。語彙レベルでは、名詞の使用統計事例から、場の活性的参与項にはほとんど例外なく有生指示物が、不活性的参与項として多発的なのは無生指示物が現れることから、全体として人、動物、植物の名称は活性類名詞であり（女、母、子ども、犬、鹿、紅松、等）、残余のものは不活性類である（島、海、岩、崖、毛皮、等）。なお、名詞類の区別は顕在範疇ではなく潜在範疇であって、類別言語と異なって文法指標を欠いており、その区別は文脈環境においてのみ明らかになるのである。したがって、活格動詞は、活性類の行為、運動、出来事を表す（生む・生れる、育つ・育てる、死ぬ、食べる、飲む、切る、折る、壊す、集める、走る、跳ぶ、飛ぶ、行く、歌う、叫ぶ、吠える、咬む、与える、焼く、雷が轟く、稲光が光る、雨が降る、等）のに対して、状態動詞（不活格動詞）は不活性類の状態、性質、特質を表す（横たわっている、ぶら下がっている、突き出ている、転がる、転がり行く、揺れる、音が鳴る・響く、花が咲く、風が吹く、暖かい、痛い、痒い、長い、緑色だ、等）[クリモフ 2016, p.113-114]。この動詞の別も名詞類と同様、潜在範疇である。活格動詞と状態動詞の構成幅は活格言語の発展段階毎に多少とも偏差はあるが、活性類—活格動詞（行為動詞）、不活性類—不活格動詞（状態動詞）の呼応性は「相当高い確度で実現される」のであって、活格言語の基幹的な包含事象（implication）である。例えば、イロコイ諸語に属するオノンダガ語では、不活格（状態）動詞 *wet* は不活性（無生）の主語としか結合しないから、*I am wet* 式の文は不可である。同語では *wet* のような性質は不活性（無生）の名詞にしか帰属し得ない。しかし、アメリカの記述文法分野では、状態動詞が活性類名詞主語と呼応する場合も見られることから、中間動詞 *middle v.*、中立動詞 *neuter v.* と呼称されるが、それは不随意的な状態（非意志的な状態）を表す動詞の場合に、活格言語の段階位相によって諸言語間に差異が生じてくるためである。有生原理・無生原理すなわち有生の行為・状態か無生の行為・状態かという原理に微かに主体・客体原理へ向う兆しがほの見えることを表している。別言すれば、不随意的な状態（非意志的な状態）を表す動詞が不活格動詞（状態動詞）に移籍することが、やがて他の自動詞相当の動詞を状態動詞へ誘導するきっかけを作りだした可能性も否定できない。例えば、「横たわっている」や「落ちる」等はグワラニ語では活格動詞であるが、ダコタ語では状態動詞であったり、また前者では「殺す」「死ぬ」が活格動詞であるのに、後者では「殺す」は活格動詞、「死ぬ」は状態動詞に

属する。また、初期の活格言語では、意味的に状態動詞に属するもの多数が、構造的には活格動詞に属するという一定の法則性が見られるという。これは初期段階位相の活格言語ほど活性、不活性対立の原則が厳格であること、すなわち有生、無生対立の原則に近いことを表している。

クリモフは活格動詞 (активный глагол[active verb], глагол действия[verb of action]行為動詞) と状態動詞 (стативный глагол[stative v.], глагол состояния[verb of state]) という呼称を使うが、以上の事情一本来、行為か状態の別以前にむしろ有生(活性)か無生(不活性)かの別であること一を勘案すれば、筆者は、活格動詞と不活格動詞 (inactive v.) と呼称する方が適切ではないかと考えている¹⁴。例えば、柳沢は、L.セキの研究によって、「自動詞の分裂」を示す例として、カマユラ語において不活格系列接辞をとる動詞述語たる「大きい」、「白い」、「暑い」、「短い」、「重い」、「新しい」、「疲れた」、等の典型的な形容詞相当語彙の他、「忘れる」、「思い出す」、「悲しむ」、「溜息をつく」、「鼾をかく」等を挙げる一方、活格系列接辞をとる自動詞のクラスに属する意志的な動詞「話す」、「走る」、「歌う」、「歩く」の他「死ぬ」、「倒れる」、「恐れる」、「座っている」等を挙げる。そして、動詞「話す」が活格系列 (i-) と不活格系列接辞 (o-) を使い分けることによって、話す能力はあるが話したくない者と話せない聾啞者という 3 人称関与項の随意・不随意あるいは意志・制御 (コントロール) の有無を使い分ける例文を提示している[柳沢 1997, p.96]¹⁵。

動詞二分類に関連して、さらに以下の二点について追記しておく。先ず第一は、活格言語は主体・客体原理に定位した構造化をもたない、すなわち他動性・自動性は構造的に関与的な特徴ではないから、主格構造の観点からすると意味が未分化拡散的な動詞 (diffused verbs) 群、「燃える・燃やす」、「死ぬ・殺す」、「乾く・乾かす」、「横

¹⁴ クリモフは、以上の他の例も挙げている。グワラニ語では、意味は状態動詞でありながら有生の行為を表す活格動詞「立っている」、「座っている」、「横たわっている」、「眠っている」、等若干[クリモフ 1999, p.144]。一方、グワラニ語で、有生指示対象に関係すると思われる状態動詞：「震える」、「痛い、病気だ」、「という名である」、「悪臭がする」、「びっこである」、「縮む、短くなる」、「汗をかく」、「まどろむ」。「音がする」、「こぼれる、散らばる」、「花が咲く」、「泣く」、「覚えている」、「忘れる」、「がつつする」、「ひもじい」、「丸い」、「大きい」、「強い」、「高い、長い」、「老いている。古い」、等。また同系統に属するカマユラ語の活格動詞例：「歌う」、「行く」、「死ぬ」 *manó*、「走る」、「殺す」 *juká*、「叩く、打つ」、「(方々) 刺して穴をあける」、「歩く (流れに沿って) 泳ぐ」、「飛ぶ」、「焼く、燃やす」、「知っている、の能力がある」、「与える」、「なげる、捨てる」、「(風が) 吹く」、「欲する、したい」、「持っている、握っている」、「食べる」、「(水を) 飲む」、「咬みつく」、「(乳房を) 吸う」、等[同 p.68]。その他、活格言語間における動詞語分類の差異および発展過程については、[同 p.68-77, 144-145]も参照。

¹⁵ 柳沢が指示する文献—L.Seki, “Kamiura (Tupi-Guarani) as an Active-Static Language”—*Amazonian Linguistics*

たわる・横たえる」、「立つ・立てる」、「倒れる・倒す」、「目覚める・目覚めさせる」、「行く・運ぶ」、「駆ける・駆り立てる」、「這う・引きずる」、等の意味の合一した単一の活格動詞語彙素が頻繁に機能していることである。これらの動詞は時に可変動詞 (*labile v.*) とか両義動詞あるいはまた他動・自動詞とも言われるが、この活格動詞の意味が他動詞あるいは自動詞に可変するのではなく、こうした意味価 (*intention*) そのものが活格言語話者に映ずる同一の客観的現実の反映そのものであって、正に単一の活格動詞語彙素なのである。必要な場合には、客観的現実のこの同一事態を言語面でだけ遠心相・求心相というディアテシス (相 *version*) によって区別して活性項の客観的運動方向性の違いを示すにすぎない。主格言語では、例えば「燃やす」と「燃える」は客観的現実の異なる事態であると認識されるから他動詞と自動詞を区別する一方、他動詞「燃やす・焼く」の方は受動態「燃やされる・焼かれる」として変形し、言語面でだけ区別するのである [cf. 山口 2005, p.256-266]。したがって、上の「拡散」動詞は活格言語の包含事象に属する動詞群であるが、活格構造から引き継いで能格言語に随件事象 (*frequentalia*) として残滓する場合がある。これ等については後述するが、これの求心相こそ関係文法がいわゆる逆受身 (*antipassive*) 構造と認識する *voice* 転換の原点である。第二に、活格言語によっては、活格言語の発達に伴って、小規模ながら第三の動詞語彙素群—以下のような「不随意的行為・状態動詞」(*глаголы непроизвольного действия и состояния* [*involuntary action and state verbs*]) 類—が存在する。これに類似する動詞類は、能格言語や主格言語では「見える」、「聞える」、「欲しい、～したい」、「好きだ」等の意味に限定して規模を縮小しつつ情緒動詞 *verba affectuum* あるいはまた感覚動詞 *verba sentiendi* としてのみその痕跡を残しているが¹⁶、活格言語の不随意的な行為・状態動詞類の規模ははるかに大きい。クリモフは、活格言語の構造特徴の上で一般的な段階位相としてナ・デネ諸語を初期活格型、トゥピ・グワラニ諸語の状態を基準活格型であるが、スー諸語は基準型と後期型の間的位置を占め、マスコギ諸語、イロコイ語族の言語は後期活格型に関係づけているが、スー諸語ではこの動詞群の広がり幅は相当大きく、特に同語族アシニボイン語では、「見(え)る」、「と思われる、気付く」、「眠らないでいる、起きている」、「ある」、「落ちる、ちぎれる」、「破れる、劣化する」、「砕ける、割れる、壊れる」、等が、イロコイ語族セネカ語ではこれらにさらに「眠る、寝入っている」、「笑う」等も含まれる

¹⁶ いわゆる与格構文 *dative construction* の構文類である：英 *It seems to me*; 仏 *Il me plait, Il me faut*; 独 *Mir gefällt, Mir ist kalt*; 露 *Мне (1/2g/dat) нравится* (好きだ[彼が、それが]), *Мне холодно* (寒い), *Мне нужно* (必要だ), *Мне кажется* (思われる); グルジア *Me (Me) Ana (Anna) mi-qvar-s* (1sg 人称接辞 *dat*-好きだ-3sg 接尾辞)「私はアンナが好きだ」等。

という。ところが、グワラニ語では「見（え）る」が、アシニボイン語で「聞える、聞く」が活格動詞に入る例も挙っている：a-hesa ne-roga (I see thy house), na-wá-xú (I hear) にはそれぞれ活格系列 1 人称接辞 a-と-wa-が付されている。一方、ナ・デネ語族トリンギット語では、「見（え）る」、「知っている」が「取る」、「殺す」と同じ活格系列接辞を取る、すなわち何れも活格動詞として機能している、等である：a-wu-s-tin (him he saw), a-wu-ts-nùk^u (it he took)。上で挙げられたカマユラ語例における活格動詞「話す」の場合は、活格 / 不活格接辞系列の使い分けによって実は随意性/不随意性を表すことが示されたが、それもまた随意性/不随意性の表現手法の一つである。活格言語の中には、活格系列接辞、不活格系列接辞の他に特に形式的に「情緒系列」接辞を分離して、不随意行為・状態構文（「情緒」構文）の主語に当てる言語が知られている。この「情緒」系列を使う不随意行為・状態動詞は、初期活格言語では存在せず、活格言語の発達につれて分離されたものであるが、後期活格言語以後では逆に縮小され、能格、主格言語では情緒・感覚動詞としてのみ残滓して行くのである。不随意行為・状態動詞は主体・客体原理への切り換え（再解釈）に従って、他動詞と自動詞に分与されて行くからである。関係文法では、上のカマユラ語の場合のように、主体の意志や制御性—上の用語で言えば随意や不随意性—によって、行為主体項と認識される A を随意 (Sa) か不随意 (Sp) かで使い分ける点が指摘されるが、活格言語に特に分離される「情緒系列」を使う不随意行為・状態構文（例文は以下の「形態の特徴」で後述）は、活格系列と不活格系列を使い分ける手法とは別の手法である。つまり、活格動詞や不活格動詞の枠に収まりきれない不随意行為・状態を表現せんとする試みが、二つの手法を生みだし、能格言語や主格言語に両手法とも痕跡を残すが、「情緒系列」法は規模を縮小して残ることになる。ここには活格言語の話者の主体・客体原理へ向けた意識変化の反映を見ることができる。しかし、繰り返すが、活性類—活格動詞、不活性類—不活格動詞という呼応こそ活格型言語の本質であり基幹路線であって、当該言語類型はあくまで客観的現実の模写、写像 (icon) の原理の上に成立している。第三に、形容詞は未分化であって、状態動詞の一種として所を得ているにすぎず、また連辞動詞、所有動詞の欠如も活格言語の特徴である。

II-2-2. 統語法レヴェルの特徴。 統語法は語彙の構造化原理に最も直接的な依存関係をもつ。特に、動詞述語の、他の文構成要素に対する統語的支配性は鮮明である。活格動詞は活格構文を、状態動詞（不活格動詞）は不活格構文を、不随意行為・状態動詞を分離する場合は「情緒」構文を、指定する。文の二次成分として、近い補語と

遠い補語が存在し得る。近い補語は、能格言語の「直接」補語や主格言語の直接補語の概念に比べて外延が広く、いわゆる直接補語も間接補語も含む補語である(例えば、ダコタ語 a-má-pa「私を打つ(彼が)」, má-kkú「私に与えた(彼が)」)。また他動的行為の客体は勿論、任意の活性的行為が向う客体特に運動方向の客体も表す: すなわち、印欧語の方向対格(ラテン語 lego libr-um「私は本を読む」に対して eo Roma-m「私はローマへ行く」、サンスクリット nagara-m gacchati「彼は町へ行く」)やゲルジア語の与・対格 Šota çeril-s çers「シヨタは手紙を書く」に対する gaudga gza-s「彼は旅に出立した」に相応する成分が近い補語である。遠い補語は状況語(場所、時間、行為手段)に近い。活格構文には近い補語も遠い補語も存在し得るが、不活格構文には遠い補語しかない。

文の構成組織は、二つの中心(主成分)たる主語と述語からなる二肢文構造である¹⁷。これら構文を認定するための必要十分条件として存在する文成分は主語と述語だけである。この点で述語的(predicative)シンタグマと補完的 completive シンタグマをもつ能格構造と異なる。この差も、活格構造と能格構造を分つ根拠である。補語は全く任意の選択的成分であり、以下の構造式には反映されていない。

以下に活格構文/不活格/情緒構文の三種の形態的構造式モデルを示す(以下の act(ive), stat(ive)=inactive, affect(ive)は名詞 N の格接辞、動詞 V の活格系列、不活格系列、「情緒」系列の人称接辞を表す; 接辞系列の具体的事例については後述):

	活格構文	不活格構文	「情緒」構文
① 動詞型	N - Vact	N - Vstat	N - Vaff
② 混合型	Nact - Vact	Ninact - Vstat	Naff - Vaff
③ 名詞型	Nact - V	Ninact - V	Naff - V

なお、クリモフは、現存する活格言語においての主流は動詞型形態タイプだという。すなわち有生原理と無生原理の対立に近い早期活格言語(北米ナ・デネ諸語)も活性原理と不活性原理の対立を一貫して実現する基準型活格言語(トゥピ・グワラニ諸語、北米スー諸語)も主体・客体原理の比重が高まり、能格、主格型言語との接点を表す後

¹⁷ 「(雷が) 鳴る」、「(雨が) 降る」、「(夜が) 明ける」等の無主語文も文類型の周辺的な変種としてあり得る。なお、ここでいう主語とは、動詞の結合価によって決定される名詞成分を指す。すなわち、一項文では一項(一価)述語に対する唯一の位置的補充項が主語。活格構文の多項(多価)述語の場合は、動詞に明確な主体・客体的意味価 intention が欠如する環境では、語順や形態が主語を決定する。例えば、活格動詞の語形中に置かれる活格系列人称接辞に相関する名詞が主語であり、不活格系列人称接辞に相関する名詞が近い補語(動詞語形中に標示されない場合もある)。名詞に格が存在する場合も、活格・不活格は活格/不活格系列人称接辞と機能的に同じである。特に、遠い補語は動詞語形中に反映されないことが多い。

期活格型言語（北米イロクォイ・カド）そしてやはり北米のユチ諸語もほとんど形態的には動詞型だが、マスコギ諸語のように後期活格型の一部には混合型が見られる。一方、名詞型は現存活格言語に見られず、印欧語、カルトヴェリ語等現存主格、また能格言語に残滓が認められる、という[クリモフ 1999, p.49, 156-157]¹⁸。何れにせよ、全体として動詞型から名詞型に至るシフトは言語史の事実である。

また、近い補語と活格動詞述語の、また状態動詞（不活格動詞）と主語とのきわめて密接な統語的な一体性から、この近い補語や主語が抱合されることが多く（スー諸語 *cán* 「薪」に対する *cán-káska* 「薪を束ねる」、オノダガ語 「家」 *ʔokayó* 「家」に対する *ʔonɔhsaká-yoh* 「家は古い」等）、また述語と補語の一体性を補強する語順（S(O)V, (O)VS）を見せる。ここに特に読み取れるのは、述語と一体化した近い補語の述語内的性格である。

以上に関連して、活格言語のシンタグマについて注意しておく必要がある。能格言語のシンタグマ構成と同じとする理解が広がっているからである。すなわち、一般に能格構造言語では、述語 V と直接補語 O が第一次シンタグマ（述語的シンタグマ）を構成し、主語 S がそれを規定するあるいは補完する第二次シンタグマ（補完的シンタグマ）を構成するとされるが、活格言語のシンタグマは述語的シンタグマだけである。クリモフはこの点について繰り返し注意を向けている：

「活格構造のシンタグマ構造も特有である。能格構文能格構文からの誤った類推の影響のもとに、この文型を、近い補語の体裁をとった任意成分をもつ二つのシンタグマ—述語的シンタグマと補完的シンタグマ—から成るものとして表すことも（特にフィルモアが提示した、能動 active 構造における主体・客体関係表現の構造式もこのことを促している）、難しいことではない。しかし、実態が示しているのは、能格構文とは違って、活格構造において最低限必要なのは一つ、つまり述語的シンタグマ：Nact—Vact だけである。近い補語、行為客体、ないしは行為が向けられる客体は活格構造の全く任意の成分である」；「活格構文ないしは不活格構文として認定するための必要かつ同時に十分な条件として存在する文成分は主語と述語だけである。当然、文の両モデルの構成中には補語もあり得るが、その存在は任意のものである...活格類型と能格類型の言語がその統語的（syntagmatic）な構成面で文の構造式原理に差をもつことは、おそらく、活格構造と能格構造の類型的な区別の必要性を裏付ける根拠の一つになり得るものである」；「活格言語に機能する補語の種類も主成分に入れることはで

¹⁸ 能格言語例えばアプハズ・アバジン諸語、大多数のパプア、アルゴンキン、チヌーク・チムシアンの諸語等にも、動詞型は残る。

きない—それらが完全に従属成分として述語群中に入ることは、何の疑いもない」[クリモフ 1999, p.100, 47, 94, cf.95]¹⁹。

さて、活格構文と不活格構文を形成する活格言語の文類型、すなわち、活性項＋活格動詞（行為動詞）、不活性項＋不活格動詞（状態動詞）というシンタグマ構造が表す呼応関係は、客観的現実関係の模写であることを強調しておきたい。活格言語は主体・客体原理ではなく活性・不活性原理によって構造化されるのであるから、この活性項そのものは主体項そのものを直接的に反映したものではない。内容類型学は、少なくとも初期活格言語や基準的な活格言語の段階に「活性類」概念に意志や制御の意味価を前提としていない。大多数の活格言語が動詞型であることも、これを傍証する。活性項は文法的標識をもたない活性類名詞であって、意志・制御力をもった「主体」として認識されているのではない。この文モデルは活性類（有生類）の指示対象とそれが関係する活動・運動・状態という客観的現実を図像的（iconic）に模写したにすぎない、別言すれば、言語外現実を写像、写実として提示するのである。クリモフは繰り返し、活格構造を客観的現実の「図像的模写」（*иконическое отображение* [iconic reflection]）という定式化によって説明している：

活格構造の「記述される場はテキスト中に常に図像的に模写される」[クリモフ 1999, p. 118]；「活格動詞が二重人称（二価）活用原理の特徴を含む形態構造であっても、ここに表される場の両参与者—主体と客体—内のどちらか一方の観点だけを反映させようとしても、それは不可能である。その結果として、ここでは現実の事実関係は、常に図像的（iconic）な模写を受けるのである。こうした状況が、その構造要素を主体・客体関係の伝達に定立しない、活格構造の本質そのものを反映したものである」[クリモフ 1999, p.115]；主体・客体「関係の伝達手段自体は、他の種類の言語におけるその実現手段とは原理的に異なるものである（活格構造の内的論理は、言語外現実において活性的行為項と不活性的行為項の間に存する関係のより一意的な模写を要求するものだという確信が生れてくる）」[クリモフ 1999, p.45]。

主格言語のプリズム越しに、活格言語の活格（系列接辞）と不活格（系列接辞）の本質を意志・制御の有無に関するシステムと見なし、結果として split S（分裂 S）や fluid S（流動 S）を認定するのであれば、それは内容類型学の観点からすれば hysteron proteron である。勿論、活格言語の後期段階へ向うにつれて、主体・客体的動因子が強まって有生類→活性類→活格→主体格 vs 無生類→不活性類→不活格→客体格とい

¹⁹ Cf. 能格言語、主格言語のシンタグマの差異については、[Климов1973, p.90-91]、[山口1995, 69-70, 74-75]

う対立へ再解釈されて行くから、その段階位相では当然、意志、制御性の意味を帯び得る²⁰。印欧語等主格言語は現に活格型を原点としてその方向へ向って再解釈されて来たのである。

II-2-3. 形態レヴェルの特徴。動詞の分野では、①二系列（活格系列と不活格系列）の人称接辞の対立²¹、②動作態（Aktionsart）あるいはアスペクト、③遠心相と求心相（非遠心相）というヴァージョン（相）の対立、のような形態範疇の区別が存在する。一方、名詞形態は一般的に動詞形態の発達に比し貧弱であるが、④有機的（分離）所有と非有機的（非分離）所有という独特の所有範疇の対立、また⑤曲用パラダイムが存在する場合は二つの基軸格である活格と不活格の対立、がある。なお、以下の表に見られる1人称複数の接辞系列に内包形（inclusive）と排外形（exclusive）の区別が見られるが、大多数の言語学者がアメリカ諸語（マスコギ、スー、トゥピ・グワラニ諸語）の特徴として認定し、クリモフは70年代にはこれを活格言語の包含事象として捉えて来たのであるが、80年代に入ってこれが類別型言語（後述）の包含事象であり、活格、能格、主格言語に残滓的に観られるとする立場をとっている[クリモフ 2016, p.180-182]²²。

① 動詞の二系列（活格系列と不活格系列）人稱接辞²³

1) 活格系列人稱接辞は活格動詞の主体を、不活格系列人稱接辞は状態動詞の主体および活格動詞に起り得る客体（直接客体も間接客体も）を表現する。2) いわゆる「不随意行為・状態動詞」の主体を表す第三の系列（情緒系列）の人稱接辞を区別する言語（スー、マスコギ、イロコイ・カド語族）もある。

²⁰ 例えばグワラニ語族カミュラ語における活格動詞と状態動詞の構成については、[クリモフ 1999, p.70-71]も挙げているが、同語の研究者 L.セキの研究では、活格接頭辞を付す自動詞のクラスに属する「意志的な」動詞「話す」がコントロールできない行為つまり非意志的あるいは不随意的な「話す」行為を表すときには不活格系列3人称接頭辞 i- を取るという (cf. 活格系列3人称接頭辞= o-)。詳細について[柳沢民雄 (2) 1997, p.96]参照。

²¹ 二系列でなく一系列の人稱接辞を位置的に区別して、初めの方は不活格系列、後ろの方を活格系列に使うアサバスカ諸語に知られている[クリモフ 1999, p.112]。

²² バントゥー系諸語においては、1人称複数を越えて全人称に及ぶ相互人稱代名詞「君（達）+彼」、「彼ら+彼」、等が形成されており、内包形と排外形の対立は類別組織に相関するものとして、[クリモフ 1999, p.88-90]での記述を修正している。一方、[Климов1973, p.217-218]では、チョクトー語の例 hapišnu 「君（達）を含む我々」と pišnu 「君（達）を含まない我々」を挙げ、対話者を活性的なものとして表象する場合と不活性的なものとして表象する場合の区別に基くもの、としていた。

²³ 同表グワラニ語は、[クリモフ 1999, p.110]から[クリモフ 2016, p.109]へかけて若干修正されているが、ここでは[山口 1995, p.98]の接辞系列表に従った。

例 グワラニ語 (トゥピ・グワラニ語族/ 南米)

人 称	単数		複数	
	活格(A)系列	不活格(IA)系列	活格(A)系列	不活格(IA)系列
1	a-	še-	ya-(inc), ro-(exc)	yane-(inc), ore-(exc)
2	re-	ne-	pe-	pene
3	o-	i-, ∅	o-	i-, ∅

ダコタ語 (スー語族/ 北米)

人 称	単数		複数	
	活格系列	不活格系列	活格系列	不活格系列
1	wa-	ma-, m(i)-	u ⁿ -(inc), wa-(exc)	u ⁿ -(inc), ma-, m(i)-(exc)
2	ya-	n(i)-	ya-	n(i)-
3	∅	∅	∅	∅

以下に若干の例文を拾っておく。トゥピ・グワラニ諸語は、少数の活格動詞を例外として、原則として単人称活用（動詞形に両系列の片方だけを組み込む）に従う。スー諸語には、状態動詞は単人称活用、活格動詞は単人称活用形も二重人称活用（動詞形に両系列とも組込む）もあり得る。

グワラニ語：

活格動詞 a-me?e (私が・与える[それを]), re-me?e (君が・与える[それを]), o-me?e (彼が・与える[それを]); a-wewe (私が・飛ぶ), o-wewe (彼が・飛ぶ); še-pete ([彼が]・私・打つ), ne-pete ([彼が]・君・打つ), yane-pete ([彼が]・我々[あなたを含む inclusive]・打つ);

状態動詞 še-miri (私は・控えめだ), nde-miri (君は・控えめだ), i-miri (彼は・控えめだ)

スー諸語 (アシニボイン語)

状態動詞 ma-wašte (私は・善良だ), ma-yazá (私は・病気だ), ma-kakíza (彼は・控えめだ)

スー諸語 (ダコタ語)

活格動詞 wa-kaška ([それ]・私が・縛る), ya-kaška ([それ]・君が・縛る), kaška ([それを]・彼が)・縛る), ma-ya-kaška (私を・君が・縛る), ma-kaška (私を・縛る・[彼が]), ni-čaška (君を・縛る・[彼が]) [i + k > č], uⁿ-kaška ([それを]我々が inclusive・縛る), ya-kaška-pi ([彼らを]・君達が・縛る), kaška-pi ([それを]・彼

らが]・縛る) [複数有生類に関係するとき接尾辞-pi を接合];

なお、活格動詞語形中の不活格系列人称接辞(近い補語)は直接補語も間接補語も表す:

直接補語例 a-má-pa (私を・打つ[彼が]), a-ní-pa (お前を・打つ[彼が])

間接補語例 má-kkú (私に・与えた[彼が]), ni-cú (お前に・与えた[彼が])

文成分がある場合の、動詞形におけるその呼応(一致)に関する例を挙げておく:

カマユラ語(トゥピ・グワラニ語族)

活格構文

1. wararawijawa(犬) moja(蛇) o-u?u(3active-咬んだ)

「犬が蛇を咬んだ」

2. wera(鳥) o-wewe (3active-飛ぶ) 「鳥が飛ぶ」

3. wyrapy-a (鷺) ka'i-a (猿) tete (only) o'u (3active-食べる)

「鷺が猿だけを食べる」

不活格構文

4. ita(石) i-po-wej (3inactive-重い) 「石が重い」

5. i-?ajura(3organic 彼-首) i-haku(3inactive-長い) 「彼の首が長い」

クリモフによれば、活格構文において活格動詞の構造に最も多発するのは、活格系列人称接辞である。ただし、活格系列 3 人称主体接辞は動詞語形中で欠落しがちで、行為客体を指示する不活格系列接辞だけを組み込む。特に、1, 2 人称客体(不活格系列接辞)が登場するときは、3 人称主体(活格系列)の接辞は欠落するというかなり一般的な原則がある。活格言語では、3 人称は非常にしばしばゼロ形式である(特にナデネ諸語やスー諸語に特徴的である)[例文、解説ともクリモフ 1999, p.112-115]。概説的にはその通りであろうが、これでは以上の活格構文例(例文 1, 3)の主体・客体関係が分明ではない²⁴。以上の活格構文はいわゆる動詞型である。すなわち文成分としての名詞項は無徴(unmarked)であって、主体・客体関係を判断する基準は動詞語形中の接辞配置のあり方である。トゥピ・グワラニ諸語では少数の活格動詞を例外として原則として単人称活用であること、同語の上の活用表では活格系列 3 人称接辞 o- であること、また活格動詞構造一般において最も多発するのは活格系列接辞であること、という条件だけでは、いささか心もとない。以上の活格構文 1, 3 の文成分である犬と蛇(1)、鷺と猿(3)は、共に活性類(有生項)だからである。例文 2, 4, 5 の主体(主語)の認定は簡単である。例文 2 は近い補語がない活格構文であり、動詞形には活性項「鳥」だけに呼応する活格系列接辞だけが置かれる。例文 4, 5 は不活格構

²⁴ 例文 1, 2, 4, 5 は[クリモフ 2016, p.117-118]で、活格言語の典型的な文例としてまとめて挙げられている。ただし、これらは、[クリモフ 1999, p.96, 77])にも分散的に挙げている。例文 3 については[柳沢(4)1999, p.243]より引用。

文であるから近い補語はあり得ず(仮に遠い補語があっても動詞形には反映されない)、動詞形には不活性項「石」あるいは「首」に呼応する不活格系列接辞だけをおけばよい。例文5の「彼の首」に付く「彼の i-」は有機的(非分離)接辞であって、これは動詞形に組込む不活格系列接辞と同形である。すなわち不活系列接辞を名詞の有機的所属形に用いるのである(後述)。

柳沢は、カムユラ語の人称接辞系列の現れ方についての L.セキの調査とシルヴァースティーンの周知の名詞類階層(1 人称代名詞-2 人称代名詞-3 人称指示代名詞-固有名詞-普通名詞[人間-有生物-無生物])を総合して、カムユラ語では「階層の高い人称接辞の方だけが動詞形に現れる(ただし、1, 2 人称単数の場合は融合形が現れる)、もし階層が同じ場合(主体と客体がどちらも 3 人称の場合)には主体の接辞が現れる…。即ちここで見られることは、発話に参加する人称は必ず何らかの形で動詞接辞に表現されるのに対して、発話に参加しない客体は如何なる形においても動詞接辞に表現されない、ということである。また主体と客体の両方が発話に参加しない場合、主体を表す接辞が動詞に現れることを示している」と結論している²⁵。しかし、それでもなお、上例 1, 3 の活格構文では、二つの名詞項成分は共に活性(有生)類であるため、活格系列接辞 o- が「犬」と「蛇」の何れを、あるいは「鷲」と「猿」の何れを指示するのか、つまり何れが主体あるいは客体であるのか、が決定できない。柳沢はこれについても、主体と客体が同じ有生性階層に属する場合には、格の発達がない初期および基準型の活格言語では、統語関係を決定するのは語順である、と考えている[柳沢(4)1999, p.243]²⁶。ちなみに、上のダコタ語(スー語族)活格動詞形の例を見ると、1, 2 人称 A と 3 人称 O の組合せでは動詞形に A (1,2 人称) が指示され、3 人称 A と 1, 2 人称 O では O (1,2 人称) が指示される点は、カムユラ語と同じであるが、2 人称 A と 1 人称 O ではダコタ語の場合二重人称活用に従い O-A 両者が指示され、また 3 人称 A と 3 人称 O では両者ともにゼロ形式で表されることが判る。

最後に、不随意的な行為・状態動詞の主語を表す「情緒」系列の人称接辞系列の例である：

²⁵ [柳沢(4)1999, p.234-235]では、動詞形に指示される接辞は、1,2 人称 A-3 人称 O では A 接辞だけである。同様に、3A-1,2O では O、3A-3O では A、2A-1O では O、1exclusiveA-2O では A、1A-2O では A/O (融合形)、1A-2plO では A/O となるという(exclusive は 1 人称複数 of inclusive 「内包形」=we with you に対する「排外形」=we without you)；なお、1,2 人称融合形とは、カムユラ語 oro- 「私が+お前を//お前に」、opo- 「私が+お前たちを//お前たちに」；ダコタ語 či- 「私が+お前(たち)を//お前(たち)に」[クリモフ 1999,] p.113。

²⁶ ただし、クリモフは、カムユラ語の I (人称代名詞相当)、II (不活格系列)、III 系列(活格系列)の表を挙げた後、a-i-nupā 「私が-彼を-打つ」の例(1A-3O で A,O 共に現れる例も)、ore-nupā 「私達を exclusive-打つ(彼は)」(3A-1O で O がゼロ形の例)も引証している[Климов 1973, p.222]。

アシニボイン語（スー語族） **mn-uhási**「私には-ない」, **n-uha**「お前には-ある」
 セネカ語（イロコイ語族） **aka-thunte**「私には-聞える」

これ等における **mn-**, **n-**はそれぞれ単数 1 人称、2 人称の、また **aka-**は単数 1 人称の「情緒」系列接辞である[クリモフ 1999, p.112]。

② 動作態 (Aktionsart)

動作態は文法性の要素よりも語彙性の要素が優勢であること、動作態は動詞語基の意味を具体化するが、時制は動詞述語と他の文成分との関係を指示することに関連して、一般的にテンス（時制）に対してアスペクトが歴史的に先行することは、従来から言われてきたことであるが、広義でのアスペクトとしての動作態（アクチオンスアルト）の優先的発達、活格言語の包含事象である。また、活格動詞は状態動詞に比べてより多数の動作態範疇を発達させており、アサバスカ語派サーシー語では未完了 (imperfective)、完了 (perfective)、継続 (continuative)、反復 (iterative) の区別をもつものに対して、状態動詞では未完了と完了だけであるという。実際には言語毎に偏差があるが、最も一般的には、完了 perfective, 未完了 imperfective, 始発 (起動) ingressive, 継続 (持続) progressive, 反復 iterative, 強調 intensive, 願望 desiderative, 希求 optative 等々を接頭辞あるいは接尾辞等で表す。例えば、カムユラ語 **rak**完了 **jeziwe rak-i-ker-í**「今日彼は眠った」; **-rané**継続 **n-o-karu-ite-rané**「彼は (ずっと) 食べていない」; **-katú**強調 **n-a-kw-aha-katu-ité**「私は全く知らない」; **-potát**願望 **a-porahaj-potát**「私は踊りたい」; **-t(a)**希求 **jeziwe t-a-poraháj**「今日私は踊るつもりだ」。一方、動詞の階梯は時序的なものでないから、文脈によって様々なテンス（時制）に翻訳できるという：アシニボイン語（スー諸語）**ma-ka**「私が座っている//座っていた」; **uṅowápi**「我々が歌う//我々が歌った」; **ecúpi**「我々がする//我々がした」[クリモフ 1999, p.119-120]。

クリモフは、印欧語のテンス・アスペクト史における時階 (временная градация [temporal gradation]) に対する動作態範疇の先行性についてのメイエ (A.Meillet) の見解に言及しながら、活格言語におけるこの強調相 intensive、反復層 iterative、願望相 desiderative 等のような動作態範疇目録が印欧語のそれに類似していること、印欧語の時制形の成立は基本的には活格動詞と状態動詞の他動詞と自動詞への再編に関連しており、主格化へ向けての特徴的な過程だ、と指摘している[クリモフ 1999, p.176-177]。

ヴントは、法 (mood) の主観性、時制の相対性に対して動作態 (Aktionsart) の客観性を指摘したが、グフマンも「動詞時制の主観性に対する Aktionsart の客観性は、

全ての研究者の強調する」ことを確認している[クリモフ 1999, p.120]。この「客観性」という特徴は、上述のように、まずは活性類と活格動詞、不活性類と不活格動詞の呼応が客観的現実の模写、写像ないしは写実を基本とする構造であること、また活格言語の構文は形態的に概して動詞型せいぜい混合型までであり名詞型構文が見られない、すなわち名詞の格形の発達が弱いのであるから、名詞項は活性類あるいは不活性類という類別にすぎず、しかも類別そのものは類別型言語と違って潜在範疇であるから、いきおい語彙の機能的負担が大きくなりがちな類型であること、ともよく符合している。なぜならば、基本が動詞型であるということは動詞述語優勢であることを意味しており、動作行為 *Aktion* の具体的なあり方(態様) *Art* そのもの、具体的な姿・様子の方が常に気がかりで、そのことに意を用いる類型なのである。ここには、主体を優先し主体を基準にして動作過程を眺めるあるいは振返る態度はない²⁷。動詞の語彙化の本質よりも項の関係のあり方から類型像を導出する関係類型学の手順の寄って来る発想の起点も、正にこの点にあるように思われるのである。

③ 活格言語のディアテシスとしてのヴァージョン (version) – 遠心相と非遠心相 [求心相] (centrifugal – noncentrifugal [centripetal] version ; extrovert – introvert contrast) – の対立

主体・客体関係の伝達に定立する主格言語の他動詞～自動詞の対立を前提とする態 (voice) の範疇は存在し得ない。例えばクリモフは、ホイジャーによるナヴァホ語の能動的自動詞 *yí-bééž* 「それが沸いている」～能動的他動詞 *yí-ł-bééž* 「彼がそれを沸かす」の分類が実は同語の遠心相～求心相分類であること(ゼロ指標自動詞から他動詞をつくる-ł-指標が遠心相指標であること)、あるいはまたトリンギット語(ナデネ語族) *Xwalisín* 「私がそれを隠した」～*aXwdlisín* 「私が隠れた」の対立における *d*-(*di*-) が求心相指標であること、を導き出している[クリモフ 1999, p.117-118]。

相 (version) は客観的現実の図像的模写 *iconic reflexion* を本質とする類型を反映したディアテシスである。記述される場はあくまで図像的模写(写像)を前提としたものである。

遠心相とは行為が活性行為項の圏内を超えて広がり行くこと、非遠心相(求心相)とは行為が活性行為項内に閉じこもること、を表す: *ex.* 燃やす～燃える、連れて行く～行く、咬む・刺す～ちくちくする、乾かす～乾く、目を覚まさせる～目を覚ます、引きずる～這いずって行く、等々(これは能動～受動の対立あるいは他動詞～自動詞の対立ではない。遠心相と求心相の表徴は専用指標の有無によって表されるが、通常、

²⁷ Cf. [山口 2005, p.260-261, 311-312]を参照。

遠心相は無徴 (unmarked)、求心相は有徴 (marked) である。例えば：カマユラ語 (トゥピ・グワラニ語族) 遠心相 *o-juká* 「彼が (彼を) 殺した」～ 求心相 *o-je-juká* 「彼が (体を打って) 死んだ」；*ere-kətsi* 「君が (彼を) 切った」～*ere-je-kətsi* 「君が自分を切った (怪我した)」の場合の *-je-* は求心相指標であり、オノンダガ語 (イロコイ・カド語族) *waʔh-atat-é.yoʔ* 「彼が (体を強く打って) 死んだ」, *waʔh-atat-hé.naʔ* 「彼が自分を切った (怪我した)」の場合は *-atat-* が求心相指標である。

ただし、クリモフは、求心相が主体相や相互性の意を兼ね備えるような場合も挙げている：例えばアシニボイン語は *-ci-* 接辞によって再帰相 *wašte-ni-ci-naka* 「お前が自分を愛する」も主体相 *wapáha waʒi opé-mi-ci-tu* 「私が自分用に (自分のために) 帽子を買った」, *ukí-ci-caga* 「私たちが自分たちのためにする」を表す場合もあるという。また、グワラニ語では相互性 (お互いに～し合う) : *o-yuká* 「彼らが彼を殺す」に対して *o-yo-yuká* 「彼らがお互いに殺し合う」; *o-nupá* 「彼らが彼を殴る」に対して *o-yo-nuá* 「彼らが互いに殴り合う」の意味がある [クリモフ 1999, p.115-119]²⁸。

こうした遠心相と求心相の対立が古い印欧語動詞の能動相と中動相の対立の原点となる対立であることは、クリモフは勿論グフマン等が指摘して来たところである (cf. 仏語代名動詞や露語再帰動詞の機能) [クリモフ 1999, p.175]。また、ガムクレリゼ・イヴァノフ「印欧語と印欧人」も、印欧語の中動相の起源が遠心相に対置される求心相であること、また遠心相と求心相の対立が実は活格構造の典型的な所有範疇—非有機的所有 (分離所有、譲渡可所有) と有機的所有 (非分離所有、譲渡不可所有) の対立—に密接に関連している点について記述している (後述) [T.B.Гамкрелидзе, Вяч.Вс.Иванов 1984, p.333-336 他]。

さて、次のような記述がある。活格言語では有生の指示対象を絶対格として「死ぬ」という動詞に添えると「太郎・死ぬ」となり、これに有生の行為者「次郎」を「活格」として加えると「次郎が・太郎・死ぬ」となり、「次郎が太郎を殺した」の意になるという解説である [山口 2005, p.250, 261-262]²⁹。非主格言語の性格として、太郎の死という客観的現実が第一義的であって、その事態への次郎の関りは二義的であるという点で、本稿筆者自身も概ねそのように捉えて来た。しかし、よく考えてみると、これは譬えとして非主格言語一般の特徴を述べたものとしてその通りであるが、活格言

²⁸ cf. Harry Hoijer, *Navaho*, *Lingua* 17, 1967, p.91-95

²⁹ 同じく、同先生退官記念講演「言語における認識の機能と『客観的現実』構築について」(2005)にも、活格は「が」または「によって」の機能に相当する、という趣旨の記述がある。すなわち、「次郎によって・太郎・死ぬ」→「次郎が太郎を殺す」である。後述するが、これは活格言語像というより能格言語像に相応しい解釈である；cf. [山口 1995, p.86-87]。

語と能格言語の具体的な事情の異同性を考えると、活格言語についてはもう少し精密化する必要があると考える。勿論、ソヴィエト期の著名なゲルマニスト・類型学者であるグフマンも、活格言語および能格言語と主格言語の間の指示対象 (denotatum) の世界のモデル化の原則の相違について、前者では思惟の内容を言語構造に図像的に反映するモチヴェーションが支配的であるのに対して、後者では、そのモチヴェーションが欠如しているか、文法構造への外的世界の 카테고리や関係の非図像的な反映が支配的である、と指摘される[山口 1995, p.86]³⁰。しかし、「次郎が・太郎・死ぬ」の譬えが活格動詞の本質そのものを現象化させた「拡散動詞」(上述参照)について述べたものならば、少なくとも基準的な活格言語の構造メカニズムの説明としては少しく修正する必要があるのではないかと考える。すなわち、上述のように、活格言語の発展段階は各様であるが、活格言語では同じ客観的現実を表す活格動詞「殺す・死ぬ」は、いわゆる「拡散動詞」と呼ばれる同一語彙素に属することに加えて、多くの活格言語の文類型は動詞型である。また、拡散動詞は同じ客観的現実を言語の上でのみ「殺す」と「死ぬ」を遠心相と求心相として区別するにすぎない。活性類(活性項)＋活格(行為)動詞、不活性類(不活性項)＋不活格(状態)動詞のシンタグマが活格型言語の構文の基本であることも、上述の統語法の特徴で述べた通りである。また、接辞系列について上述の例文が証するように、活格言語では第一には、一般的に3人称接辞の発達が弱くその接辞がゼロ形(無徴)であることも、第二には、近い補語(活格構文では直接客体を表す場合の近い補語の文成分、不活格構文では主語の文成分)がしばしば動詞に抱合ないしは付接されることも、このシンタグマのあり方を補強している。そこで、「次郎(活性類)が・太郎(活性類)を・殺す」場合には、無徴の二つの3人称有生(活性)の文成分の並列(文成分の語順は主語「次郎」・直接補語「太郎」)に次いで、動詞語形自体の構造中に「次郎」と「太郎」を指示する接辞を組み込む必要があるが、その内動詞形中に組みこむのは、原則として主語としての名詞成分に呼応する接辞だけである。すなわち、次のようになる：基準型活格言語では名詞成分は無徴(unmarked)である、すなわち動詞型構文が支配的であるから、「太郎が死ぬ」ならば、太郎は無徴のまま「太郎(活性項) / 3人称活格系列接辞-死ぬ/殺す-求心相指標」となる(有徴の求心相指標を接辞する)。もし「次郎が太郎を殺す」のであれば、「次郎(活性項) / 太郎(活性項) / 活格系列接辞-死ぬ/殺す-遠心相指標」となるはずである。活格構文において二つの活性類名詞が並列する場合、一般的には、

³⁰ cf. M.M.Гухман, Историческая грамматика и проблема диахронических констант (グフマン「歴史的類型学と通時的定数の問題」), 1981, стр.236-237。「通時的定数 diachronic constant」については[クリモフ 2016, p.186-187].

(次郎—太郎—動詞)の語順をとることの他、動詞語形中には活性項主語「次郎」を代理する活格系列接辞だけを組み込んで、「太郎」に呼応する接辞は置かない。勿論この場合、語彙的活性類である「太郎」が文法的不活性項となるのであるが、動詞語形中には反映されず、文成分として動詞に付接して措かれるにすぎない。このことは、他の拡散動詞の場合も同じである。勿論、「太郎が(活性類)・石(不活性類)・動く/動かす(拡散動詞遠心相)」→「太郎が石を動かす」のような説明は可能であろう[cf. 山口 2005, p.249]。しかし、結論的に述べれば、つまるところ活格言語とは、原理的に主体と客体の対立自体を欠く言語であるという点に尽きる。その点でも類別言語の継承者である。

ところで、関係類型学は、活性項に意志や制御の有無を前提とした上で、遠心相と求心相を理解している節がある³¹。しかし、内容類型学は、少なくとも初期活格言語や基準的な活格言語の段階の「活性類」概念に意志や制御の意味価を含めていない。活格言語の、**活性項+活格動詞**、**不活性項+不活格動詞**の呼応は客観的現実の写実(模写)・写像であり、この段階位相では、そうした主観的要素を含んでいない。つまり、「活性類」は意志・制御力をもった「主体」として認識されているのではない。意志・制御性という誤解の根源は、**version** (遠心相と非遠心相=求心相)の起点を活性項ではなく主体項だと見なす点にある。上の一つの語彙素「殺す・死ぬ」の場合も、「殺す」は活性(有生)類が生来的にもつ外向・遠心的運動にすぎず、「死ぬ」はその内向・求心的運動である。尤も、活格言語の後期段階では主体・客体的動因子が強まってくるとともに活格と不活格の対立形式が発達して来るから、有生類→活性類→活格→主体格 vs 無生類→不活性類→不活格→客体格という対立へ再解釈されて行く。そうなれば、意志、制御性の意味を帯び得るのは当然である。正にこの点にこそ、活格言語→主格言語への直線的連続性につながる再編過程があり、印欧語等は正にこのルートを辿ったと思われる。これは、相対的な動詞優勢構造を脱して名詞項が動詞から自立して行く様を顕しているが、名詞項の自立化という土壌の上にこそ、主体による意志や制御性という主観的要素の含意能力が高まって来るのである。上の例文に見るように、1, 2人称を主語とする主体相や相互相的な構文の出現自体は、あるいは主体・客体原理による構造化へ誘引するきっかけを作ったかもしれない。段階を区別せず、

³¹ ガムクレリゼとイヴァノフの共著「印欧語と印欧人」にも、ヴァージョンの説明において、「行為の, субъект[subject]からの反方向性を表す遠心相」に対する「行為の, субъект[subject]に向けての方向性を表す求心相」という記述がある[T.В.Гамкрелидзе, Вяч.Вс.Иванов, 1984, p.333]。これは主格言語における主語主体の意でなく、統語範疇としての subject あるいは論理的範疇としての subject の意である。

祖語の決定のように、段階の異なる諸事実を共時的断面で横一列に並べて定義すると、その断面では意志・制御をもつすなわち主体主語格としての活格や意志・制御とは無関係な活格が認定され、split S (分裂 S) や fluid S (流動 S) という図式が生れてくるのかもしれないが、これは主格言語話者の研究者に常に離れがたく付きまとう先験であるように思われてならない。内容類型学は、人類史における言語の構造化において、客観的現実の写実・模写的構造化に次第に主観的・観念的因子が浸透して来てその現実の主観を介在させて表象する、すなわち主体・客体的構造化原理が強まってきたという反映論をよく説明するのである。名詞項の動詞からの解放は、主体の意志性・制御性 (コントロール性) の含蓄だけではない、そこに様々な意味要素 (semantic dimensions) — 役割的要素以外にコミュニケーション的要素や直辞的要素等々を組み込んで行く潜在的可能性を生みだして行くであろうことは、キブリクやイェルモラーイェヴァの研究にも観ることができる[Ермолаева1995]³²。すなわち彼らの研究には、主格言語の将来を推定させる気配がある。主格言語は非主格言語に比してそうした可能性をより多く包摂していればこそ、主格言語の話者たる研究者の視点が勝れて他動詞～自動詞と項の関係の研究に集中する所以であろうか。しかし、活格言語や能格言語にその研究手法を無条件に適用することには限界があると思われる。

④ 所有表現の特徴：所有性範疇—有機的所有 organic possession (非分離所有 inalieble p.) と非有機的所有 inorganic p. (分離所有 alienable p.) の形の対立

上で見た遠心相と求心相という活格動詞のディアテシスたるヴァージョンの意識は、二つの名詞類間の限定関係にも及んでいる。すなわち、ヴァージョンの意識は、二つの名詞類間の分離性と非分離性という意識に通底しており、いわば活性類名詞 (人、動物、植物等) の支配・勢力圏内にあつて活性類名詞と有機的・非分離的に不可分一体であるもう一つの名詞指示対象の関係を表現するである。結果として、もう一つの名詞指示対象の、活性類への不可分一体性、非分離性が所属性、所有性を表現することになる。正に活性・不活性原理の論理に係る活格型言語の包含事象であることを象徴する構造化である。

限定的シンタグマの構成中で、所有者 (限定語・活性類) と被所有対象 (被限定語) の関係は、被所有対象 (被限定語) に有機的所有接辞を付接する手法をとる。これが活格言語での属格の欠落に代替することになる。例えば、hand/ of man あるいは man's/ hand は不可であり、代って、man/his-hand 型の並列的なシンタグマを形成する。この場合の his が有機的 (非分離) 所有接辞で、これは不活格系列動詞人称接辞に等し

³² cf. [2014, 石田]

い。非分離所有接辞と不活格系列接辞の同一性は、所有者とその所有物との有機的一体性、あるいは不拡大性、非分離性を象徴している。行為の遠心性（分離性）と非遠心（求心）性（非分離性）を区別する動詞 *version* との関係関係が透視される。

有機（非分離）的所有接辞を取る被限定名詞の基幹部分を構成するのは、次のような血縁関係、身体部分、植物の部分を表すものである： a) 人、動物の身体部分、植物の部分、の名称、b) 血縁関係の名称、c) 人、動物に密接に関係する事物・概念の名称（名前、影、足跡、夢、矢、キセル、家、獲物、巣穴、巢、等）。これ以外の被限定名詞は、非有機（分離）的所有の形を取る他ない。これらの名詞は活性類指示対象と有機的一体で、活性類の非分離的支配下にある指示対象である。例えば、チリカワ語（アサバスカ語族）有機（非分離）的所有 *bi-tsii* 「彼（自身の）頭」に対して、非有機（分離）的所有 *bi-'i-tsii* 「彼の（例えば食用の）頭」。その他、ダコタ語 有機（非分離）的所有 *mi-taⁿtcaⁿ* 「私の-身体」（*mi*-有機的所有接辞）, *ni-siha* 「お前の-足」（*ni*-有機的所有接辞）に対して、非有機（分離）的所有 *mi-ta-koda* 「私の-友」, *ni-ta-cuⁿke* 「お前の-馬」（*mi*-, *ni*-有機的所有接辞, *-ta*-範疇接辞）（非有機的所有の場合、有機的所有接辞に範疇接辞 *exponent* を補う；情緒系列接辞を補う場合もある）。

クリモフは、スー諸語では有機的所有接辞が身体部分用には *ma-*、血縁関係用には *mi-*のようにその発達段階に応じて形式的な異同を示す場合の他、この所有関係の違いを動詞語形中に代償的に転置する可能性についても言及している[クリモフ 1999, p.119]。柳沢は、この点について、グワラニ語語では名詞形態レベルに有機的所有と非有機的所有表現がなく、動詞構造中で活格/不活格の接辞を組み換えてこれを区別する例を提示している[柳沢 2000, p.267-268]。クリモフはこの代償的転置の有無の中に活格言語の能格化か主格化への再編のカギがあると見ている。すなわち、ヒダーツァ語（スー語族—比較的後期の活格状態の特徴を顕すという[クリモフ 1999, p.57]）には、遠心相、求心相の対立に並行して、初期主格状態とりわけカルトベリ諸語の動詞に現れるような主体相と客体相という原理的に新しい意義を兼務し始めるとして、次の例を挙げる：*wakéo wakéo áara-ikao-c* 「人が人の手を見た」（человек увидел руку человека）から、*wakéo ki-áara-ikao-c* 「人が自分の// 自分に（対して）手を見た」（человек свою / себе руку увидел）（*ki-* は求心相接頭辞、*wakéo* 「人」、*áara* 「手」）のように、有機的所有の関係を活格動詞の語形中の求心相指標によって代償転置する[クリモフ 1999, p.166-167；クリモフ 2016, p.252-253]。別言すれば、主格化した活格言語では、有機的（非分離）所有と非有機的（分離）所有の別を、動詞ヴァージョン（遠心相と求心相）で代償することによって、名詞における活格言語特有のこの特徴的な

所有形式を中和化して行くのである。活格言語のヴァージョンのディアテシスは、主体・客体原理を強めて行った印欧語の主体相や客体相のあるいはまたグルジア語の中立相、主体相、客体相の、形態や構文法に継承されて行くのである。例えば、柳沢は同上論文で、これが多くの現代の印欧諸語で所有与格構文として継承されていることを示している：仏語代名動詞 *Je me casse le bras* (*mon bras* でなく)「私は自分に(→自分の)腕を折った」、独語 *Ich küsse ihr die Hand* (*ihre Hand* でなく)「私は彼女に(→彼女の)手にキスした」の他、露語 *Dym zastlal nam glaza*「煙が・覆い隠した・我々に(→我々の)・目を」、リトアニア語 *Ji sužeidė jai rañka*「彼は・傷つけた・彼女に(→彼女の)手を」等々[柳沢 2000, p.277-288]。また、サンスクリット語の為他言 *pacati*(3/sg)「彼が(他人のために)料理する」～為自言 *pacate*(3/sg)「彼が(自分のために)料理する」、*yajati*~*yajate*「祀る」等々もまた主体相 *active* と客体相 *middle* の区別である。主格言語化したグルジア語においても同じである：*mezobel-i*(隣人 *nom*) *saxl-s*(家 *dat*) *a-šen-eb-s*(建てる 3/sg)「隣人が家を建てる」の文は、「誰のために」家を建てるか、を表示しないから中立相であるが、この文の動詞部分を *i-šen-eb-s* に替えれば、「～が自分のために家を建てる」から主体相 (*i-* = 「自分自身」を表す間接客体マーカー)。さらに *u-šen-eb-s* に替えれば、「～が彼のために家を建てる」から客体相 (*u-* = 3 人称間接客体マーカー)：例 *mezobel-i* (隣人 *nom*) *saxl-s* (家 *dat*) *u-šen-eb-s* (彼/間接客体マーカー-建てる-3/sg) *jma-s*(兄弟 *dat*)「隣人が兄弟の(ために)家を建てる」。(グルジア語与格は、直接、間接の補語を表す)。

一方、能格化を進めた言語では、例えばより保守的なカフカースの能格言語の「東」分布圏では、有機的と非有機的の所有形式を残したのである[Климов1973, p.244 表他]。能格言語では、ヴァージョンのディアテシスが消滅に向かったため、古い有機的と非有機的の所有表現を動詞形の中で代償転置できないため、その所有範疇を長期に保存することになった。それでは、何故能格言語はヴァージョンのディアテシスを失ったのか、ということになる。これは能格動詞の特徴的振る舞い、活格言語と異なる能格言語のシンタグマの特徴等が関っていると、本稿筆者は考えている。これについては、能格言語の動詞、シンタグマの特徴を見た後で再検討したい(後述)。

⑤ 格構成の特徴：活格と不活格

活性・不活性原理による言語構造化に先立って(多)類別言語の段階が存在したと考えられる。内容類型学は、その類別型言語の後期段階には類別原理は有生・無生原理に再編され、これが活格言語の初期段階に見られる有生・無生原理に連続していると考えているが、この段階には名詞形態自体を知らない。類別言語の名詞形態は語形

成から分離していないのである（後述）。「曲用の形成は、有生と無生という安定した名詞区分が、主体と客体という不安定な名詞『類』に席を譲り始めた正にその時期であったとして予測して当然である」[クリモフ 1999, 165]。曲用の発生、起源は、活格言語の発展過程の中にこそある。

活格言語の統語面の特徴で見たように、活格構文/不活格構文は形態的には動詞型、混合型、名詞型の構造式を示すのみならず、動詞型→混合型→名詞型は発展方向も顕している。しかも、現行の活格言語に実際に現れるのは動詞型と混合型だけで、格形態発達は、人称接辞系列の混濁・弱化に対するある種の代償措置である可能性、つまり後発的現象である。活性類と不活性類の意味別それ自体が本来高い機能的負担を負っており、活格と不活格という文法格は各動詞接辞系列の意味機能に代って登場したのである。さらにまた、名詞曲用の発展において誘導的な役割を演ずるのは活性類名詞であってみれば、活格は有徴 *marked*、不活格は無徴 *unmarked* として出発して来たことは当然の成り行きであろうと思われる。

また、主体・客体関係に合せた主・対格は勿論、真の属格は主・対格の転置 (*transposition*) である以上存在せず、与格もまた不活格の一機能として潜在している（不活格は状態動詞の主体も活格動詞の直接、間接の客体も表す）。能格段階でも、与・具格は能格の中に眠っており、与格の分離は、能格が間接客体（間接補語）的機能を喪失するという基盤に立って初めて与格が生成されて行く。これは主格構造化への前進を象徴することになる（能格言語については、後述）。

III. 能格言語像をめぐって

能格言語についても内容類型学と関係類型学では異なる言語像を画いている。尤もクリモフ自身、過去において、「深層的・統語的レベルにおいて能格的文類型と見なすべきものは、他動的行為の主体が、非他動的行為の主体とは別様に解され、他動的行為の客体が非他動的行為の主体と同様に解されるような類型である。…このことから、能格構文とは能格類型の他動詞文モデルであり、絶対構文とは能格類型の自動詞文モデルである、ということになる」、とする定義を与えていた[Климов 1973, p.48]³³。ところが、その後の能格性研究の進展を受けて、例えば「カフカース諸語の類型学」1980 に続く「内容類型学の原理」1983 ではこの定義の不正確性を指摘して、次のよ

³³ この定義はほぼ一般的に普及している定義であろうと思われる。Cf. 「能格性 *ergativity* という用語は、…自動詞節の主語 *subject* が、他動詞節の目的語 *object* と同じやり方で扱われ、また他動詞の主語とは異なって扱われる、という文法パターンを記述するために使われる」[Dixon “*Ergativity*”, p.1] ; [ディクソン 2018, p.1]。

うに修正されている：「したがって、非他動的行為の主体が他動詞の客体と同様に解釈されるのに対して、他動的行為の主体は何か別様に解釈されるような組織体系とする、多くの記述研究や理論研究に広く行き渡っている能格組織体系そのものの定義は正確さを欠くばかりでなく（行為の他動性と自動性を援用している以上）、不完全である、と認定しなければならない。この定義は、ここに存在する、他動的行為の主体と間接客体の解釈の重なりを考慮していないからである。…（特に本書の筆者も、過去において、能格的文類型の定義を定式化しようとして、この不完全さを免れることができなかった）」[クリモフ 2016, p.140]³⁴。このように、その後の能格論の進展の最大のポイントは、能格言語における「他動詞」と「自動詞」の実態すなわち能格動詞と絶対動詞の語彙化原理を明らかにしたこと、それは主体（主格）と間接客体（斜格）を融合一体化させた格としての能格の性質の解明にも繋がり、結局、歴史的範疇である他動詞と自動詞というメタ言語を能格言語に適用することの不的確性を鮮明にしたことである。

能格言語の拡大分布域は、ヨーロッパ大陸ではバスク語、北西カフカースのアブハズ・アディグ諸語及び東カフカース諸語のナフ・ダゲスタン諸語、南東カフカース諸語のレズギン諸語であり、エトルリア語についても能格性特徴に関する仮説が存在する。フルリ・ウラルトゥ諸語、シュメール語のような近西アジアの古代語も、中央アジアのブルシャスキ語、またチベット・ビルマ諸語の他、パプア諸語やオーストラリア諸語、チュクチ・カムチャッカ諸語、エスキモー・アリュート諸語、ポリネシア諸語などが考えられている。さらにまた、北米諸語には活格言語以外に能格言語も存在しており、チヌーク・ツィムシアン、アルゴンキン・リトワ、中米のユート・アステック、マヤ・キチェ語族の諸語、南米のタカナ・パノ諸語等が能格言語に属している。クリモフによれば、これら能格言語の中で最も広範に現れるのは混合型形態タイプ（ $N_{erg}-N_{abs}-V_{erg,abs}$ ）であり、バスク語や圧倒的多数のカフカース諸語、多くのオーストラリア諸語はこれに属し、名詞型形態タイプ（ $N_{erg}-N_{abs}-V$ ）の拡大域は「最も限られて」おり、シナ・チベット諸語の他カフカースの一部等で見られる。それよりははるかに広がりを見せるのは動詞型（ $N-N-V_{erg,abs}$ ）であって、北西カフカースのアブハズ語、アバジン語、エラム語、パプア諸語、圧倒的多数の北米、中米諸語であるという³⁵。特にカフカース諸語は現代の最も典型的な能格言語が広がる地域であるが、クリモフ、アレクセイェフ等は、特にアブハズ・アディグ諸語は能格性の基準に近い

³⁴ Cf. 1980年[クリモフ、アレクセイェフ 2015]

³⁵ 概観的な能格言語拡大分布域については、[クリモフ 2016, p.101-102]；形態的な文型タイプの構造式及び分布域については、[Климов1973, p.43-45]参照。

のに対して、ナフ・ダゲスタン諸語は後期能格状態と定義できる状態、またグルジア語等を含むカルトヴェリ諸語は活格的要素の痕跡を残す主格言語であると認定している[クリモフ、アレクセイェフ 2015, p.10 (原著 p.15)]。特にカフカース諸語は、能格言語観を、そしてそのカギを握る能格動詞、絶対動詞像を一変させるようなキッカケを与えた点で重要であると考えられる。

III-1. 内容類型学における能格言語

III-1-1. 語彙レヴェルの特徴。 名詞分野においては、能格構造の包含事象としての名詞の類(クラス)別はない。前段階から継承した随伴事象として類別を残す諸語(ナフ・ダゲスタン諸語、ブルシャスキ語、オーストラリア諸語、一部の北米諸語、等)はあり、文成分(主語、述語、補語)と述語との呼応関係や限定語と被限定語間の呼応関係において一定の文法関係に関与する。一方、動詞においては、「他動詞」と「自動詞」の実態すなわちその語彙化原理が明らかになるに及んで、主体・客体原理原理に定位しない能格言語の実態に合わせて、**agentive verb**(作因動詞)と**factitive v.**(叙実動詞)という呼称が用いられ、また**agentive~factitive principle**(作因性~叙実性原理)という意味的決定因子(意味的動因子)によって構造化される言語類型とする認識に至っている。ここでは、当面我が国でより普及していると思われる、能格動詞と絶対動詞を用いる。能格~絶対格原理と呼称しても能格言語像を誤導することはなかろう。すなわち、

能格動詞(**agentive v.**)は、主体から客体へ広がり及んで客体を改変・改造させる行為を表す動詞である:折る・砕く、切る、摘み取る・もぎ取る、殺す、切る・割る・伐採する、乾かす、耕す、掘る、焚く、捕える・捕獲する、播種する、等。これらは能格構文を指定する。

絶対動詞(**factitive v.**)は、主体の状態ないしは主体の、客体への影響・波及作用が表面的であることを表す動詞である:①育つ・生えている、横たわっている、(歩いて)行く、走る、クシャミする、歌う、踊る、叫ぶ・わめく、等;②押す・突く、打つ・叩く、つねる、引っかく、接吻する、引っ張る、咬みつく、なめる、等;③待つ、頼む、追いつく、罵る、呼ぶ、見送る、等。

こうした語彙化原理の下では、構造的な「他動詞」、「自動詞」と意味的自動詞、他動詞は一致しないから、能格構造に機能する動詞を他動詞~自動詞とする定義は、能格構造の認識を歪める上に、動詞の統語的ポテンシャルや形態の機能の認識をも誤導することになる。上の絶対動詞について見れば、①は構造的にも意味的にも自動詞で

あるが、②、③には、意味的他動詞（構造的には「自動詞」）が大量に含まれている。要するに、能格言語における「他動詞」＝能格動詞は、主格言語における他動詞と比べると、格段に小規模なのである。この点でも、他動詞、自動詞で能格言語論を押し通すことはできないであろう。したがって、①も②も③も全て絶対動詞であるから、これ等は絶対構文を指定することになる。

差し当って、②、③の絶対動詞の例だけを以下に挙げる（なお、主語は絶対格、能格の補語は間接補語機能を表している。能格、絶対格の機能、能格構文例、等については後述する）：

絶対構文	カバルダ語	「彼が abs・彼を erg・呼ぶ abs.v.」、
		「彼が abs・彼に erg・咬みつく abs.v.」
	ツァフル語	「父が abs・息子に allative[向格]・追いついた abs.v.」

この他、逆に、直接補語をとらない一項文で「走る」、「歩く」、「跳ぶ」、「疾走する」のような絶対動詞（意味的自動詞）が構造的に「他動詞」のように振る舞う、すなわち主語に能格をとる「能格式構文」（ergative-like sentence construction）が存在する：レズギン語「彼が erg・走った abs.v.」、「彼が erg・跳んだ abs.v.」。ただし、能格式構文は、絶対動詞の主語に「能格」を置く場合の便宜的呼称であって、能格言語の包含事象ではなく、かつての活格動詞の主語に活格をとる習わしを引きずる随件事象（frequentalia）である。なお、アヴァール語「蛇が（erg）・私を（loc）・咬んだ」のような二項文も、「咬む」は絶対動詞であり、主語は能格だが補語に斜格をとるため能格式構文とされる[Климов1973, 52]。

また、クリモフは、他動詞派生の使役動詞が使役対象の名詞を直接補語ではなく間接補語に措定する点について、使役（causative）の意味が許可・許容（permissive）の意味から分化していないことを指摘している[2016, p.122]。例えば以下では、主格言語なら直接補語対格「若者を（して）来させた」、「彼を（して）来させた」のようになるはずであるが、間接補語格に置かれている（以下例文の「若者に」の能格の補語は間接補語機能）。したがって、使役動詞は能格動詞として未完成であることになる（「牛」、「本」は直接補語であるが、これは「させる」の直接補語ではなく、「連れて来る」、「持ってくる」、の直接補語である）。つまり、これは使役動詞は意味的には他動詞であるが、構造的には「自」動詞＝絶対動詞的であることを顕していることになる：

ex. アドイゲ語「老人が-m[erg]・若者に-m[erg]・牛を-r[abs]・連れて来させる」
アヴァール語「老人が-ca[erg]・彼に-da[dat]・本を-Ø[abs]・持って来させた」

さらに、意味的他動詞は、上の能格動詞、絶対動詞の他、以下のような情緒動詞、また時に所有動詞、また拡散動詞 *diffused v.* (可変動詞、不安定動詞 *labile v.*) の中にも含まれている。これらも、結局は活格言語としての過去を引きずった残滓動詞群であり、情緒動詞は不随意行為・状態動詞に、拡散(可変)動詞は活格動詞に遡及する動詞である。所有動詞 *verba havendi* は所有関係を表す動詞であるが、これの根底にあるのは存在動詞「ある」にすぎない、cf. 疑似他動詞 *pseudo-transitif* (É. Benveniste)。

「情緒」動詞 — *verba sentiendi* (感覚動詞) 見る、聞く、～したい、好きだ、嫌いだ、等と *verba affectuum* (情緒動詞) 泣く、笑う、覚えている、知る、等、知覚・感覚、願望、必要性、愛を表す動詞。これらは「情緒」構文を指定する：

アヴァール語 *в-ацас-е* (兄弟 *dat*) *abs* (子ども *лъимер III* 類名詞) *б-окъула* (*III* 類接辞-好きだ)「兄弟は・子どもが・好きだ(子どもを・愛する)」; *ди-да* (私 *loc*) *чу* (馬 *abs III* 類名詞) *б-ихъкула* (*III* 類接辞-見る)「私(に)は・馬が・見える(馬を・見る)」

バツビ語 *МитI-ин* (ミト *dat*) *хъо* (君 *abs*) *гу* (見(え)る)「ミト(に)は・君が・見える」(情緒構文; cf. 能格構文との共存の過程が見られる→能格構文 *МитIо-с*) *君 abs (хъо) 見る (гу)*「ミトが・君を・見る」)。

所有動詞—アヴァール語 *в-ацас-ул* (兄弟 *gen*) *в-ас* (息子 *abs I* 類) *в-уго* (*I* 類接辞-ある)「兄弟(に)は・息子が・ある(息子を・もつ)」。ただし、能格構文に所有動詞を期待することはできない。本来的には「～にはある」の存在文である。

拡散動詞(可変動詞、不安定動詞) — 例えば、アブハズ語動詞「除草する」は能格構文 (*сапа 私 акурра 畝 и-с-рашэоит [abs/3sg-erg/1sg-除草する]*「私が・畝を・除草する」) も絶対構文 (*сапа 私 с-рашэоит [abs/1sg-除草する]*「私が・除草作業をする、草取り作業に従事する」) も、また同じく、アディゲ語動詞「売る、取引する」も能格構文 (*къэралы-м заводы-р е-ще*「国家が-*erg*・工場を-*abs*・売る」) も絶対構文 (*къэралы-р ма-ще*「国家が-*abs*・貿易する」) も作ることができる。これ等の動詞は、言語によって規模に差があるが、一定の意味的近似性があり(播種する、耕す、放牧する、編む、織る、紡ぐ、裁つ、縫う、搗いて細かくする、除草する、刈る、等)、構造的に直接補語の存在を前提としない。ヤコヴレフとアシハマフによると、「このグループの動詞はほとんど全て、実際上の内容からすると、最古の農業といわゆる家内生産すなわち土地耕作、牧畜や食糧、羊毛、木材加工等に関する生産の名称である」

[Климов1973, p.122 ; クリモフ、アレクセイェフ 2015, p.11]³⁶。なお、クリモフ、アレクセイェフによれば、北西カフカース諸語では、この動詞群はアブハズ語では 84、アバジン語では 120 以上、アディゲ語で 94、またナフ・ダゲスタン諸語でも量的に差はあるが、チェチェン語では稀な例外、レズギン語では僅少に対して、アヴァール語 70 以上に上るといふ[クリモフ、アレクセイェフ 2015, p.12, 171]。

拡散（可変）動詞が作る絶対構文は欧米等では、用語上「逆受動（逆受身）」*«antipassive»* という特徴づけを受けているが、チェーホヴァ (Tchekhoff C.) は、能格諸言語の拡散（可変）動詞の「非他動」形を「逆受身（逆受動）」*«antipassiv»* なる用語で表すことがこれらの諸研究に広がっているが、これは主格言語にのみ適合する伝統的な言語記述装置から借用したひどく主観的な用語法の採用を意味する、と述べる（論者は、態 *voice* の範疇を他の種類の動詞ディアテシスと峻別している）[クリモフ 2016, p.77]³⁷。クリモフ自身も、これが「非生産的な拡散動詞類ないしは「可変」動詞類が形成する正に絶対構文（同構文が含み得るのは間接補語だけ）のことを想定しているのであるから、このようなアプローチは、能格性を特徴づける本質を訳もなく増幅させることになる（このことはすでに 1940 年代のカフカース学者等が熟知していることである）」と批判している[クリモフ 2016, p.127–128]³⁸。能格言語には態 (*voice*) の範疇はない。活格言語のディアテシスを包含事象としてでなく、随件事象として残すにすぎない。

III-1-2. 統語レベルの特徴。 能格動詞は能格構文を、絶対動詞は絶対構文を「情緒」動詞は「情緒」構文を指定する。拡散動詞（可変動詞）は能格構文も絶対構文も作ることができる。

・能格構文、絶対構文の形態的変種は活格的文類型の場合と同じく、次のような構造式で現れる：

³⁶ Яковлев Н.Ф., Ашхамаф Д.А. Грамматика адыгейского литературного языка, Из-во АН СССР, М.-Л., 1941, 216

³⁷ Tchekhoff C. Aux fondements de la syntaxe: l'ergatif. - *Le Linguiste*. Paris, 1978, 19; *Idem*. La construction ergative en Avar et en Tongien. -- Publications de La Société de la Sorbonne. *Etudes Linguistiques*, Paris, 1979, XXIV.

³⁸ Бокарев А.А. Синтаксис аварского языка, Из-во АН СССР, 1949, с.39-50

	能格構文	絶対構文	能格構文形態的変種例(□は動詞語)
動詞型	N-N-V _{erg.abs}	N-(N)-V _{abs}	(アブハズ語) 私-服-abs[それ]-erg[私]-縫った
混合型	N _{erg} -N _{abs} -V _{erg.abs}	N _{abs} -(N _{obl})-V _{abs}	(バスケ語) 私が erg-水 abs-abs[それ]-運んでくる-erg[私]
名詞型	N _{erg} -N _{abs} -V	N _{abs} -(N _{obl})-V	(レズギン語) 父が erg-本 abs-入手した

① 活格言語の二方向発展と能格言語のシンタグマ：内容類型学は、活格言語から主格言語への発展方向として、活格言語→能格言語→主格言語という媒介ルートと活格言語→主格言語という直線ルートの二つの可能性を想定している、つまり二方向発展説に立っている。上述の I-2 に挙げた表に現れているように、第一のルートをとる例としては多くのカフカース諸語他が、また第二のルートをとる例としては印欧語やカフカース諸語他が考えられる。では、この二方向の選択の起因子は何か。本稿筆者は、この再編方向の違いを惹起したのはシンタグマの違いであり、さらにそのシンタグマの違いを惹起した根底には活格動詞のヴァージョンの再編方向の違いがある、と考えている。能格言語と主格言語のシンタグマは両者とも活格言語に遡及するものであるが、結局それぞれ別方向へ再編されてしまったのである。述語を仲立ちとして述語が先ず主語と陳述の核を形成するかそれとも補語と核を形成するかという点で、主格言語のシンタグマは活格言語のそれをより直線的に継承してきたのに対して、能格言語のシンタグマは活格言語のシンタグマを変型的に再編してしまっただけではないかと考えている。主格言語は SV シンタグマの強化へ、能格言語は OV シンタグマの強化へ進んだのである。

ところで、トルベツコイは、「形容詞＋名詞」あるいは「属格名詞＋名詞」から成る限定的シンタグマ (syntagme déterminatif) の関係に合わせて、能格言語は行為主の名詞が他動詞の限定語となる言語、主格言語は行為客体の名詞がその動詞の限定語になる言語、と考えた。すなわち：

述語的シンタグマ：主語 ＋ 動詞

限定的シンタグマ：動詞 (被限定項) ＋ 客体ないしは行為主 (限定項)

つまり能格言語は動詞と客体項が第一次シンタグマを形成し、それに行為主項が第二次シンタグマとして被さるのに対して、主格言語では行為主項と動詞が第一次シンタグマを形成して、それに客体項が第二次シンタグマとして被さる図を想定したのである。クリモフは、トルベツコイが能格言語受動性論者であったことに留意しつつ、限定的シンタグマを客体的 (objective) シンタグマないしは補完的 (completeve) シンタグマという概念に置き換えた上で、述語的シンタグマと客体的 (補完的) シンタグ

マとの関係図式を認めている[Климов1973, p.90-91]³⁹。OVをSVと見なす能格言語受動性説の裏側には、能格言語の第一次的シンタグマの真実が透けて見える。受動性論者は、能格構造を誤認しているが、能格言語の第一次シンタグマの本質は正しく見抜いていたのである。上述の「次郎によって[erg]・{太郎[abs] -死ぬ}」型の能格言語像は正にこの図式そのものである。ただし、能格言語では本来、「次郎によって[erg]・{太郎 abs-殺す(遠心相)}」であろうが、これは露語に多発する不定人称文(主語をゼロにして、動詞形を3人称複数形におく)あるいはある種の(自然力・自然現象を行為項と想定する場合の)無人称文(主語をゼロにする非人称文)に限りなく相似的である。勿論、露語の不定人称文では行為者(Agens)は不定あるいは不特定多数を想定するから、OVシンタグマだけを述べて行為者については敢えて言わない: Ego (him/acc) ubili ([they] killed) 「彼を・[彼らが]殺した」→「彼は殺された」(不定人称文)のような文意を表す。また無人称文では Vetrom (by wind/instr) svaliro ([it] threw down) derevo (tree/acc) 「風によって・[それが]木を倒した」→「風で木が倒れた」のような文意を表す。

さて、活格構造と能格構造のシンタグマが同じであるかのような理解が広がっているが、それは活格構造の全体像の誤認につながる。活格言語と能格言語のシンタグマ構造は同じではない。陳述の核となる第一次シンタグマ(SV)は活格言語と主格言語では同じであるが、ただ主格言語では副次的(二次的)なシンタグマ(VO)が加わる。既述のように、活格構文に最低限必要なのは述語的シンタグマ $N_{act}\text{-}V_{act}$ だけであり、近い補語、行為客体、行為の向けられる客体は任意成分である(勿論、不活格構文では $N_{inact}\text{-}V_{inact}$)。これは活格構造を能格構造と区別する重要な根拠の一つでもある。勿論、活格文類型には近い補語も遠い補語という直接、間接客体を表す名詞項は存在し得るのであるが、それらは「完全に従属成分として述語群中に入る」⁴⁰。それは述語と統語的に一体化した近い補語の述語内的性格、具体的には「直接」補語成分の述語への抱合、「直接」補語成分と活格動詞の密着配置語順(S[O]Vであれ[O]VSであれOV密着語順)等にも顕れている。活格言語にとって述語的シンタグマこそ第一義的であり、Oは任意の成分として自立性が低いのである。活格言語は客体的シンタグマ(OVシンタグマ)を任意の可能性として潜在させながら述語的シンタグマ(SVシンタグマ)を第一義的とするから、主格言語に直接的、連続的に継承されて行くのに対して、能格言語は述語的シンタグマよりむしろ潜在しているシンタグマ(OV)の

³⁹ cf. [山口 1995, p.69-70]

⁴⁰ 註 19 とそれに関する本稿を参照。

強化・顕在化に向けて再編して行く。Vを仲立ちとしてSと結ぶかOと結ぶかという弁証法の中で、この潜在的語群の中からOが自立性を増しさらにそれを強化して行くのが能格言語であろう。人類史における大きなスパンでの言語発展史を見れば、主格言語では直接客体格としての対格が確定するまでは多義性、多機能性と未分化性が、また能格言語では主体主語格としての能格が確定するまでは多義性、多機能性、未分化性が特徴的である。こうして主格言語でも能格言語でも共通に、第一次的シンタグマという陳述核の外にある成分の未完性、未確定性が見られるのであって、主格言語では直接客体格としての対格の完成度が、能格言語では主体格としての専用能格の完成度が、現在でも発展途上にあると思われるのは、こうしたシンタグマの違いに起因すると思われるのである⁴¹。それでは、このシンタグマの異同性を作り出したものは何か？それは活格言語の *version* (遠心相と求心相) の再編の仕方の違いに相関する、と考える。

そこで、上述のヒダーツァ語の例を繰り返すが、後期活格言語には、有機(非分離)的所有と非有機的(分離的)所有の対立を払拭して行く過程、すなわちこの関係を活格動詞の非遠心(求心、非分離)相 *version* に吸収させて行く過程が見られる：*wacéo wacéo áara-ikao-c*「人が・人・手-見た」(*wacéo*「人」、*áara*「手」) → *wacéo ki-aara-ikao-c*「人が・自分-手-見た」(*ki*-非遠心相=求心相接頭辞)⁴²。多くの点で活格構造との接点を残す主格言語(印欧語、カルトヴェリ語等)では原則として名詞におけるこの有機的所有と非有機的所有の別が存在しない。後期段階の活格言語では主格的構造化が進み、この所有関係が *version* 関係の表現の中に消化・吸収されたまま主格言語の態

⁴¹ 主格型(S+V強化)では、古くは述語の限定・状況語一般格としての対格と直接補語対格が未分化であり、また直接補語と間接補語の分化もない状態であり、次第に直接客体格としての対格が分離され、それに伴って間接補語が分離されて行く(近い補語→与・対格→与格、対格)。ただし、主格言語間には偏差があり、直接客体格としての対格は今日に至るも最終的には確定していないと考えられる。Cf.: ラテン語 *lego librum*「本を読む」と *eo Roma-m*「ローマへ行く」、グルジア語 *swams ywino-s*「ぶどう酒を飲む」と *gaudga gaz-s*(旅に出発した)、等(cf.「新しい言語類型学—活格構造言語とは何か」, p.166)。Cf. 朝鮮語 친구를 *chin-gu-rur* 만나다 *man-na-da*「友に会う」; 기차 *kicha*(머스 *posu*)를 *rur* 타다 *tha-da*「汽車(バス)に乗る」; 남을 *nam-rur* 타다 *tha-da*「木に登る」; 여행을 *johen-ur* 떠나다 *to-na-da*「旅に出かける」等は?。一方、能格型(O+V強化)では、動詞の語彙化原理がこの言語の話者のOV強化への関心を象徴して、主体格としての能格(専用能格)は未分化であり、間接客体格、状況格を兼務する能格が一般的と思われる。すなわち、この種の言語では、主体格としての能格は未だに確定していない。関係類型学が扱う能格言語の能格は全て専用能格であるという前提に立っている。

⁴² ただし、クリモフやバンヴェニストが指摘するように、「自分」という語彙は活格言語の語彙化原理には本来存在し得ない[クリモフ 1999, p.91]。活性項が主体項へ再解釈されていることが前提である。ヒダーツァ語例では、求心相指標が主格言語に特有の再帰代名詞的な接辞に転換して行く様を顕しているであろう。

(voice) 的ディアテシスに転化していくために、名詞形態での関係としては消滅して行くためである。逆に、能格言語（アブハズ・アディゲ諸語、ブルシャスキ語、ポリネシア諸語、アルゴンキン諸語、タカナ・パノ諸語）では *version* が弱化・衰退していくために、名詞形態には活格言語の有機的・非有機的所有形態の対立が保存され続ける。主格言語と能格言語のこれほどまでに明確な対照的な違いは、「結局のところ、活格言語が能格言語の能格動詞 (*agentive verb*) へ、あるいは主格言語の他動詞へ再編されて行く途上での、活格動詞の相 (*version*) 的ディアテシスの運命の違いに起因する可能性がある」[クリモフ 2016, p.253, cf. 251-253 ; cf. クリモフ 1999, p.165, 166-167, 162-164]。

主格言語は活格言語の *version* を *voice* に再解釈しつつ保存して行くのに対して、能格言語では *version* が弱化・衰退して行くのは何故か？活格言語の *version* には、活性項+活格動詞の呼応を再編・強化して行くポテンシャルも、活格動詞述語内に潜在する随伴・補完要素たる客体(補語)とのシンタグマの強化へ向うポテンシャルも、内在する。前者では活性項から不活性項への行為の運動方向性そのものへの関心を保守・継承して SV シンタグマを強化しつつ、活性項から主体項への再解釈を経て主格言語化へ向うのである。そのため、主格構造化に向った印欧古語（例えばギリシャ、サンスクリット語）、カルトヴェリ語（例えばグルジア語）では、遠心・求心相は再解釈されて、能動相 (*skrt* 為他言) と中動相 (*skrt* 為自言) あるいは主体相と客体相と中立相として残っている。そしてその中動相の初期段階には、求心相 > 中動相の中に再帰性、相互性、受動性等が全て未分化に潜在していたと思われる。ところが、能格構造化へ向った言語では、活性項からの行為の方向性そのものへの関心よりも、行為が客体に対して如何に効力を及ぼすかという、客体へ向う行為の質あるいはあり方—強・弱程度—への関心を強めて OV シンタグマの強化へ、したがって能格言語化へ、と転換して行ったと思われる。カフカースの言語を研究したキャットフォードは、能格言語の動詞や構文を貫いている共通特徴を説明して、「具体的な他動詞語彙素あるいは他動詞式 (*transitive-like*) 動詞語彙素と他動詞構文あるいは自動詞構文との相関関係は、『力』ないしは『効力』を前提としていることは明らかである：能格動詞の下では、動詞・客体間の関係はより一層強力 *intensive* である：すなわち動詞が表す行為は、客体に対してより強力な影響力を行使するのである」と述べている[クリモフ、アレクセイェフ 2015, 10(原著 p.15)]⁴³。能格言語における「他動詞」は、客体に変

⁴³ Cf. Cattford J.C. Ergativity in Caucasian languages—Montreal Working Papers in Linguistics (May, 1976)。

化を、行為の「物的」結果を残すのである。この見解は、能格言語における動詞の語彙化原理が客体に及ぶ行為が破壊・改造的な行為か否かを基準とする区分である、という上述の説明に符合している。ここにも、行為の主体との関係よりも客体との関係への関心の強さが窺われる。これに関連して、能格には本来主体格としての意味価は含まれておらず、能格が主体格としての専用能格に至る以前の段階では、多機能的な能格（兼務能格）であって、それは斜格一般の機能すなわち間接客体格あるいは行為の場に伴う状況格一般の機能を負っていたにすぎない。メッシュャニーノフのカルトヴェリ諸語の格パラダイムの主格化過程についての有名な言説：「カフカースのヤペテ諸語においては、能格に定着しているのは専ら行為主の意味である・・・、つまり能格が完全に行為主格にすぎなくなっている。したがって、ここでも、能動化（すなわち主格化－クリモフ）過程は、能格が一般原則として未だに具格と融合している北カフカースの諸言語と比べて著しく前進を遂げている」[クリモフ 2016, p.137]⁴⁴もこの趣旨を述べたものである。（能格言語の格システムについては後述）。

以上を簡単に要約すれば、以下のようになるであろう：

- ・活格言語と能格言語のシンタグマは異なるが、活格言語と主格言語のシンタグマは同じ（SV）である。
- ・主格言語の基軸的（第一次的）シンタグマは、活格言語の基軸的（第一次的）シンタグマの直接的継承であるのに対して、能格言語の基軸的（第一次的）シンタグマは活格言語に潜在するシンタグマの変型的継承である。
- ・直接的継承と変型的継承の分岐を作りだしたのは、活格動詞の *version* の再解釈の違いである。
- ・主格言語は活格動詞の *version*（遠心性と求心性という方向性）そのものを継承するが、能格言語の話者の関心は、*version* の方向性そのものよりも行為の客体（対象）に対する効力、行為の波及性・波及力である。
- ・主格言語の場合、活性項を起点とする遠心性を主体項を起点とする遠心性に再解釈する。
- ・能格言語の場合、強波及性動詞は能格動詞に、弱波及性動詞は絶対動詞に。能格言語にとって随件事象（活格言語の包含事象）である可変動詞の場合は、形式の変換によって能格動詞にも絶対動詞にもなり得る。
- ・主格言語と能格言語のシンタグマの違いは、前者における直接客体格としての対格

⁴⁴ Мещанинов И.И., Новое учение о языке..., с.190; Ibid. Общее языкознание. К проблеме стадильности в развитии слова и предложения. Л., 1940, с.199-201)

の、後者における主体格としての能格（専用能格）の、安定度・確定度の違いとして現象化し、この過程は今日に至るも未完である。

② 能格類型の文成分の語順—クリモフは、「S(O)V 語順は能格性固有の包含事象とは認めがたい（したがって、内容類型学にとって関与的な特徴とは見なし難い）けれども、この語順は實際上全ての能格諸言語において文体的に中立的な語順として一貫している」、という[クリモフ、アレクセイェフ 2015, 17[原著 26]]。すなわち能格構文は主語—（間接補語—）直接補語—能格動詞（agentive v.）、絶対構文は主語—（間接補語—）絶対動詞（absolutive v.）が基本である。また、「情緒構文と所有構文の語順は、原則として能格構文の語順式を反復したものであるが、違いは直接補語には嵌め込む位置はないということである。したがって、多かれ少なかれ SOV という単一の式が能格類型の全ての文モデルにとっての特徴だ、という結論すべき理由がある」、とも[Климов1973, p.94]（O=直接補語；O'=間接補語）：

S —(O')—O—V_{agent}（能格構文） S—O'—V_{affect}（情緒構文）

S —(O')—V_{fact}（絶対構文） S—O'—V_{poss}（所有構文）

この語順は、アブハズ・アディゲ諸語、ナフ・ダゲスタン諸語というカフカース諸語の他、エスキモー・アリュート諸語、パプア諸語、シナ・チベット諸語、ブルシヤスキ語等にとって概ね典型的な語順であり、チュクチ・カムチャッカ諸語等では SVO 語順と競合するという[Климов1973, p.93-95]。

III-1-3. 形態レベルの特徴。 能格性の関係は、活格言語の場合と同じく、動詞型、混合型、名詞型何れの文類型でも表すことができる。したがって、動詞に形態がある（動詞型、混合型の）場合は能格系列と絶対格系列の二系列の人称接辞が機能し、これら接辞が欠如（名詞型）あるいは弱化する（混合型）場合はその機能を代償すべく能格と絶対格という二つの位置格が発達する⁴⁵。

能格系列接辞あるいは能格は能格動詞の主語（主体）及び能格動詞、絶対動詞の下での「間接」補語（「間接」客体＝斜格機能）を、絶対格系列接辞あるいは絶対格は絶対動詞の下での主語（主体）及び能格動詞の下での「直接」補語（「直接」客体）を表す。

① 動詞の二系列（能格～絶対格系列）人称接辞：

両系列の対立が単・複の全人称に具わる典型的な言語はパプアのカヌム語に現れるが、大多数の能格言語はこれほどまでに徹底した組織をもたず、3 人称に両系列の対

⁴⁵ 註 75 参照

立がなく、能格接辞は接頭辞で、絶対格接辞は接尾辞で表す言語（北米ツィムシアン語）、両系列の対立が単数にのみ存在する言語（中米マヤ語）、等多様である。以下左表はパプア・カヌム語[クリモフ 2016, p.128]、右表は北米ツィムシアン語である[Климов1973, p.100-101] :

人 称	単数		複数	
	Abs 系列	Erg 系列	Abs 系列	Erg 系列
1	-nggo	-nggai	-ni	-ninta
2	-mpo	-mpai	-mpu	-mpunta
3	-pi	-péèngku	-pi	-pinta

人 称	単数		複数	
	Erg 系列	Abs 系列	Erg 系列	Abs 系列
1	n-	-ū, -ī	dep-	-em
2	m-	-n	msem-	-sem
3	t-	-t	t-	-t

また、アブハズ語では、3 人称にだけ対立が存在するが、1,2 人称を含む全人称に亘って両系列の接辞配列の違いによって主体・客体関係が標示され、能格動詞では常に絶対格接辞は能格接辞に先行する配列をもつ（上掲アブハズ語例参照）。北米チヌーク語でもアブハズ語と同様、対立は 3 人称だけであるという。クリモフによれば、客体指標を主体指標の前に引き出す配列手法は、純粋に接頭辞による活用構造をもつ言語（アブハズ・アディゲ諸語、北米、中米諸語）ばかりでなく、接頭辞・接尾辞「混合」の活用構造をもつ言語（バスク語、カルトヴェリ諸語、一連のナフ・ダゲスタン諸語、フルリ・ウラルトゥ諸語、シュメール語、ブルシャスキ語、チュクチ・カムチャッカ諸語、エスキモー・アリュート諸語）でも共通であり、この規則の例外はオーストラリアの接尾辞活用構造の「接尾辞」諸語だけだという[[Климов1973, p.101-102]。

したがって、動詞語形内の能格系列、絶対格系列の配置順は、原則として能格構文では客体指標が主体指標に先行し、絶対構文については文成分語順と同じである。すなわち、文成分と接辞指標との関係で言えば、能格構文では鏡像呼応(mirror concord)、絶対構文では跳越え呼応(leapfrog concord)の関係になる。例えば、柳沢によれば、アブハズ語は動詞型文類型をとるから文成分には格指標はなく、主体・客体関係は動詞語形内の能格接辞と絶対格接辞の配置順によって表す。アブハズ語の文成分語順式と接辞指標配置順との関係は次のようになるという[柳沢(1)1996, p.177-178] :

文成分語順： 主語+間接補語+絶対動詞；主語+間接補語+直接補語+能格動詞
 動詞内接辞配置順 絶対動詞： 主体-間接客体-（否定）-語幹
 能格動詞： 直接客体-間接客体-（方向副詞）-主体-（否定）-語幹

ex. アブハズ語能格構文 Həmķwarasa phwəs d-aa-i-gejt (へムクワラサ(人名), 妻, 彼女を[d-]・話者の方向・彼が[-i-]・連れて来た)「へムクワラサは妻を連れて来た」
 ウビフ語絶対構文 sət^o-n sə-ø-yán (私の・父・obl[-n], 私は erg[sə-]・彼を abs[-ø-]・

打つ)「私の父を私は打つ」(ウビフ語はアブハズ・アドィグ諸語の一;「打つ」は絶対動詞、oblique]斜格は間接客体機能の能格系列接辞)

アブハズ語情緒構文 *i-s-gospxojt* (それは abs・私に erg・気に入る)「それは私に気に入っている(私はそれが好きだ)」(erg[ative]能格は斜格機能=間接補語)

アヴァール語情緒構文 *Insu-e žindirgo l'imer b-okula* (父には dative[間接補語], 自分の, 子ども abs, 愛しい)「父には自分の子どもが愛しい(父は子どもを愛する)」(アヴァール語は名詞格指標を付すとともに、動詞語形内で「子ども」III類名詞に呼応する指標[b-])⁴⁶。

アブハズ語所有構文 *d-i-moup* (彼(女)は abs・彼に erg・ある)「彼には彼(女)がある(彼は彼(女)をもつ)」(ergは斜格機能)[クリモフ、アレクセイェフ 2015, p.12(原著 p.18)]。

その他若干の構文例を拾っておく：

バスク語 能格構文 *Ni-k* (私-k=erg) *gizon-a-∅* (人-a 定性指標-∅[=abs])

da-kusa-t (3/sg/abs-語根「見る」-1/sg/erg 私)「私が・その人を・見る」

絶対構文 *Ni* (abs 私) *na-bil* (1/sg/abs 私-行く)「私が・行く」

アヴァール語 能格構文 *v-ac-as* (少年 I類 erg) *istakan* (コップ III類/abs) *b-ekana*
「少年がコップを割った」

(動詞語形内 *b-*は直接補語「コップ」に呼応する名詞 III類指標)

絶対構文 *istakan* (コップ III類/abs) *b-ekana*

「コップが割れた」

(*b-*は主語「コップ」に呼応する III類指標)

アブハズ語 能格構文 *i-s-lag-wajt* (それを abs-私が erg-粉にする)

絶対構文 *i-lag-wajt* (それが abs-粉になる)

北米オジブワ語 能格構文 *ke-nōntō-n* (君を abs-聴く-私が erg)

情緒構文 *ne-nōntw-ā* (私に erg-聞える-彼が abs),

ke-nōntw-ā (君に-聞える-彼が)

⁴⁶ 例文は[柳沢(1)1996, p.177-178; 柳沢(2)1997, p.72]; [Климов1973, p.95]から; また、アブハズ語を初めとする北西カフカース諸語の能格系列、絶対格系列接辞指標については、[柳沢(1)1996, 174]および[Tamio Yanagisawa2013, 117-118]を参照; また cf. [クリモフ、アレクセイェフ 2015, p.19[原著 p.30]]を参照; なお、アヴァール語等能格言語には類別指標を残すものがある。アヴァール語では、名詞、動詞には類別指標を接頭し、形容詞には接尾する: I類(男性類) *v*, II類(女性類) *j*, III類(動物、無生物) *b*, 複数類 *r*あるいは *l*. *bercina-v* (美しい) *v-as* (少年が *v-ugo* (いる)), *bercina-j* (美しい) *j-as* (少女が) *j-igo* (いる), *bercina-b* (美しい) *ruk* ('家が) *b-ugo* (ある), *bercina-l* (美しい) *l'imal* (子ども達が) *r-ugo* (いる)、等。

なお、I-1.理論的前提①②③に述べたように、言語は、意味的動因子→語彙→統語→形態→形態音素という下向きの支配関係によって構造化されて行くのであるから、能格性の原理は動詞語形内における接辞の形態音素的な現象にまで波及して、その原理を貫徹する。すなわち、アブハズ・アバジン諸語では、単・複1人称と複数2人称の能格接辞は能格動詞の語基の先頭子音に隣接するときには、その子音の同化を受けて有声化する。絶対動詞の語形ではこの条件下でも有声化しない。例えば、アブハズ語の能格動詞では $s > z$ ($c > ʒ$) , $h > aa$ ($x > aa$) , $š° > ž$ ($шә > жә$) のように有声化する : (*i-s-goit) > i-z-gojt 「それを-私が-運ぶ」 , (*i-h-goit) > i-aa-gojt 「それを-我々が-運ぶ」 , *i-š°-gojt > i-ž°-gojt 「それを-あなた達が-運ぶ」。可変動詞の場合、絶対動詞化すれば $sə-ʒəʒəojt$ 「私は洗濯(物)をする」に対して、能格動詞化すれば $i-z-ʒəʒəojt$ 「それを-私は-洗濯する」のように同化する。また「情緒」構文(「倒置」構文)では、i-s-gopxojt 「それは-私に-気に入る(それが私は好きだ)」のように s は有声化しない。それ故、情緒動詞は絶対動詞であることを示している(なお、i- は3人称単数事物類絶対格接辞 ; -s- は1人称単数接辞、-h- は1人称複数接辞、-š°- は2人称複数接辞であるが、1, 2人称では能格接辞=絶対格接辞であり、上の有声化の有無がその弁別手段となる ; 3人称にだけ能格、絶対格接辞の形態別がある)。アディオグ語、カバルダ語のようなアブハズ語以外の同諸語でも同様の有声化が行われている他、アディオグ語では能格性メカニズムを例えば $ə \sim e$ の形態音素の交替が担っており、 $də-n$ 「縫う」 ~ $de-n$ 「縫物をする」, $xə-n$ 「刈る」 ~ $xe-n$ 「刈取り作業をする」、等によって能格動詞と絶対動詞(この場合可変動詞の遠心形と求心形)を区別している⁴⁷。尤も、アディオグ語可変動詞の遠心形(能格構文)と求心形(絶対構文)は、動詞基の形態によってもなされるが、形態音素の対立によってもなされるのである。例えば、次の(1),(2)は語基の形態的対立によって、(3),(4)は形態音素の対立によってそれを区別している :

- | | | |
|--------------|-----------|---------------------|
| (1) $Lə-m$ | $čʔəgə-r$ | $Ø-je-z°e-Ø$ |
| 男-Erg | 土(地)-Abc | O.3Sg-S.3Sg-耕す-Pres |
| 「男が土地を耕している」 | | |

⁴⁷ その他の例については、以下を参照 : [柳沢(1)1996, p.177] ; [クリモフ 2016, p.52-54]。なお、バスク全方言で、複数のパラダイムにおける能格指標と絶対格指標の音声的中和化の事実(絶対格 *ag-ə > ak, 能格 *ag-ek > -agak > -ak ; 両形とも、-ag は数マーカー)も挙げられているが、これはバスク語の主格構造化に起因するもの、という[クリモフ、アレクセイェフ 2015, p.28-29(原著 p.43-44)]。

- (2) L'ə-r ma-z°e-Ø
 男-Abs S.3Sg-耕す-Pres

「男が耕作している、その作業中である」

(1)と(2)では、同一語基 z°e- が能格動詞として(1)、また絶対動詞として(2)、用いられている。一方、

- (3) Ps'as'e-m pismo-r Ø-je-txə-Ø
 若い娘-Erg 手紙-Abs O.3Sg-S.3Sg-書く-Pres

「若い娘が手紙を書いている」

- (4) Ps'as'e-r ma-txe-Ø
 若い娘-Abs 3Sg-書く-Intr-Pres

「若い娘が書き物をしている」

(3),(4)では、-txə-と-txe-のように、語基「書く」の末尾音の形態音素の交替によって、能格動詞(3)と絶対動詞(4)を区別している[Кумахов, Кумахова2013, 249-250]。元より、可変動詞は能格言語の包含事象ではなく、活格言語から引き継いだ随件事象(多発事象 frequentalia)である。また、(2),(4)は関係文法のいういわゆる「逆受身」構文である(以下参照)。

最後に、能格動詞には voice (能動態・受動態)の対立が欠けるのであるから、一次的話題化(primary topicalization) = 主語化(subjectivalization)は不可。ただし、「直接」補語の動詞密着位置を保ちつつ語順配置変更によるトピック化 = 二次的話題化(secondary topicalization)は可能だという[Климов1973, p.93-95]。

②「逆受身」構文についての内容類型学の立場：主格構造への前進を示す能格言語はともかく、圧倒的多数の能格言語で voice (態) 範疇は欠落する。主体・客体関係(他動詞・自動詞、主格と対格、等)に定位しない能格構造には論理的に voice は存在し得ない。voice とは異なるディアテシス(version 相)はあるが、これは活格言語の過去を引きずる可変動詞(labile v./拡散動詞 diffused v./ 両義動詞 ambivalent v.)にのみ現れるもので、「逆受身」構文は、実は可変動詞の「自動詞」ペアすなわち通常の絶対構文にすぎない。このことは1940年代のカフカース学者が熟知していたことである[クリモフ 2016, p.128]。上に示したアディゲ語(1),(2),(3),(4)に以下の例を加えておく：

- (5) 能格構文 Pxas'e-m pxe-r Ø-je-x°e-Ø
 大工 Erg 木 Abs O.3Sg-S.3Sg-削る-Pres

「大工が木を削り取る」

- (6) 絶対構文 P_{xas'}e-r pxe-m Ø-je-x^oe-Ø
 大工 Abs 木 Indr.O.Erg S.3Sg-Indr.O.3Sg-削る-Pres

「彼が木の面を削る」

- (7) 絶対構文 A-r ma-jex^oe-Ø
 彼 Abs S3Sg-削る-Pres.

「彼は研削作業をしている（一般に）」

同語では「削る」は安定・固定した能格動詞、絶対動詞でなく、可変動詞に属する。(5)と(6)は可変動詞が形成するペア構文である。両文の動詞語形内接辞-je-は音の面では違いはない(同音異義である)が、(5)-je-は能格動詞の主体を、(6)-je-は絶対動詞の間接客体を表す。文成分語順と動詞語形内接辞配置順の関係は、既述のアブハズ語の場合と同じである。すなわち、(5)能格構文の文成分と動詞語形内接辞-je-とは *mirror concord* (鏡像呼応) の関係に置かれている。(6)絶対構文では、文成分語順と動詞内接辞の配置順は同順である。また、(5)能格構文では、「木の全面を完全に削り取る、前面を平らにする(目的達成のため、完成を目指して、そして何らかの製品を制作すべく)」意であるのに対して、(6)絶対構文は「木の面を薄く、軽く、ぞんざいに、未完成のまま削る」意で用いるという[Яковлев, Апхамаф1941, p.70-71]。ただし、この意味の違いは可変動詞のペアに限らない。すでに「語彙レヴェルの特徴」において述べたように、絶対動詞の中に含まれる意味的「他動詞」—アディグ(チェルケス)諸語で、例えば「打つ、叩く、殴る」、「刺す、砕く」、「かく、梳く、梳る」、「掴む」、等は絶対動詞—も、行為の部分性、不完全性を表すのであり、したがって、形式面でも完全に絶対動詞として振る舞う。上の可変動詞から派生する絶対構文(6),(7)は関係文法にいう「逆受身」構文に相当する。

ところが、可変動詞ではなくとも、能格動詞と安定・固定的な絶対動詞の接辞法も、上と同じやり方である。すなわち、例えば能格動詞 hə-n「運ぶ」と絶対動詞 jez'e-n「待つ」の区別は上と全く同じやり方である：

- (8) 能格構文 Se we wə-se-hə-Ø
 私 君 O.2sg-S.1sg-導く-Pres 「私は君を連れて行く」

- (9) 絶対構文 Se we sə-we-že-Ø
 私 君 S.1sg-Indr.O.2sg-待つ-pres 「私は君を待つ」

1, 2 人称の代名詞における能格と絶対格の対立の欠如は北カフカース語を含む多くのカフカース諸語の特徴であるが、(8)は能格構文、(9)は絶対構文である。このことは、接辞の母音交替(ə~e)と接辞の配置順によっても明確である。

以上から結局、可変動詞派生の能格動詞と絶対動詞の形式的な構文法と、能格動詞一般と絶対動詞一般の形式的構文法とは、全く同じであり、絶対動詞が指定する構文を特に「逆受身」構文として分離する根拠はないことになる。こうして、アドィグ(チェルケス)諸語における能格動詞と絶対動詞の厳格な形式的弁別法が確立していることに関連して、クマホフ、クマホヴァは、「現代の動詞の他動性と自動性解釈は、主として意味的パラメーターに依拠している点を指摘しておこう。他動詞と自動詞の伝統的な解釈と現代の解釈の問題を扱った概観的論文の著者は、次のように書く：『修正(した解釈)は、他動性は程度の問題だと主張する。すなわち、他動節と自動節は明確な区別を見せないのもあって、むしろそれらは連続体を構成する』“The modified maintains that transitivity is a matter of degree. That is, transitive clauses and intransitive clauses do not exhibit a sharp division, but rather they constitute a continuum”。特に英語他多数諸言語に適用して完全に正当とされるこうした意味的アプローチは、動詞自体の意味や実詞(substantives)の格形式化とは無関係に主体・客体関係を厳密に区別するチェルケス語動詞に対して妥当とは思われない。恐らく、全体としてチェルケス諸語は他の西カフカース諸語(ウブィフ語、アブハズ語、アバジン語)と並んで、動詞内での人称マーカー、その形と配列の助けによる動詞形態でのS, A, O, O₁(O₁は間接客体の記号)の弁別の厳格な一貫性と固定的な階層性がある」という批判を展開している[Кумахов, Кумахова2013, p. 256-257, 259-260 ; p.167-168]⁴⁸。この発言は勿論、能格言語の「他動詞」と「自動詞」の語彙化原理と主格言語のそれとは全く異なることを前提とした上でのことである。すなわち、形式が「他動性」と「自動詞」を区別する訳ではない。あくまでも意味が形式を決定しているのである。

③ 名詞の格：格組織をもつ言語では、二つの位置格—能格と絶対格—が存在する。動詞形内に組込む能格系列接辞、絶対格系列接辞の機能と同じく、能格は主体と間接客体の機能(斜格機能)を融合・兼務し、絶対格は主体と直接客体(直説補語)の機能を融合・兼務する。両格とも純粹に主格、客体に定位した格ではなく、融合・兼務した格であり、機能的に広汎、拡散的な(diffused)格である。上述の引用を繰り返すが、メッシュャニーノフがカルトヴェリ諸語の格パラダイムの主格化過程について、「カフカースのヤペテ諸語に定着している能格は専ら行為主の格である...つまり能格が完全に行為主格になっている。したがって、ここでも能動化(主格化)過程は能格

⁴⁸ 批判対象論文は、Tsunoda T. Transitivity // The Encyclopedia of Language and Linguistics. P.4671.

が一般原則として未だに具格と融合している北カフカースの諸言語と比べて著しく前進している」と述べたように、能格言語内の段階位相に応じて、能格の機能は、兼務能格(間接客体の機能を兼務する能格)から専用能格(能格動詞の行為主専用の能格)まで多様である(行為主専用能格以外は全て兼務能格)。メッシュャニーノフは、専用能格を能格から主格に向かう再編過程の重要な一步として認識していたのであり、それに能格と主格の間の「中間的な」格を表すために「能動 active」格という用語を当てたのである。例えば、以下のバスク語の能格はすでに主体格専用の格であるが、バツビ語例は具格機能を、アディゲ語例は与格、属格、向格、他を兼務する能格が機能していることを示している(ここで全てを挙げ尽した訳ではない)[クリモフ 2016, p.129-130 ; Кумахов, Кумахова2013, p.247]⁴⁹ :

バスク語 ni-k (私-erg) ur-a (水-abs-定性指標) da-kar-t (3sg/abs-運ぶ-1/sg/erg)

「私は水を運ぶ」

ni (私-abs) na-bil (1sg/abs-行く) 「私は行く」

バツビ語 牧人-w (erg)・足-w (erg)・蛇 (abs)・殺した「牧人が足で蛇を殺した」

アディゲ語 客-m (erg) 若者-m (erg) 馬-r (abs)・渡した

「客は若者に馬を渡した」

若者-r (abs)・本に-m (erg)・触る「若者は本に触る」

老人-m (erg)・若者-m (erg)・牛-r (abs)・連れて来させる

「老人は若者に牛を連れて来させる」

若い娘-r (abs)・町-m (erg)・行く「若い娘が町へ行く」

若い娘-m (erg)・ja-te-父-(r) (その-父-abs)・働いている

「若い娘の父は働いている」

若い娘-m (erg)・～ために paje・村 (erg)・私が行くところだ

「若い娘のために村へ私が行くところだ」

クリモフは、「他の諸言語の研究の伝統が、原則として、今なお能格の主たる機能が主体機能だとするテーゼに従っている」能格論を批判的に見ている[クリモフ 2016, p.130]。一方で、常に留意しておくべきはこの「兼務能格」«совмещающий эргатив»という

⁴⁹ Cf. なお、グルジア語初めカルトヴェリ諸語は monadire-m (獵師-erg) datv-i (熊-abs) mo-kl-a (殺した-3sg アオリスト)「獵師が熊を殺した」は能格構文であり、datv-i (熊-abs) modi-s (行く-3sg 現在)「熊が行く」は絶対構文とされているが、内容類型学はグルジア語を活格言語の名残を残す主格言語と認定する(→詳しくは「補遺」参照)。その観点からすれば当然、能格とされるものは主格の異形態 (allomorph) である。

用語の条件性に付いてである⁵⁰。ここに言う「兼務」は、主体・客体原理に基づく主格類型の格システムの視点に立った「兼務」であるが、これは能格の本質の説明の便宜上使う用語であって、あくまでも能格それ自体の中にこそ能格の本質があることを忘れてはならない。「様々な主体・客体機能の『兼務性』は能格それ自体の中にこそある。…能格構造の代表言語の構造的諸要素が現実の主体・客体関係に定位されていないことに注意すれば、能格の何がしかの多機能性を示すことができないことも、明らかかなはずである（多機能性が言えるのは、能格性のメカニズムの記述を主格構造組織の立場から行う場合だけである）」(クリモフ)[クリモフ、アレクセイェフ 2015, p.24[原著 37-38]]。そうであればこそ、能格性の本質に関して、agentiveness - factitiveness (作因性～叙実性)が言われるのである。「現在では、能格は能格に相関する能格構造の他の構造諸要素も同じく、かなり一義的にいわゆる agentive (作因的) 関係の伝達に定位していることを示す可能性が出て来ている。作因的關係とは、行為因子と見なされる、能格性の意味的決定因子 (semantic determinant) の相互対立的要素の一つを示す特徴的な関係と解すべきものである (恐らく正にこの因子こそが言語構造の一つの要素に主体的、道具手段的かつ間接客体的機能の統合化を引き起すことになる)。同様の深層的な関係、いわゆる factitive relation (叙実的關係) が能格諸言語の絶対格とそれに相関するその他の言語構造要素の基礎にあることに鑑みれば、正にそのことから、能格組織体系 (システム) は主格組織体系や活格組織体系と同様、一つの格形式の個別的意義に一定の不変値 (инвариант [invariant]) が存在するという周知の観点を裏付ける論拠を研究材料に供することになる。近過去では筆者は反対の観点をとり、特に、絶対格の主体機能と客体機能はこの観点の誤りの例証となり得る、と考えていた。能格性一般論の最近の成果に照らして見れば、こうした観点の不充分さは、この場合に能格組織体系の格の意味を、能格組織体系自身によってではなく、類型的に異なる主格組織体系の観点で (主格組織体系の主体・客体的二分法によって) 捉えた点にあると見なすべきである」[クリモフ、アレクセイェフ 2015, p.24(原著 p.37-38)]⁵¹。すなわち、能格が多機能 (主体、道具手段、間接客体) を、絶対格が多機能

⁵⁰ ロシア語 совмещающий [sovmeštš-a-juštš-ij], совмещение [sovmeštš-en-i-je] (=「兼ねる、兼備する、重ね合わせる、結合させる」の意) は、それぞれ сомещать [sovmeštš-a-t'] の現在分詞と動名詞である (cf. combine > combining ergative, combination)。

⁵¹ 70年代には、クリモフは次のように記述していた：「能格構造諸言語において原則として、直接補語が絶対格の形を有するのに対して、ここで主語格となるのは能格、絶対格、情緒格、また時にその他いくつかの格である。同時に、これら諸言語においてしばしば同一の格の機能がひどく異なることがある。恐らくここで最も多機能的であるのは絶対格であり、それは絶対構文の主語、能格構文の直接補語、情緒構文の間接補語を形成する。同時に、斜格の一つ (一般斜格、具格、所格、与

(主体と直接客体)を兼務するという認識は結局主格言語話者の側からの認識であるから、正にこの多機能性を現象化させるある一つの共通の意味的不変値 (semantic invariant) つまりこれらの格の共通の意義を解明することこそが能格論の課題、任務となっていたのである。こうした不変値の解明が進む中で、とりわけ能格言語の項の機能の研究に集中して来たキブリク (А.Е.Кибрик) によって、能格と絶対格の項の意味役割が *agentive* (作因項) と *factitive* (叙実項) であることが解明された。すなわち、「絶対格の二つの基本的機能は、ある行為の生起に伴う指示対象あるいはある状態に置かれる指示対象」のことであり、これが *factitive* という概念に相当するものであり、*agentive* には「何がしかの改造改変的行為因子という一つの問題に込められている」[クリモフ、アレクセイェフ 2015, p.30(原著 p.46-47)]。あるいはまた、「*agentive* の概念は、研究の現段階では、改変的行為の何らかの状況ないしは条件 (行為の、実現者、道具・手段、受け手 *Adressat*) として説明することができる。例えば、能格のような能格組織の格パラダイムの特徴の背後には、主体機能も間接客体的 (道具、場所的) 機能も存在する。同時に、*factitive* の概念は行為の直接的な担ぎ手を包括するものである」[クリモフ 2016, p.139]。キブリクは、キーナン論文を参考にしながら、*factitive* とは「場の直接的で最も密接な、かつ最も影響を受ける、参与項を表す *Aktant* (共演項)」と説明している [Кибрик 1992, p.192]⁵²。具体的には、*factitive* とは、1) 例えば *be cloudy* に対する *whether*、また *moo* に対する *cow* のように、述語の意義から強力な制約を受ける共演項のこと、2) 例えば *cut* のように、述語の意味がその共演項によって具体化される、すなわち *factitive* 項次第であること、*John cut his arm, cut the cake, cut his whiskey with water, cut the prices* 等、3) その共演項の存在は述語が表す場に依存する (*Agens* は場とは無関係に存在する)、例えば、*He committed a crime, made a mistake, took a walk, told a lie* 等 [Keenan 1984 ; Кибрик 1992, p.192]。すなわち *factitive* 項は *Agens* 項と比べて意味的に述語への依存度が高く、述

格等)が主語も間接補語も形成することがある。これらの事実は、一つの形の格の意義に何がしかの不変値 (инвариант[invariant]) があるとする周知の仮説は克服し難い困難に直面する、ことを見事に証明するのである」 [Климов 1973, p.117]。

⁵² 本稿筆者は *agentive* と *factitive* という用語に「作因的」と「叙実的」という訳語を当てているが、当面仮の訳語である。特に *factitive* の訳語について試行錯誤を繰り返しており、将来最適訳語に修正したいと考えている。ちなみに、キブリク [Кибрик 2003, p.116, 148 他]においては、同じ意味で *factitive* を *absolutive* (絶対項) という用語に代えている。あるいはまた、チャーチワードは *proximative* (近接項、密接項)、ペハートは *Patient^{GR}* (被動項グループ) という用語を当てる、等である (Cf. C.M.Curchward, *Tongan grammar*, 1953, London, New York, Toronto; Bechart J. *Zur funktionalen Erklärung des Ergativsystems*, *Papier zur Lingusitik*, 12, 1977; Idem, *Ergativity: towards a theory of grammatical relatins*, New York-San Francisco-London, 1979)。

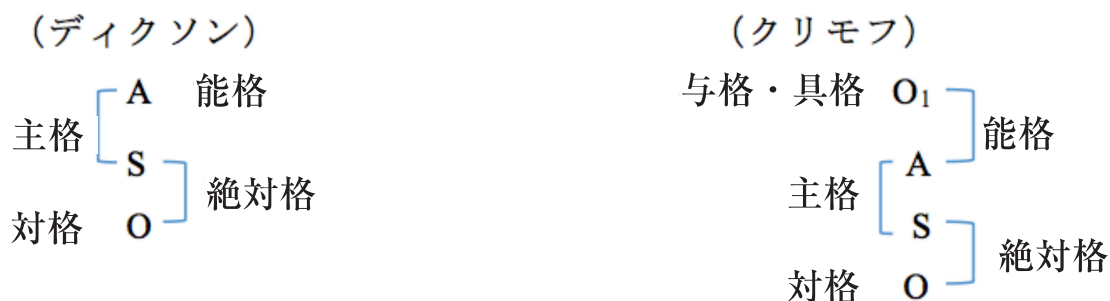
語との相互間密接度が強いのに対して、Agens 項はより独立性が高い。このことは、OVが第一次シンタグラムの形成に与り、Agens 項はそれに被さる二次的な要素である、という上述の能格言語のシンタグラム特徴の説明によく符合するのである。こうして、能格言語の文成分要素の共通意義の解明は、能格言語の動詞語形内能格系列、絶対格系列人称接辞等、能格組織全体の構造的諸要素の機能的な不変値、すなわち能格言語の構造化原理の解明にもつながり、今日、能格性の深層的動因子は *agentive* 作因性原理と *factive* (*absolutive*) 叙実性 (絶対性) 原理の対立として定式化されるに至っている。

一体、能格言語に、主格、対格、属格、与格、具格は存在するのか？一般的にこれらの格単位は主格構造の包含事象でしかない。能格言語の絶対格に「主格」という用語が当てられるが、絶対格は主格言語の主格とは全く異質の機能をもつのであるから、せいぜい条件付きで使われるものであって、能格言語に主格は存在し得ない。属格は主格と対格の転置 (*transposition*) であり、属格の本質的機能は主体の属格 (*genitivus subjectivus*)、客体の属格 (*genitivus objectivus*) である。それ以外の限定機能の属格はそこからの派生機能である。「主体の属格と客体の属格は、属格の他の全ての名詞付接的使用のつまり部分属格や所有属格 (二次的機能) の基礎であり、これら二次的機能は歴史的観点からすれば比較的遅い層を形成する具体的用法である (例えば、印欧諸語において、所有性は主として形容詞が表したことは、周知のところである)。この場合、極めて重要なことは、あらゆる言語において所有属格はこの属格の派生的性格の故に主体と客体の属格を基にし続けている、ことである。行為名詞+客体属格あるいは主体属格の語群は、常に人称動詞+主語あるいは直接補語の語群から発生するからである」(クリウオーヴィチ) [クリモフ 2016, p.136]⁵³。与格についても主体の与格 (*dativus subjectivus*)、客体の与格 (*dativus objectivus*) が基盤であり、副詞的 (方向的・場所的) 与格 (*dativus adverbialis*) 機能だけでは与格は認定できない。完全に発達した与格は主格言語にのみ証することができる。そもそも間接客体的機能は完全に能格機能中に含まれており、与格、具格の分離はない。能格が間接客体的機能を喪失するという基盤に立って初めて与格が生成されて行くのである。与格と具格の分離は相関関係にある。したがって、完全に発達した与格は、主格言語にのみ立証されるものである。ただし、バスク語やナフ・ダゲスタン諸語のような、主格化過程に向かって前進している能格言語には与格の形成を見ることができる。特にナフ・ダ

⁵³ Курилович. Е., Проблема классификация падежей. – В кн.: Курилович Е. Очерки по лингвистике. М., 1962, с.183-184.

ゲスタン諸語には、間接客体的機能の喪失という基盤に立って与格が形成されて行く過程を証することができる。また、同諸語の場合には具格専用形が発達するものや、具格機能の能格と専用化し始めた具格が共存する等、過渡的段階にある。また対格の機能は絶対格の機能中に有機的に含まれているから、対格も存在し得ない。主格機能も能格と絶対格に分散している以上、存在し得ない。

そこで、クリモフは、敢えて関係文法が用いる A, S, O の記号を用い、かつ上述に明らかになった能格の本質を考慮して間接客体を O₁ 記号で補足すれば、能格構造の構造化原理は、A + O₁ (agentive principle) と S + O (factitive[absolutive] pr.) のようになるとして、ディクソンの構造式に対して、次のような修正構造式を提示している[Dixon1994, p.9(ディクソン 2018, p.11) ; クリモフ 2016, p.142] :



なお、能格言語は A + O₁ (作因性原理 agentive pr.) と S + O (叙実性原理 factitive pr.) の対立。活格言語では A + S₁ (活性原理 active pr.) と S₂ + O + O₁ (不活性原理 inactive pr.) の対立 (O₁=間接客体[間接補語] ; S₁ と S₂ はそれぞれ、非他動性行為が、ある場合には活性的 S₁ であり、ある場合には不活性的 S₂ であることを区別するための記号) である[クリモフ 2016, p.143]。

▶ ナフ・ダゲスタン諸語の場合 : 能格言語の格目録に関する以上の一般的前提に立った上で、アレクセイェフの研究を基にして、カフカース諸語の中でも特に主格的構造化へ向けた前進が顕著だと言われるナフ・ダゲスタン諸語について、具体的に見ておきたい。

上に能格が属格の機能をもつアディゲ語の例を挙げたが、ナフ・ダゲスタン諸語を見渡せば、この兼務性が一層明らかになる。例えばラク (Lak) 語では能格構文 *buttal lu bukkaj* 「父が erg・本を・読む」が「父の gen・本を・読む」も表し、これを識別するのはイントネーションであって、*buttal[erg] lu / bukkaj* と読めば能格構文であり、*buttal[gen] / lu bukkaj* と読めば *buttal* は限定機能であるという[クリモフ、アレクセイェフ 2015, p.129(原著 p.199)]。アレクセイェフは、ナフ・ダゲスタン諸語の属格の機能範囲 14 種例を詳しく列挙して、これは全体として均質な限定関係という同一

意義として現れており、同諸語における大量の属格用法はロシア語の形容詞関係の用法に相当すると述べる[同 p.149-151(原著 p.230-232)]。ロシア語史には所有形容詞の、属格(露語文法では生格)に対する優勢の事実がある[石田 2007, p.245-248]。これも主体の属格、客体の属格の完成に向かう途上での活発な弁証法という広い視野から掴むことができよう。ナフ・ダゲスタン諸語における属格と主格言語の属格の本質的な違いが現れるのは結局、主体機能での属格、客体機能での属格の分野においてである。同諸語では、主体機能での属格使用は制約つきで現れるが、客体の属格は概ね存在せず、例外的な使用を除いて極めて稀である。

動名詞(マスダル)は一般に動詞の能格支配あるいは絶対格支配を残している。主体機能での属格使用が広がるのは、次の場合である：①「自動詞」派生の動名詞の場合に限られている：レズギン語「子どもの gen・遊び」、チェチェン語 Chechen「議員の gen・演説」、タバサラン語 Tabasaran「少女の gen・勉強」。ただし、同じ語句で絶対格の使用も可能—タバサラン語「人 abs・病むこと」、「子ども abs・泣くこと」。また、ルトウル語「彼 abs・来ること(来訪の事実)」、「彼 erg・来ること(来方)」—のように、属格と絶対格を限定関係と主体関係の対立として用いることもあるという。②支配される名詞が有生主体の場合に限る：クルィズ語「馬の gen・歩み」、「子どもの gen・泣くこと」に対して、「太陽 abs・昇ること(日の出)」、「秋 abs・来ること」。③所有主体の表現に属格を使う：アヴァール語 гиасул(彼には gen) кИрго(2) вач(息子) в-уго(ある)「彼には二人の息子がいる」(cf. ロシア語の所有構文 u + gen に相似的である：U nego dva syna est')。なお、クリモフは、②の場合、無生名詞の有生的擬人化の場合「陽の gen・昇ること(お日様の・昇ること)」属格が現れ、逆に、有生だが意味的アクセントが行為主体ではなく行為に落ちるとき、ベジタ語「父 abs・来ること」であるのに対して、意味的アクセントが行為主体に落ちるとき「父の erg・来ること」のようになる、ことを指摘している[クリモフ 2016, 55-56]。一方、客体の属格は不可能であり、それは能格動詞+直接補語絶対格の結合をそのまま動名詞句に使う：チェチェン語「新聞 abs・読むこと」、アヴァール語「歌 abs・歌うこと」、ダルギン語 Dargwa「畑 abs・耕すこと」等のように。すなわち、「属格による関係形容詞機能の遂行、主体的意義での属格使用の制約性、客体的意義での属格使用の不可能性は、ナフ・ダゲスタン諸語の属格は主格諸言語の属格とはかなりはっきりと異なっている—この意味で、属格が確定した機能をもつ格単位として未完成であることを証明することができる」[クリモフ、アレクセイェフ 2015, p.153(原著 p.235)]⁵⁴。加え

⁵⁴ また、名詞句における、主体の属格、客体の絶対格の使用例についても、[クリモフ、アレクセイ

て、属格という格単位が形式的にも未完成で、格形態素指標というより形容詞指標の特徴を表す場合や、属格接辞と形容詞接辞の形式的な一致のケースもあるという：ルトゥル語 (Rutul) *ir-dy*「赤い」と *zir-dy*「雌牛の gen」[クリモフ、アレクセイェフ 2015, p.235-236(原著 p.235-236)]⁵⁵。

与格についても、アレクセイェフも、これを純統語的な位置格とは認定し難く、「主体・客体的関係の表現よりもむしろ方向一般的な空間的意義の伝達に定位しており...、ナフ・ダゲスタン諸語における与格は未完成であって、現在のところ系列外の方向格として空間的諸格との顕著な繋がりを残している」、と考えている。またボカリョフも、「与格は（目下のところ）あたかも方向一般の系列所格の如くである」、と述べている。空間的方向諸格との密接な関係は形式的にも証明されるのであって、「例えばアヴァール語与格の形態素 *-e* は方向格指標と同一である：*ax*「庭(園)」- 与格 *axи-e*；方向格 1. *axи-д-e*(allative-1)、方向格 3. *axи-хъ-e*(all-3)、方向格 4. *axи-къ-e*(all-4)」[クリモフ、アレクセイェフ 2015, p.149(原著 p.229-230)]⁵⁶。

ナフ・ダゲスタン諸語で最も広がるのは、能格の具格としての使用であるが、その程度は各諸語で異なっており、三つのグループに分かれるという：①多数の諸語で能格は具格的補語の唯一可能な形であり、②能格と他の諸格（共同格、道具・随伴格、状態格、諸所格、等）を並行的に使う諸語、③能格を具格機能で使わない諸語（専用具格、所格、与格を具格機能で使う諸語）がある[クリモフ、アレクセイェフ 2015, p.141-142(原著 p.217-220)]。

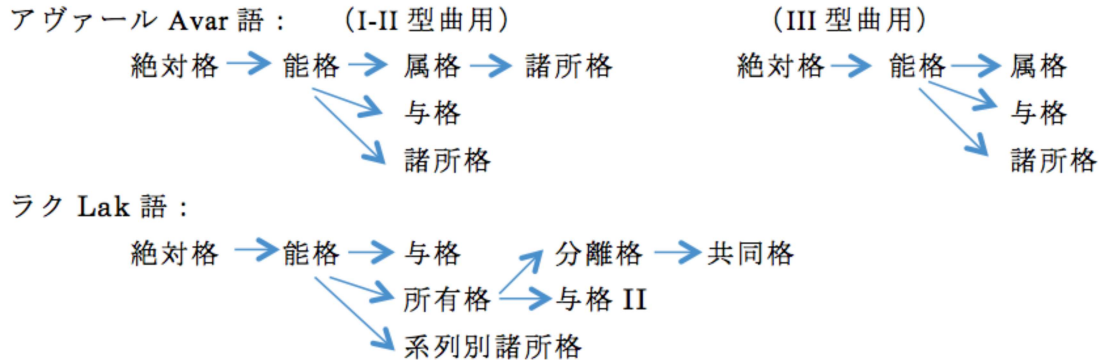
「他動」的行為の主体 (Agents)、具格的補語、原因の状況語等一つの形態的単位に全ての統語的単位を統合する一体的な格から他斜格が派生して行く様子は、アレクセイ

イエフ 2015, 152(原著 p.233-234)]から。これらはアレクセイェフの執筆担当部分。

⁵⁵ なお、別の同諸語の属格についても疑念を呈し、「起源的に関係形容詞であると考えべき根拠がある」とするサフチェンコの記述も引用されている：Савченко А.Н. К вопросу о развитии эргативной конструкции предложения в абхазско-адыгских и нахско-дагестанских языках. – Изв. АН СССР, ОЛЯ, т. 37, 1978, № 6, с.514.

⁵⁶ アヴァール語の記述文法によると、主格、能格（あるいは能動格）、属格、与格の基軸格以外に複雑な空間諸格がある。空間格は5系列（1 事物表面、2 近辺、3 密閉内部、4 下部、5 空洞内部）の定点指定 (localization) 毎に4種の空間格 (locative~で, allative~へ, ablative~から, translative~を経て) の形を繋ぐから、loc1, loc2...loc5 のように、最大 $5 \times 4 = 20$ の格形を区別し得ることになる。例えば、*ax*(nom)「庭(園)」, *axи-ца*(erg), *axи-л*(gen), *axи-e*(dat), *axи-да*(loc-1), *axи-хъ*(loc-3), *axи-къ*(loc-4), *axи-д-e*(all-1), *axи-хъ-e*(all-3), *axи-къ-e*(all-4), *axи-даса[н]*(abl-1), *axи-хъ-а[н]*(abl-3), *axи-къ-а[н]*(abl-4) のようになるという [Алексеев, Атаев, Аварский язык 1998, p.51 ; [Атаев 1996, p.69] ; cf. Языки мира, Кавказские языки, 1999 ; Языки Российской Федерации и соседних государств, Энциклопедия I, 1997] ; У.А.Бокарев, Локативные и нелокативные значения местных падежей в в дагестанских языках. – В кн.: Язык и мышление.

イエフが挙げる、能格から他の斜格の形成に至る形態的派生図にも現れている：アヴァール語[クリモフ、アレクセイイエフ 2015, p.138(原著 p.213)]⁵⁷；ラク語[クリモフ、アレクセイイエフ 2015, p.138(原著 p.213)]⁵⁸：



大多数の東カフカース語群の言語では、曲用に二語基を区別するのが原則で、ゼロ(-ø)指標接辞による絶対格＝直接基 *direct stem* (原基) と絶対格を除く全ての格を派生させる間接基 *oblique stem* を区別するのが一般的であるという。例えばアフヴァフ *Axvax* 語：

原基	間接基	能格	与格	
<i>нуша</i>	<i>нуша-ссу-</i>	<i>нуша-ссу-де</i>	<i>нуга-ссу-ла</i>	「婿、娘の夫」
<i>нуша</i>	<i>нуша-лъльи-</i>	<i>нуша-лъльи-де</i>	<i>нуша-лъльи-ла</i>	「嫁、息子の妻」

また多数の言語で、上記アフヴァフ語例にけると同様、能格は間接基から特別の接辞を繋いで形成される。また、ベジタ語 *Bezhta* の場合も同じである－能格形と同形である次例の間接基 *шикI-a-* は、他の全ての格において不変である：絶対格 *шикIо* 「口」、能格 *шикI-a-ø*, 属格 I *шикI-a-ш*, 属格 II *шикI-a-ли*, 与格 *шикI-a-л*, 具格 *шикI-a-д*。すなわち、能格は絶対格に対して有徴であるが、他の諸格に対しては無徴である。アレクセイイエフは、この点について、「我々の考えでは、ここには、能格諸言語の格の形式的相関関係だけではなく意味的対立の特徴も現れている；すなわち、ここでは能格は意味的に無徴なのである」、と述べる[クリモフ、アレクセイイエフ 2015, p.138-139(原著 p.213-215)]⁵⁹。すなわち能格の他斜格との一体性・融合性・兼務性は、形式的にも意味的にも証明できるということになる。

⁵⁷ 図はサイドフから引用されたもの：М.Саидов, Аварско-русский словарь, М., 1967, p.136-137

⁵⁸ 図はガイダロヴァから引用されたもの：Гайдарова Ф.А. Падежи и их функции в лакском языке. Автореф. канд. Дис. М., 1971, p.7.

⁵⁹ ベジタ語例はボカリョフから引用されたもの：У.А.Бокарев, Цезские (дилойские) языки Дагестана. М., 1959, p.85-87.

多数のナフ・ダゲスタン諸語での能格の多接辞性、多形態素性が目立つ。アレクセイェフは特にレズギン諸語について多数例を挙げ[クリモフ、アレクセイェフ 2015, p.130-131(原著 p.201-203)]、この点についてはクリモフも、アブハズ・アディゲ諸語の能格の多接辞性が言語の改新的性格の証拠の一つであること、またこれに関連して、カルトヴェリ諸語の態 (voice) のような後発的範疇の多接辞性についても述べ、多接辞性、多形態素性が示唆する言語の再編過程における形式と内容の弁証法について考えている：

「言語に何がしかの文法範疇が生成して行く際それは機能面での明確さと併せて、その過程に巻き込まれる成語要素 (форматив, formative) が多様であるという特徴をもつものに対して、文法範疇が消滅して行く際には逆に、その具現形 (exponent) 成分の極限までの一元化が進行することと並んで、その機能的任務の不明瞭さが目立つ。...このことに照らして注目されるのは、次のような、類型的に相異なる諸要素の相関関係である。能格 (ないしは主格) 構造の諸特徴と活格構造の諸特徴の混在を見せる言語において、接辞の多様性はその意味の明確さと併せて、活格性ではなく能格性 (// 主格性) の要素を析出させる。正にこのような相関関係がカルトヴェリ諸語やアブハズ・アディゲ諸語の多くの事実に追跡される。例えば、カルトヴェリ諸語の比較文法でよく知られているのは、態 (voice) (cf. いわゆる無徴受動また接頭辞 *i-*, *-e* あるいはまた接尾辞 *-d*, *-n* を組み込む受動) のような後発的範疇の多接辞性である。逆に、受動の接頭辞要素が同時に行為の気分、見かけ性、可能性、不随意性の意味表現を併せ担う、という多義性の方は、この共通カルトヴェリ語指標がかつてははるかに同質的な「共通」の意義をもっていたはずであること、またその意義が後に歴史的に記録されたずれの後続発展を可能としたものであること、をはっきりと証明している。アブハズ・アディゲ諸語のアディゲ語群に認められる、能格の多接辞性は、能格の改新的性格の証拠の一つである (同様の別の証拠は、同語群諸言語の外的比較の手続きから導き出される)。逆に、今日アブハズ・アディゲ諸語に観察される、特に動詞の求心形と遠心形を伝達する、共通アブハズ・アディゲ語状態に遡る *a~ə* の母音交替、の意味のコノテーションの多様性は、明らかに活格構造組織に起因するこれの古体的な性格を示す可能性が強い」 [クリモフ 2016, p.214-215]⁶⁰。

格の形態に関連して指摘しておくべきは、1, 2 人称代名詞における能格形と絶対格形の同一性すなわち対立の欠如である。「名詞における能格と絶対格の対立の一方で

⁶⁰ クリモフの、アンドレーイェフからの引用については—Андреев Н.Д., Структурно-вероятностная типология отношений между семантикой слова и его грамматическими категориями. — В кн.: Типология грамматических категорий. Мещаниновские чтения. М., 1975, с.90.

(これらの格が多数の諸言語のいくつかの名詞で同一である場合もあるけれども)、人称代名詞における能格と絶対格の合一性の頻度が高いことは能格構造諸言語の特徴の一つである。主格諸言語では別の法則性が認められる：すなわち、名詞において主格と対格が区別される場合には、代名詞においてもこれらの格は区別される」[クリモフ、アレクセイェフ「カフカース諸語の類型学」、p.131(原著 p.203)]。このことに関連して思い出されるのは、ディクソンによるオーストラリアのディルバル語に関する研究である。ディクソンは、ディルバル語は、統語構造では一貫して能格的な性格を有するが、形態面で主格性の残滓が見られるというのである。すなわち、以下のよう
に現れるという：

	A	S	O
1, 2 人称代名詞	-∅	-∅	-na
3 人称代名詞、固有名詞、普通名詞	-ŋgu	-∅	-∅

そこで、以下の文では、名詞曲用では能格と絶対格の対立を見せながら、1, 2 人称代名詞では主格と対格の対立があるから、主格—絶対格セットと能格—対格セットの文があると解釈される。

ŋana 「我々」 主格	ɲuma 「父」 絶対格	bura-n 「見る」 -過去時制
「我々が父を見た」		
ŋana-na 「我々」 対格	ɲuma-ŋgu 「父」 能格	bura-n 「見る」 -過去時制
「父が我々を見た」		

[クリモフ 2016, p.160-162, cf.81, 88-89, 155-156]⁶¹

しかし、クリモフは、言語学者等が異口同音に形態レベルにおいても統語レベルにおいても能格言語であるとする言語である以上、この-na マークを主格のゼロ指標に対する対格指標と見なすことができない、とする見解を述べている。その主旨は、1, 2 人称代名詞の形態事実だけで主格性残滓を証明できない、視野を大きく広げて再検討するべきだ、という主張である。広い視野とは、ディクソン等自身が認めている「能格状態だった」共通オーストラリア諸語を含めての「通時的起因性」を勘案すれば、-∅ 指標と -na 指標という対立に主格構造の残滓を見出す根拠は存在せず、ディルバル語の 1, 2 人称代名詞の曲用パラダイムにおける -∅ 指標と -na 指標の対立を、はるかにもっと広範なオーストラリア諸語の類似の対立の機能的特徴—両指標の対立が諸言語毎に非常に大きな機能的変異性をもつこと—の中において再検討すべきだ、というものである。すでに I-2 に紹介したように、何がしかの言語特徴がさらに大き

⁶¹ Cf. Dixon R.M.W. Ergativity, Cambridge Univ.Press, 1994, p.15, 86,160[ディクソン 1918, p.18, 107, 198] ; Idem. Ergativity, 1979, Language55, p.86-89

な呼応特徴組織に含まれるという事実抜きに、それらの特徴の類型的関与性を決定できないという原則は[クリモフ 2016, p.31-32, 35]、クリモフが再三強調して来たところである。すなわち、第一に、類型的に異なる組織体系の形態諸特徴を機械的に重ね合せてはならないこと、第二に、能格言語における主格化傾向の増大は、名詞形態ではなく先ずは動詞形態における然るべき構造的再編を前提とすること、第三に、統語法に一貫した能格性原理が存在している中で、主格性規範に定位した曲用パラダイムを嵌め込む統語的前提が欠如していること、の三点を先ず指摘している。具体的な指摘は次の通りである：

「ある場合には、この対立の意味は原則としてディルバル語と同様であるが、別の場合には、**-na//-na** の指標が絶対格の接辞であり、また別の場合には、この指標がある別の機能も担っている⁶²。したがって、むしろ統一的解釈を必要とするのは、オーストラリア諸語の、ある点では類似するが決して一様ではない諸ファクターの集合全体である。このことに鑑みれば、**-na** 指標はオーストラリアの他の多数の諸言語とりわけアラント語の同一の接辞と対比することができるのであって、そこではこの指標は特に有生客体の不活性性を表すのであり、本来的に格語尾ではない⁶³。そこで、ディルバル語やその他のいくつかの言語では、この指標が人称代名詞に優勢的に固定されることは、**-Ø** 指標と **-na** 指標が実は正に人称代名詞分野においてこそ活格と不活格のあるいはまた能格 (agentive) と絶対格 (facti[ti]ve) の役割を形式的に区別する唯一の手段である (1, 2 人称代名詞が格変化を欠く性質は、能格諸言語では珍しくない現象)、ということによって説明されるのである。ここでは動詞の形態構造が主体・客体関係を伝達しないからである。歴史的にさらに広範に利用されてきた**-Ø** と **-na** の接辞の対立は、今日においてもなおオーストラリア諸語の一部、ディルバル語やこれに類似の諸言語に保存されているが、それは実質上その機能域を縮小してしまっている。もし提起している比較考察が正しいとすれば、ここに検討しているディルバル語の特徴は、性格的には主格構造ではなく活格構造寄りに傾く形態的古体 (archaism) と見なすことができよう (オーストラリア諸語の一部では、**-na** 接辞の直接客体機能が間接客体機能から分化していない、という点も、恐らくこうした解釈を裏付けるこ

⁶² クリモフによる引用 *Dixon R.M.W. Proto-Austrarian laminals. – Oceanic Linguistics, 1970, 9, p.79-103.*

⁶³ クリモフによる引用 *Capell A. A new approach to Austrarian linguistics. Sydney, 1956, p.22-23, 53-54; Holmer N.M. On the history and structure of the Austrarian languages. – In: Austrarian essays and studies, III. Lund, 1963, p.60; Кацнельсон С.Д. К происхождению эргативной конструкции. – В кн.: Эргативная конструкция предложения в языках различных типов. М., с.40-41.*

とになるろう⁶⁴)。当然のことながら、この場合、形態と統語間の類型的諸要素の上掲の一般的分布法則は不動である。同時に、正に代名詞組織こそが通常古体保存の分野である、というよく知られた、代名詞と名詞の語形変化の相関性のもう一つの一般法則も揺らぐことはなからう」[クリモフ 2016, p.162-164]。

④ 動詞語形変化の分野における形態的包含事象：文の名詞成分と動詞語形内接辞との呼応システムには二種ある。第一種は能格系列も絶対格系列の接辞も組込む大多数の能格諸言語である：例えば、バスク語、ブルシャスキ語、アブハズ・アディグ諸語、チュクチ・カムチャッカ諸語、エクキモー・アリュート諸語、北米諸語、他。第二種は特にナフ・ダゲスタン諸語で現れ、動詞語形内に絶対格系列接辞だけを組込む。例えば、カバルダ語（アディグ諸語の一）は第一種に属する：*УЫ-ЗО-ХЬ*「君を・私が・運ぶ」；*ФЫ-ЗО-ХЬ*「あなた方を・私が・運ぶ」；*СЫ-БО-ХЬ*「私を・君が・運ぶ」；*ДЫ-БО-ХЬ*「我々を・君が・運ぶ」、等。第二種アヴァール語（ナフ諸語）*В-чана*「彼を（男性類）・運んだ」«его привел, -а, -о, -и»; *Й-ачана*「彼女を（女性類）・運んだ」«ее привел, -а, -о, -и»; *р-ачана*「彼らを（複数類）・運んだ」«их привел, -а, -о, -и」（アヴァール語では、男性類 *в-*、女性類 *й-*、複数類 *р-*の類別指標が動詞形に接頭されて、直接補語と客体呼応[対象活用]している。主体は、動詞語形内には反映されず、名詞成分が担う）。また、第一種、第二種とも、絶対動詞の場合の呼応は、勿論主体機能の名詞成分との呼応である。

アレクセイェフによれば、主格諸言語の場合も、主体系列、客体系列の両指標を組込む主格言語（主体・客体呼応システム）と主体一系列だけを組込む主格言語（主体呼応システム）の二種が存在する。しかし、客体系列だけしか組込まない主格言語や能格一系列指標しか組込まない能格構造言語は存在しない。また、主体・客体の表現に関する文法範疇は、人称、数、性（主格言語）、類（能格言語）の範疇であるが、人称指標と数指標は絶対格系列も能格系列も（主格言語ではそれぞれ主体系列と客体系列を）形成し得るのに対して、類別指標と性の指標が関与するのは一系列（絶対格系列か主格系列）の形成においてだけである[クリモフ、アレクセイェフ 2015, p.154-155(原著 p.236-238)]。

⑤ 態 (voice) の対立の欠如：動詞定形にも分詞形にも態はない。例えばアヴァール語には合成述語（分詞+助動詞）から成る定形文があり、絶対構文 *В-ас*（少年が *abs*）*цалуле-в*（読書して[分詞]) *в-уго*（いる[*be* 動詞])「少年が読書している」、能

⁶⁴ クリモフによる引用 *Wurm S.A. Accusative marking in Duungidjawa (Waga-Waga). – In: Grammatical categories in Austrarian languages. Canberra, 1976, p.108*

格構文 **В-ас-ас** (少年が erg) **тIехъ** (本を abs) **цалуле-б** (読んで) **б-уго** (いる) となる。この能格構文から能格主語を省略した主語省略文 **тIехъ** (本 abs) **цалуле-б** (読んで) **б-уго** (いる) が可である。これは一種の非人称文あるいは時に疑似受動的なニュアンスをもつことがあると言われるが、受動態の文ではない。この合成述語は、絶対構文では主語に呼応し、能格構文の述語には、直接補語に呼応する類別接辞が付され、また無主語文の述語にも唯一項(客体)の名詞に呼応する接辞が付いている。つまり、能格構文と主語省略文では直接客体の III 類名詞「本」に呼応する類別指標が合成述語の分詞 **цалуле-б**「読むところの」にも助動詞 **б-уго** (be 動詞) にも付されて、いわゆる客体呼応(対象活用 objective conjugation)を示している。絶対構文ではこれらの場合、述語は主体呼応の接辞 **в-** が付されている。この場合、**в-** は I 類(男性類)指標、**б-** は III 類(動物、無生物、自然現象等の類)指標である (cf. II 類[女性類]指標 = **й-**; 複数では全ての類に対して **р** あるいは **л**)。一方、形容詞あるいは分詞限定語 + 被限定名詞のフレーズでも、I 類名詞「少年」(これにも **в-** を接頭)を限定するときは **цIалуле-в вас**「読んでいる・少年」となり、III 類名詞「本」を限定するときは **цIалуле-б тIехъ**「読む・本」となる。後者は主格言語相当語句に翻訳して「読まれる本」とされることもあるが、同語には態の範疇は存在しないから、分詞 **цIалуле-**「読む(ところの)」は受動分詞の形ではない[クリモフ、アレクセイェフ 2015, p.156(原著 p.239)]⁶⁵。この「読む本」を「私が・読む・本」とするためには、「私が」を能格におけばよい：**дица** (私が erg) **цIалуле-б** (読む) **тIехъ** (本)。これは「私によって読まれる本」とはしない日本語表現と同じである。

III-2. 能格言語の主格化過程

I-2 の総括表に例示したように、ナフ・ダゲスタン諸語は全体として語彙、統語、形態の各レベルに能格性規範を維持しつつも、主格化過程を進める典型的な言語群

⁶⁵ 次のような註が付される：Cf. 同じくレズギン語の文 **ам депутатвиле хкянава**「彼を・代議員として・選んだ」**«его избрали депутатом»** (он избран депутатом 彼は代議員に選ばれた), **сур згъунава**「墓を・掘った」**«могилу вырыли»** (могила вырыта 墓が掘られた)、等も。これらの文は、メイラノフとタリボフの考えでは、「印欧語の非人称文」を思わせるもので、時に「一種独特の受動表現形」である (see: Мейланова У.А., Талинов Б.Б. Конструкции предложения с переходно-непереходными глаголами в лезгинском языке. – В кн. Вопросы синтаксического строя иберийско-кавказских языков, с.208)。以下は本稿筆者一形容詞限定語 + 被限定語名詞の結合においても、被限定語名詞の類別に従って形容詞に類別指標を付す：**берицина-в** (美しい) **в-ас** (I 類・少年), **берицина-й яс** (<**й-ас**) (II 類・少女), **берицина-б ружь** (III 類・家), **берицина-л васа-л** (複数・少年達)。また類別指標をもたない名詞もあるが、その場合も形容詞、分詞の限定語によって類別を標示する。一般に類別指標は、形容詞、分詞、大多数の動詞、多くの副詞にも付されるが、名詞においては稀用である [Агаев 1996, p.8–9]

である。ここでは、能格構造言語が主格言語化して行く場合の例示として、ナフ・ダゲスタン諸語の主格化過程を見ておきたい。ここでの主格化過程は、統語法から次第に形態分野にも波及しつつある。すなわち、第一に、同諸語多数において能格構文が主格構文へ向けて内的変化を起しつつある。別言すれば、能格主語に対しても絶対格主語に対しても一つの構文つまり「主格」構文が萌芽しつつあり、これが能格構文と共存する様相を見せている。アレクセイエフは、この「主格」構文を「他動詞主格構文」と呼んでいる。第二に、形態分野でも主格系列人称接辞の形成や格組織の再編等、主格化の流れが認められる。

「他動詞主格構文」とは、行為主体 (Agens) を絶対格によって表す過渡的な「他動詞」構文である。同諸語の多くにおいて総合的 (synthetic) 形式の動詞述語と「分詞+助動詞 be」の分析的 (analytic) 形式の動詞述語が存在するが、例えばチェチェン語では、前者では通常の能格構文と絶対構文を区別するが、後者の形式の能格動詞 (agentive verb) に対しては、能格構文と「他動詞主格構文」という二つのタイプの構文が共存する：総合的動詞述語の場合の絶対構文 *co* (私は *abs*) *лела* (散歩する)

「私は散歩する」に対する能格構文 *ac* (私は *erg*) *болх* (仕事を *abs*) *б-о* (する) 「私は仕事をする」では、動詞は客体呼応 (対象活用 *objective conjugation*) の原則に従っている。ところが、分析的動詞述語の場合は能格構文 *ac* (私は *erg*) *болх* (仕事を *abs*) *б-еш* (副動詞) *б-y* (類別指標付 *be* 動詞) 「私は仕事をしている」は、直接補語と合成述語は客体呼応する、つまり分詞も *be* 助動詞も客体呼応 (対象活用) であるが、「他動詞主格構文」*co* (私は *abs*) *болх* (仕事 *abs*) *б-еш* (副動詞) *в-y* (類別指標付 *be* 助動詞) 「私は仕事をしている」では分詞は客体呼応、助動詞は主体呼応である。

アヴァール語の場合も基本的にはチェチェン語と同じである。「他動詞主格構文」は、「現在分詞+助動詞 *be*」の分析形式の動詞述語の場合に現れる。以下例文は、類別指標を前後に付した分詞-*екьбуле*-「耕して」と各時制の助動詞 *be* 「いる」を合成した述語から成る。一般時制の場合可能なのは主格構文だけである。能格構文では能格構造の原則通り、分詞は *III* 類名詞の直接補語「畑」に呼応する類別指標で囲みつつ、助動詞も「畑」に客体呼応する類別指標を付すが、「他動詞主格構文」では分詞は直接補語に呼応する類別指標は接頭して客体呼応、主体「父」に呼応する類別指標は接尾しつつ、助動詞は主体「父」に主体呼応を示している (*б-III* 類指標、*в-I* 類指標。なお、*I* 類=男性類、*II* 類=女性類、*III* 類=人間以外類、動物、無生物等の類→cf. 註 116) :

能格構文

主格構文

現在 инсуца(父 erg) хур(畑 abs) б̄-екъуле-б̄ б̄-уго. эмен(父 abs) хур(畑 abs)

б̄-екъуле-в̄ в̄-уго

「父が・畑を・耕して・いる」

過去 инсуца хур б̄-екъуле-б̄ б̄-ук̄лана. эмен хур б̄-екъуле-в̄ в̄-ук̄лана

「父が・畑を・耕し・た」

未来 инсуца хур б̄-екъуле-б̄ б̄-ук̄лина. эмен хур б̄-екъуле-в̄ в̄-ук̄лина

「父が・畑を・耕す・だろう」

一般時制 (以下参照)

эмен хур б̄-екъуле-в̄ в̄-ук̄луна

「父は・畑を：(普段) 耕している」

一方、「副動詞過去+助動詞 be」の分析形式の述語の場合は、これが許容するのは以下の能格構文だけである。すなわち be 助動詞に主体 (I 類) 類別指標を付した「他動詞主格構文」эмен хур б̄-екъун в̄-уго あるいは эмен хур б̄-екъун в̄-ук̄лана は不可である (б̄-екъун は副動詞過去) :

能格構文 инсуца хур б̄-екъун б̄-уго あるいは

инсуца хур б̄-екъун б̄-ук̄лана

「父が・畑を・耕し・た」

(なお、上の能格文 / 主格文の配列は同じ。-уго, -ук̄лина, -ук̄лана, -ук̄луна はそれぞれ be 動詞現在、未来、過去時制、一般時制。一般時制は「常に、通常、概して、普段」行われる行為を指す)。[クリモフ、アレクセイェフ 2015, p.156-159(原著 239-244), cf.162-163(248-249)]

ダルギン標準語でも同じく、次の持続相アスペクト (この場合 Aktionsart) の場合に、能格文タイプと並行して絶対構文の異型としての他動詞主格構文が可能である [同上 2015, 160(244)]⁶⁶。

第一は、持続相 (durative) の総合 (synthetic) 的動詞述語の場合である :

能格構文 ну-ни (erg) жуз (abs) б̄-уч̄лура 「私が・本を・読んでいる」

他動詞主格構文 ну (abs) жуз-ли (erg) уч̄лура 「私が・本を・読んでいる」

ここで能格構文は原則通りの能格主語を置き、直接補語と述語は客体呼応(対象活用)を示すのに対して、「他動詞主格構文」は、絶対格の主体名詞(ну「私」と能格(жуз-ли「本を」)の補語(斜格機能 erg)を置く。動詞の類別接頭辞はこの場合、主体名詞と

⁶⁶ アレクセイェフによる引用 : З.Г. Абдуллаев, Очерки по синтаксису даргинского языка, с.200-207; Магомедов А.А. Об одной синтаксической конструкции в даргинском языке. – ИКЯ, Тбилиси, 1973, т. XVIII, с.362-364.

の呼応を示す。

第二は、分析形式の動詞形（「持続相副動詞+助動詞」のモデル）の場合である：

能格構文 дурхІяли (erg) мама (abs) б̄-ухъули са-й̄

「子供が・乳房を・吸って・いる」

他動詞主格構文 дурхІя (abs) мама-ли (erg) ухъули са-й̄

「子供が・乳房を・吸って・いる」

能格構文では、直接補語と分詞は客体呼応（対象活用）を示すが、他動詞主格構文では、上と同じく能格補語（斜格機能 erg）を置き、分詞と補語の客体呼応はない。一方、助動詞は両構文とも主体名詞に呼応（一致）する（be 助動詞は I 類 са-й̄, II 類 са-р-и, III 類 са-б-и）。

ダルギン諸メゲブ方言でも、分析形式の述語形の場合「他動詞主格構文」が現れる：

能格構文 устал-ли (erg) хъали (abs) б̄-икъуве ле-б̄

「労働者が・家を・建てて・いる」

他動詞主格構文 устар (abs) хъали (abs) б̄-икъуве ле-в̄

「労働者が・家を・建てて・いる」

能格構文では、能格主語の他、分析形式の述語（分詞と be 動詞）「建てている」と絶対格直接補語「III 類・家 abs」との客体呼応（対象活用）があるのに対して、主格文は文の両名詞成分に絶対格、分析的述語の分詞接頭辞は客体名詞「家」との客体呼応（対象活用）、助動詞の類別指標は主体名詞「I 類・労働者」に呼応している。つまり、メゲブ方言はチェチェン語やアヴァール語に起きている状況と類似の様相を呈するのである。

結局「他動詞主格構文」の発生条件と形式特徴は次の三つの場合だという【同上 2015, 161-162】：

- 1) 分析的動詞述語形をもつ「他動詞主格構文」（チェチェン語、バツビ語、アヴァール語、ラク語、ツァフル語、アルチ語、ダルギン語メゲブ方言）；
- 2) 動詞持続（継続）相アспектをもつ「他動詞主格構文」（ダルギン語、ラク語）；
- 3) 動詞の全てのテンス・アспектに対して「他動詞主格構文」（ウディン語ミルザベイリン弁）。ここでは自動詞文は勿論他動詞文でも絶対格主体を使う。ウディン語が、ナフ・ダゲスタン諸語の中で最も主格化へ向けた前進を示す言語であることは、すでに専門書に確定済みという【クリモフ、アレクセイェフ 2015, p.167(原著 p.255)】。

アレクセイェフ自身は、この再編過程について次のように説明している：

「分析的かつ持続体 (durative) タイプの他動詞主格構文は、能格構造の発展過程に発生した、自動詞文主体の、他動詞文主体への再解釈の法則的結果である。強調しておくべきは、こうした再解釈は、ナフ・ダゲスタン諸語の能格構造がすでに一定程度主体・客体関係の伝達に定位していればこそ可能となったことである。ナフ・ダゲスタン諸語の形態が、例えば絶対格や動詞中の類別指標の『拡散性』 (diffusibleness) が示しているように、主体・客体関係の表現に適応していない (稀なケースを除いて) のに対して、統語法においては主体と客体の対立はすでにかなり画然としている。… ナフ・ダゲスタン諸語の主格構文では、見ての通り、この対立はすでに形態にも及びつつある (主体格と動詞の呼応の変化) のであって、このことはまたもや、内容類型学内で立証されている、言語の統語レベルと形態レベル間の階層的関係を浮き彫りにするのである。また容易に気付くところであるが、主格構文と能格構文の対立は、当然これが態 (voice) の対立との同等性を証明する訳ではないが、一定の状況下では態 (voice) の関係の表現にも利用することができる」 [クリモフ、アレクセイェフ 2015, p.164-165(原著 p.251-252)]。

以上から見えてくる光景は、「他動詞主格構文」への再編は分析型構文が先行し、それが活発な再編の場となった。その場合主体との呼応においてもアスペクト・テンスへの関りの点でも助動詞が大きな役割を果たした。そして分析形式は勿論総合型動詞述語の場合も、能格構文ではなく絶対構文こそがこの再編の基礎にある。ちなみに、アレクセイェフの記述から見る限りにおいては、「打つ・叩く」の類いの「物の表面への影響作用を表す」意味的他動詞が絶対動詞として形式化される点は概ね動かないが、「ナフ・ダゲスタン諸語の資料を基にした動詞語彙素の語彙・意味的分類の原則は、実際上当面研究は未開拓である」 [クリモフ、アレクセイェフ 2015, p.115(原著 p.178-179)] という発言も見られ、ナフ・ダゲスタン諸語の動詞の語彙化の主格言語とのズレの程度はカフカースの能格諸言語の中で相対的に低いのかも知れない、という印象を受ける。

ここに言う形態面での主格性とは、人称接辞の主体・客体系列へ向けた動きであり、曲用パラダイムへの属格と与格の組込みと能格の使用範囲の拡大、つまり能格の主体・客体系列での拡散性の消滅化である。例えばタバサラン語ではすでに動詞の 1, 2 人称の能格系列と絶対格系列の人称接辞が区別されており、それを出発点として能格系列の人称接辞の機能が拡大して、「他動詞」文の主体も「自動詞」文の主体も指示する、すなわち主体系列に向かっており、それに伴って絶対格系列人称接辞の機能が縮小され客体系列に転化しつつあるという。ジルコフは「タバサラン語は、言語において動

詞の他動性か自動性の別とは無関係に動詞全てにおいて同一の主体表現が現れ始めている、すでに能格構造の後期段階にある」とする評価を与えているという[クリモフ、アレクセイェフ 2015, p.165-166(原著 p.253)]⁶⁷。

アレクセイェフのナフ・ダゲスタン諸語全体に対するまとめを紹介しておく：

「ナフ・ダゲスタン諸語は、全体としての基本的な能格性規範を残しながらも（主格型類型の特徴の凌駕を特徴とするウディン語を除いて）、すでにそれらの統語構造の本質的な主格化の諸例を示していることである。このような過程の最も特徴的な現れの一つは、これらの多数の言語に他動詞主格構文が存在することである。この構文の機能範囲における制約（分析的動詞形、持続体アスペクトの形）の故に、多くのナフ・ダゲスタン諸語の主格性特徴はなお周辺の特徴と認定できる。同時に、ナフ・ダゲスタン諸語の形態にも、主格化の現れが感触されるようになりつつある；cf. これら諸語のいくつかで動詞中の主体系列人称接辞の形成、開始された格組織体系（システム）の再編。同時に強調しておくべきは、能格構造の、主格構造への再編過程をこの過程のあるどれか一つの現象と見なしてはならないことである⁶⁸。この過程は、本質的には深層的なものであり、實際上言語構造の全ての面に関するものである。この点に関連しては、ゲルマン諸語や印欧諸語の前主格状態の再編には全ての品詞が引き込まれた、とするカツネリソンの見解を参照」[クリモフ、アレクセイェフ 2015, p.167-168(原著 p.256)]⁶⁹

クリモフは、分離能格性（split ergativity）を示す多数の言語では、形態面では能格性原理を貫徹する一方で統語面では主格性の特徴の方が顕著であること、これと逆方向の相関性を見せる証例は皆無であること、また分離能格性を示すあらゆるケースで動詞型でなく名詞型あるいは少なくとも混合型に現れるという法則性を確認しながら、混合型のバスク語について持続アスペクトである他動詞の半過去 imperfect の場合、名詞成分の形式は能格性規範を示す一方で、動詞に「能格接辞の役割で登場し始めるのは歴史的に絶対格接辞である（cf. *ne-gien* 「私はそれをしていて」、*ne-kien* 「私はそれを知っていた」、*ne-karren* 「私はそれを運んでいた）」[クリモフ 2016, p.217] ことを指摘している。つまり、動詞述語の語形の形態構造は主格化構造への進展を示すのに対して、名詞の形式化は前段階の規範を保守すること、発展原動力は動詞にあること、を示したのである。未完了過去時制（imperfect）は、イエスペルセンも示し

⁶⁷ アレクセイェフによる引用—*Жирков Л.И.* Табасаранский язык, с.128.

⁶⁸ アレクセイェフによる引用—*Кибрик А.К., Кодзасов С.В., Оловянная И.П., Самедов Д.С.* Опыт структурного описания арчинского языка, т. , Лексика. Фонетика. М., 1877, с.29.

⁶⁹ С.Д.Кацнельсон, К генезису номинативного предложения. М.-Л., 1936, с.103.

たように、「アオリストは話を運んで行き、それから何が起こったかを伝えるが、未完了はその当時のありのままの状態に低回し、多少の冗長さを以てそれを敷衍する」持続性を具える典型的な持続的テンス・アスペクトであり、現在時制に付きまとう動作態気分（持続性）に通底している[イエスペルセン, p.395; cf. 石田 1996, p.293]。ところで、グルジア語は、活格言語の多くの残滓を引きずっており、現在時制では主格構造、アオリストでは能格構造と見る誘惑に駆られる言語であるが、内容類型学の立場からは今日すでに主格言語である[クリモフ・アレクセイェフ 2016, 第 II 章; cf. 本稿 V 補遺]。このグルジア語の状況もまた、持続性が現在時制に引かれる事実が示されている。これもまた池上嘉彦による「主客合一」化の契機を示すものであろう[松本泰丈 2018]。

しかし、クリモフもアレクセイェフも、持続相が何故主格化の因子になるかについては語っていない。ボカリョフの解説する持続動詞にはヒントがあるかもしれない。ボカリョフは「持続態 (длительный залог)」の統語的特徴は無客体性と非他動性であり、これは確かに持続動詞の必須特徴であるが、これとても行為の客体を捨象すること自体は、持続動詞のもう一つのもっと本質的な特徴に発するものであり、そのもう一つの本質的な特徴とは「ある行為の過程の中にある」という意義だと述べている。「持続動詞の最重要特徴は、行為そのものの特徴づけでなく、主体がその行為の遂行過程にあるということを示すことである; 正確な訳は『ある行為に携わっている、ある仕事に従事する *заниматься таким-то действия*』ではなく、『ある行為の過程にある、その遂行状態にある *находиться в процессе такого-то действия, в состоянии его выполнения*』である。したがって、持続動詞の主体は、動詞語根に表される行為の、客体とは直接的に関係しない。この場合の主体の行為は、本質的に非他動的なのである。主体の、その行為との関係のこの特徴づけにこそ、持続相動詞の意義と本質がある。持続性 (длительность)、通例性 (обычность)、継続性 (продолжительность) とかいったアスペクト的なニュアンスは『持続態 (длительный залог)』動詞に現れ得るが、この動詞の『態 (залог [voice])』の基幹的な意義に発するものではなく、...各持続動詞に必須のものではない」と見ている[Бокарев, 1949, p.58; cf. p.56-57]。ここで持続性、通例性、継続性アスペクトを示す例としてボカリョフが挙げる例は以下の通りである：

- 持続性 дов(abs 彼) цІалудола(修学する)「彼は学んでいる、就学中である」
Cf. дос(erg 彼) тІехь(本 abs) цІалула(読む)「彼が本を読む」
- 通例性 восарулев(商う・分詞)-хисарулев(取引に従事する・分詞) вукІуна(be 助動詞) дов(abs 彼)
「彼は商取引をやっている (彼の仕事は商取引だ)
он занимается торговыми оборотами」
Cf. дос(erg 彼) бичун(be 助動詞) босана(買った・分詞) ах(庭園 abs)
「彼は公園を買った」
- 継続性 лъилъарулев(刈り入れ作業に従事する・分詞) вуго(be 助動詞) дов(abs 彼)
「彼は刈り入れ中だ」
Cf. дос(erg 彼) лъилъулеб(刈り入れる・分詞) буго(be 助動詞) роль(小麦 abs)
「彼は小麦を刈る」

つまり、これ等の Aktionsart は現れ得るが、これが「持続態」動詞の本質ではないという趣旨である。

ボカリョフは、もともとウスラル初め当時の研究者等が「持続態 (длительный залог[durative voice])」動詞と多回体 (множественный вид[iterative aspect]) 動詞を混同して記述していた状況に対して、この両者の峻別を提起して、上述の結論を導き出したのであるが、この態 (залог[voice]) とアспект (вид[aspect]—広義でのアспект[体、相]であり、Aktionsart[動作態]を指すと思われる) の用語法自体も当時の状況を間接的に反映していて興味深い。柳沢はボカリョフがすでに 1949 年代に、「逆受身の現象さえ述べ」、「逆受身構文を『持続相 (durative voice)』として記述し、能格構文からのヴォイスの転換と見なしている」と書く[ディクソン 2018, p.320]。ただし、本稿筆者は現段階では、ボカリョフのいう「持続態」とアレクセーイエフのいう「他動詞主格構文」、あるいはまた逆受身構文の関係等については今後の検討課題だと考えている。

IV. 類別型言語の動向—初期活格型言語との接点

内容類型学で類別言語とされるのは、概ねバントゥー諸語である。ここでの類別名詞—類別動詞の呼応は、有生名詞—有生動詞と無生名詞—無生動詞の呼応へと次第に二分化する傾向があると言われる。これは活格言語以上に、客観的現実の写像的模写(写実)が基本にあると思われる。活格言語の初期段階位相では、上述のように、有生名詞—有生動詞、無生名詞—無生動詞による呼応が次第に活性名詞—活性動詞、不

活性的名詞—不活性動詞へ転化して過程が見られたが、ここには活格言語との接点がほの見える。

以下はスワヒリ語の場合である。

IV-1. 名詞 語彙全体が内容に規定される一定多数に類別化され（人間類、樹木類、果物類、事物類、等）、それぞれに類別接頭辞を付して類（クラス）別をマークする[米田 2014]⁷⁰。

類	sg 接頭辞	類	pl 接頭辞	例語	類の大よその意味範囲
1	m-, mw-	2	wa-	m-tu (人), wa-tu (人々)	人間類
3	m, mw-	4	mi-	m-ti (木), mi-ti (pl)	樹木、植物類
5	∅-	6	ma-	tunda (果物), ma-tunda (pl)	果物類、集合、抽象名詞
7	ki-	8	vi-	ki-kombe (コップ), vi-kombe (pl)	事物類、道具、言語名
9	n-, ∅-	10	n-, ∅-	nguo (布、服), nguo	動物、親族名、借用語
11	u-	10	n-, ∅-	u-limi (舌), n-dimi (pl)	(抽象名詞)
14	u-	6	ma-	u-gonjiwa (病気), ma-gonjwa (pl)	抽象名詞

IV-2. 動詞 動詞にも名詞類別に呼応する動詞用類別・人称接頭辞を付加する。ところが、動詞用類別接辞と人称接辞の系列が未分化で単一系列である（類別範疇下の下位組織としての人称範疇）。形態は語形成から分離していない。曲用がなく、以下の動詞語形中での接辞配列と文成分の配列順によって、主体・客体関係が表される。下表は動詞に接頭される接辞表である[クリモフ 2016, p.113 によるもの]。下表の（ ）内は客体指標接辞とされるが、それ以外の接辞では全て主、客接辞同形である）。

⁷⁰ 米田信子「バントゥ諸語における名詞クラスと文法呼応—スワヒリ語を中心に」（類型学研究会 2014.4.5 講演）による。

1	1 人称 ni-	6	ya-	11	u-
	2 u-(ku-)				
	3 a-(m-)				
2	1 tu-	7	ki-	15	ku-
	2 m-(wa-)				
	3 wa-				
3	u-	8	vi-	16	pa-
4	i-	9	i-	17	ku-
5	li-	10	zi-	18	mu-

ニュートラルな文成分の語順は SVO であり、動詞語形内の接辞配列は、主語接辞-時制接辞 (-直接補語接辞) -動詞語根 (-派生接辞) -末尾辞-a のようになる。:

ex. Ni-li-sema(1 人称 1 類接辞-過去指標-言う)「私は言った」; A-li-sema (3 人称 1 類接辞-過去指標-言う)「彼は言った」; Ki-li-anguka (3 人称 7 類接辞-過去指標-倒れる)「それは倒れた」; U-li-ni-ona (2 人称 1 類接辞-過去指標-1 人称 1 類接辞-見る)「君が私を見た」;

1. M-tu(1 類・人) huyo(その) a-na-jifunza(1 類 3 人称-現在指標-勉強する)
「その人は勉強する」
2. Ki-kombe(7 類・コップ) ki-li-anguka(7 類 3 人称-過去指標-倒れる)
「コップが倒れた」
3. Ni-me-leta(1 類 1 人称-完了-持って来た) chakula(7 類・食物) (< 7 類 ki-akula)
「私は食べ物をもって来た」
4. Hamisi a-me-ki-leta chakula (1 類 3 人称-完了-7 類接辞-持ってくる)
「ハミシは食べ物をもって来た」

上例の主語も直接補語もある 4 を例に取れば、これは内容類型学でいう動詞型である:

ハミシ—彼 (1 類 3 人称 sg 接頭辞) -完了接辞-それ (7 類接辞) -持ってくる (語根)
-a (末尾辞)—食べ物 (7 類)、のように配列されるが、SVO 語順によって、ハミシは主語 S (1 類)、食べ物は直接補語 O (7 類) であり、動詞語形中にはこれら文成分に呼応する接辞が置かれ、その場合主語に呼応する接辞が接頭辞として先行する。米田によると、客体接辞は人物や動物の場合を除いて必須要素ではなく、客体を指示する名詞が明示される場合付けないのが基本であり、人物、動物以外の客体の呼応接辞が付く場合はその名詞成分に「限定」の意味が加わるという。また、文成分として間

接客体（人物）と直接客体（物）がある次のような文でも、動詞語形中には人物の間接客体に呼応する接辞だけを置いている[米田 2014]：

Ni-li-m-pa m-toto ki-tabu

私-過去-1類接辞-与える-a 子ども1類 本7類「私は子どもに本を与えた」

結局、主体・客体関係は名詞、動詞（語形中の接辞）配列によって決まる。以上の概観だけを基にして判断する限りでは、直接補語に相当する名詞は動詞語形の外に配置され、動詞語形中に有生的指示対象以外の呼応接辞は原則として置かないのが基本であるとすれば、同語の陳述の核すなわち第一次シンタグマは類別名詞主語+類別動詞述語であると考えられる。このシンタグマは活格言語のそれに類似あるいは直結しており、これはさらに主格言語に再解釈され易い構造の基盤になったと考えられる。すなわち、これの厳密な呼応関係は、以下の例のように、次第に崩壊の兆しを見せており、名詞は有生・無生類別へ、動詞は有生動詞、無生動詞区分へ、つまり有生名詞-有生動詞あるいは無生名詞-無生動詞の呼応関係への移行過程が進行していると思われる。これは主体・客体関係へ向けての再編過程の萌芽を示している。そこで、内容類型学はさらに主体・客体化過程へ向けた前進を示す活格言語早期段階に繋がって行くとする作業仮説を提起している⁷¹。

Ki-jana(7類・若者) **a-li-soma**(1類接辞-過去指標-読む)

[本来なら、動詞は **ki-li-soma** のはず]

N-dege(9類・鳥) **a-me-ruka**(1類接辞-完了指標-飛び立つ)

[本来なら、動詞は **i-me-ruka** のはず]

M-ndege(鳥) **a-li-ruka**(1類接辞-過去指標-飛び立つ)

[本来なら、動詞は **i-li-ruka** のはず。しかも、9類名詞「鳥」にさらに1類(人間類)接頭辞を重ねている] [例文は、クリモフ 1999, p.237-239 より]

クリモフは現在の類別言語が類別組織の基準から目立って遠ざかりつつあるとしながらも、現段階での総括として類別言語に対して次のような評定を下している：

「類別組織における名詞類別の物質的基礎『であったのは、実際の現実に存在する諸関係である。マインホフは、名詞の類別組織は取り囲む世界の諸事物の実際的分類を反映したものであって、文法的類別範疇に動機性があることは疑いない、ことを示し

⁷¹ バントゥー諸語の研究者の多くが、同諸語を主格（対格型）と見なしていると思われるが、論議の分れる所である。例えば柳沢は、ディクソンがスワヒリ語を対格型（主格型）と見なす点について、「スワヒリ語の S,A,O の関係図式だけをながめれば、彼のいう対格型になるが、「そこにはクリモフのいう言語構造の階層的な頂点に位置する語彙レベルの軽視と、言語の階層的な多レベル相関項の呼応特徴の複合体である言語構造としての類型の軽視が見られる」と評定している[柳沢 1996, p.189]。

たのであった』(ジューコフ⁷²)。(当然のことながら、この類型種の具体的な代表諸言語で、名詞の類別原理には本質的に差異があり得る)。逆に、記述諸研究で『他動詞』と『自動詞』に分けて描かれる動詞語彙のここでの構造化手法に関して何らかのイメージを得るのは非常に難しい(特にこうした事態が起こるのは、専門書において日常的に動詞語彙素とその具体的語形概念の区別がないことが原因である)。類別組織における文類型の特徴が不分明であるのも、このことから生じる。ここで動詞形態の分野で注意を引くのは、二つの基本特徴である。第一に、動詞形態組織における類別・人称指標系列が物質的に単一系列でありながら、同時に主体・客体的相関性の観点からして機能的に未分化拡散的(diffuse)な系列であることであり、この系列は活格、能格、主格組織の該当の諸系列によっては捉えられず、そのため、時に、主体・客体関係は動詞語形中でのこれらの系列の配列の性格によって伝達されることになる。Cf. 例えばスワヒリ語の以下のような物質的に単一系列の類別・人称指標(...特に同表⁷³から、人称範疇内にさらに類別的下位分類が認められる他の類別組織とは違って、ここでは人称範疇がより一般的な類別範疇下に従属することを示している、と見るべきである)。第二に、類別諸言語にあつて多数の動詞が非態的なディアテシス(相)の機能化を見せるが、そのディアテシスの意義は十分には明らかになっていないことである。注意を引くのは、実証的(empirical)諸研究において通常、態(voice)と認定される形態手段は、実際はその意味からして主格組織にあるような能動と受動の区別の域を大きく外れることである:すなわち、一つは、ここでは態の概念に再帰性(reflexivity)範疇、相互性(reciprocity)範疇、各種のヴァージョン(相 version)範疇が含まれること、二つは、動詞の能動形と受動形の区別が然るべき変形関係を示さない構造中に見出されること(cf. 三項『能動構文』の一方で二項『受動構文』)⁷⁴、さらに三つは、意味的な自動詞に『受動』形の形成の可能性さえも指摘されることである。名詞曲用は一恐らくそれは安定的な類別群による名詞語彙素の配置によって暗示されるのであろうが一欠落するため、類別組織にこれに固有の位置格の特徴を証する訳には行かない(筆者は、格範疇の理解において、言語に位置格が欠ける場合には、そこに格パラダイムの存在を認めないという観点を持している)」[クリモフ 2016,

⁷² クリモフによるジューコフ引用— Жуков А.А. О некоторых грамматических категориях имени существительного в языках Банту. — Africa. Культура и языки народов Африки. VI. М.-Л., 1966, с.151

⁷³ すでに上に引用した表のこと[クリモフ 2016, p.113]。

⁷⁴ クリモフによる引用— Громова Н.В. Части речи в языках банту и принципы их разграничения., М., 1968, с.89-91

p.111-112]⁷⁵。

一方、現代のバントゥー諸語の専門研究者等が捉えている現況は、上の概観から外れる諸点を明らかにしてくれる。例えば、①基本語順 SVO 以外に OVS 語順と OV 呼応の存在、②自動詞に起る場所指示名詞と動詞内接辞の呼応を表す「場所倒置構文」、③以上に関連して主語呼応でなくテーマ（主題）呼応、④間接補語名詞成分に呼応すべく動詞内接辞「適用形 APPL」と呼ばれる接辞の動詞内への組込み⁷⁶、⑤状況語的な斜格の機能を示す動詞内呼応接辞、⑥「不可譲渡」関係（本稿で言う有機的所有＝非分離所有の関係）にある部分と全体の関係において、「全体が目的語のように振る舞う」、つまり動詞語形内の呼応接辞は部分でなく全体の方に呼応するケース、が見られるという。

以下、動詞語形は枠で囲み、文成分と動詞の配列は一で示す；記述を簡単にするために時制接辞は省略；数字は名詞あるいは動詞につく類（クラス）別ないしは人称 sg/pl を示す：

① 本 7—それ 7-読む—少年 1「本は少年が読んでいる」の倒置文では、動詞「読む」は「少年」1 類ではなく「本」7 類接頭辞に呼応するバントゥー語がある；② 森 (3)-ni(Loc.18)—そこで 18-寝る—動物 「森では動物が寝ている」では、動詞内接頭辞「そこで」は「森で」に呼応している（「森」に付く -ni は場所指示接辞）；③語順を変えれば先頭位置はテーマになり得ることを示唆しており、以上からテーマ呼応という説をとる研究者がいる；④ 私 1sg-彼に 1-買う-適用形接辞—子ども 1—本 7「私は子ども（のため）に本を買った」では、動詞内接辞は「本 7」ではなく「子ども 1」に呼応するが、間接補語「子ども」がなければ、直接補語「本」に呼応する接辞を置くこともある；⑤ 彼 3sg-私達 1sg-走った「彼は私達から走った（逃走した）」では、動詞内接辞「私達」は出格接辞のように振る舞う。cf. 彼 3sg-私達-走る-適用形接辞「彼は私達に向かって走った（私たちを追いかけた）」；⑥ 血 10—それ 10-彼 1-出る—子ども 1 「子どもに（子どもから）血が出ている」。一方、彼 3sg-私 1sg-つかむ—腕 3「彼は私の腕をつかんだ」では、動詞内呼応は「彼」の方に呼応する[米田 2014 によ

⁷⁵ 「位置格」(позиционные падежи[positional case])という用語はカツネリソンによるもの。カツネリソンの理解では、格の諸機能の中で第一次的基幹的機能である主体・客体的機能とそれ以外の二次的な機能に対立し、主体、客体の、述語との密接度の違いを表す「位置」目盛上の起点的位置に主体機能、さらに直接客体機能→間接客体機能→具格機能→...の順に階層ランクがあるとし、その上で、特に基軸的な主体と直接客体の機能を「位置格」という用語で表したのである[Кацнельсон1972(2009),p.43-46]。

⁷⁶ 「適用形」は、1)「のために、のかわりに」、2)「～へ・に」(方向)、3)「～で」(所格、具格)、4)意味の限定・特殊化(ex. 臭い>香る;学ぶ>専攻する)、のように機能するという[中島 H12(2000), p.150-152]

る]。ただし、言語を越えて不可譲渡的（有機的、非分離的）関係一般が存在するとしても、その関係の類別言語構造全体との連関性が明らかにならなければ、すなわち包含事象として確認できなければ、この関係の文法範疇としての存在を証することにはならないのではないだろうか。

あとがき

主格言語については本稿に含まれないが、主格言語も人類史における言語であることは勿論である。主格諸言語もその発達段階に応じて、例えば直接客体格としての対格の完成度の点でも他動性の完成度の点でも各様であるが、全体として各階層レベル—例えば他動詞と自動詞、主格構文、直接補語と間接補語、主格と対格、能動態と受動態（voice）等の構造諸要素—が、主体原理と客体原理という意味的動因子に立脚した一つの統一的組織体系の座標を構成する点に異論はなかろう。なお本稿で対格言語という用語を使っていないが、内容類型学においては、形式的有徴・無徴でなく、主体項として機能する文成分項（あるいは接辞系列要素）は何か、という基準によって呼称されるからである。その際勿論、これは主体項の論理的・歴史的な連続性（類別項—有生項—活性項—作因項—主体項へのハイパーロール的拡張）を前提とした呼称である。

クリモフは「内容類型学の原理」の冒頭で、「類型学の進歩は、次第に通時的類型学として確立しつつある点に感触される」[クリモフ 2016, p.1]と書く。そういえば、言語学が時間より空間、歴史（通時）よりも構造（共時）だけに重きを置くようになったのはいつ頃か。ソシュール、レヴィ・ストロース、トルベツコイ、ヤコブソン、ロシア・フォルマリズム...等々の流れが思い浮ぶが、勿論これらは科学史上大きな歴史的意義をもつ。エンゲルス「フォイエルバッハ論」の行に、18世紀の近代科学の途上に起った出来事として、「過程が研究できるようになる前にまず事物を研究しなければならなかった。任意の事物に生じている諸変化を知覚できる前に、まずその事物が何であるかを知らなければならなかった」；同じく、エンゲルス「空想から科学へ」（「反デューリング論」）でも、個々の要素を研究するためには「その要素を他の要素との連関から切り離して孤立させて捉える」、あるいは「その要素を変化・発展するものとしてでなく、静止したものとして捉える」必要があったという指摘がある。そしてこの科学方法は、「その当時には大きな歴史的正当性をもっていた」、と。すなわち形而上学の歴史的正当性、歴史的必然性についての指摘である。言語学はソシュールを介して、他の諸科学よりはるかに遅れてこの手法の必要性の認識に至ったと思われる。し

かし同時に、同じ必然性としてその手法に限界が生じ、科学は連関と発展の法則である弁証法的手法を探ることになる。

クリモフは冒頭の発言をさらに説明して、内容類型学は内容面の類型学という意味ではなく、「現象の形式と内容の相関関係における弁証法に立脚して、言語の内容面の形式面に対する規定性(被制約性 обусловленность)を追究することを前提」とするから、「言語の形式と内容をかなり直接的に結合する言語類型学分野である」と述べる[クリモフ 2016, p.3, 257]。この「連関と発展」の原則をさらに具体化したのが、二つの原理—体系性 системность と歴史主義 историзм—の結合の必要性についてのクリモフの指摘である。しかし一方では、彼は、「筆者は、類型学における体系的なアプローチの徹底した実現が類型学に歴史主義原理を導入する上での最も重要な前提だ、という見解を持っている」、と付け加えることも忘れていない[クリモフ 2016, p.179, 262-263]。この場合の体系性とは勿論、統一的な構造組織体系全体であり、体系性を前提とした歴史主義という路線は正にメッシャニーノフとその周りに集うた幾多の研究者たちが遺した伝統であった。

ところで、エンゲルスは、弁証法は「二つの系列」の法則すなわち現実の世界の弁証法的運動（客観的弁証法）とその意識された反映（概念弁証法）に関する一般原則（主観的弁証法）に還元された、という趣旨を述べたが（「フォイエルバッハ論」）、内容類型学が提起した人類史における言語発展史の鳥瞰図はこうした壮大な歴史的展望の中で、人間の思考の運動は人間の外部にある事物（客観的現実）の運動の反映であるという真理の一端を言語面だけで、すなわち「言語的思考」としてのみ提示して見せたのである。これによってクリモフは、ともすれば目標を失いがちな手探りの言語研究に大きな見通しと目標を示したものだ、と本稿筆者は考えている。対象の全体像を掴むという態度、さらに全体の中で部分をどう位置づけるべきかを考える態度を内容類型学から学んだように思う。これを基礎としてやるべき課題はまだ無限である。

V. 補遺

グルジア語は能格言語か主格言語か？

— クリモフ「カルトヴェリ諸語の類型学」から抜粋要約
[クリモフ、アレクセイェフ 2015, p.50-108(原著 p.78-169)]

アロンソン (H.J.Aronson) はすでに 1976 年、現代グルジア語は主格構造を基本としており、古代グルジア語の状態は前主格構造から主格構造への典型的再編段階にあったが、すでに主格的諸特徴の比重が凌駕している、とする見解を発表している。

クリモフも、カルトヴェリ諸語では、主格的包含事象集合が、語彙、統語、形態レヴェルの構造全体を貫いている、と主張している：他動詞と自動詞は、ここでの語彙的性質の特徴であって、形

態構造の諸特徴とは無関係に動詞形全てに実現されている。

統語面では、他動詞も自動詞も主格型を基礎とする文類型を構成する。主格的文類型の属性たる、能動文と受動文が存在する。古代グルジア語の統語構造からしてすでに主格構造を基本とする（以下 p.54~59）。

現在時制で、他動詞と自動詞が表す主語の下で同一の主語主格が存在する：

グルジア語 他動詞構造 *durgal-i škivr-s tlis* 「大工が・衣装箱を・平らに削っている」

自動詞構造 *durgal-i igvianebs* 「大工が・遅刻する」

直接補語と間接補語の分化性と能動文と受動文の対立がある：

dana čris pur-s 「ナイフが・切る・パンを」と *pur-i ičreba dan-it* 「パンが・切られる・ナイフで」

（能格型の専用能格は実際上の行為主体だけを示すのに対して、主格型ではもはや文法的な主語である、すなわち行為主体であり、行為を受ける主体[状態の主体]でもある）

主語の格指標の違いを基準に能格文と絶対文を認定する視点は錯覚であり *qui pro quo* である。例えば、同じカルトヴェリ語に属するラズ語に存在する他の二つの構造タイプ *qoči yurun* 「人が・死ぬ」の文は絶対構文、*usta-k oxori qodums* 「大工が・家を・建てる」の文は能格構文と見なされるが、主語の格マーカーが \emptyset か *-k* か、が動詞の他動性～自動性特徴を決定するのではない。また、いくつかの曖昧なケースを除いて、かなりの自動詞グループ（中能動 *medioactive* として特徴づけられる自動詞の亜類）が、逆に、規則的に主語を *-k* 表徴の形に指定せしめる（cf. *bozo-k ibgars* 「若い娘が・泣いている」、*žoqori-k lalups* 「犬が・吠える」、*xčini-k čxinqolups* 「老婆が・くしゃみする」）。

グルジア語の構造でも、主語の格指標 *-m(a)* と *-i // \emptyset* の使用は、動詞述語の他動性～自動性特徴（能格構文と絶対構文を指定する）とは無関係に、他動詞の場合も自動詞の場合も主語を等しく特徴づけるような分布態様を示している。周知の如く、主語はここでは、他動詞の能動態（*active*）形の場合、またシャニゼの文法構想が中能動（*medioactive*）動詞と資格付ける自動詞グループの場合、*-m(a)* 形をとる：cf. グルジア語 *deda-m čaačvina babšv-i* 「母が・寝かせつけた・幼児を」、*cxen-ma sečama barax-i* 「馬が・食んだ・草を」に対して、*deda-m čaaxvela* 「母が・咳をした」、*zayl-ma daiqepa* 「犬が・吠え出した」、*dro-m ganvlo* 「時が・過ぎた」。反対に他動詞受動態（*passive*）形の場合と、シャニゼが中受動（*mediopassive*）動詞および静態受動（*static passive*）動詞と資格付ける自動詞グループの場合、主語は *-i // \emptyset* 具現形をとる：cf. グルジア語 *saxl-i ašenda mamiš mier* 「家が・建てられた・大工によって」、*balax-i šeičama cxeniš mier* 「草が・食べられた・馬・によって」、等に対して、*deda movida* 「母が・来た」、*dro dadga* 「時が・到来した」、*xanžal-i eba* 「短刀が・ぶら下がっていた(彼には)・」（同じ状況は他のカルトヴェリ諸語でも）。すなわち、*-m(a)* も *-i // \emptyset* もグルジア語では主格の「異形態」*«allomorph»* の如く振る舞う。ここで検討中の格語尾は、主格の明らかな類型学的特徴である主体機能だけを有すること、またそれに劣らず重要な能格の類型学的特徴である具格機能の「兼務」*«совмещение»* を示さない（cf. 活格構造のいくつかの代表諸言語に立証される活格の種々の機能の「兼務」幅の広さ）。兼務性は能格の重要な特徴である。グルジア語の格語尾 *-m(a)* の機能は能格機能でなく、論理的にも文法的にも主体の表現者であり、正に主格機能である（ツェレテリ 1939→メシヤニーノフの「能動格」という用語も同じ意味を込めている）。

アオリストの場合も状況は同じである。特にカルトヴェリ語の一つメグルル語のアオリストの主格性構造の証明はもっと簡単（何れも、主格構造の他の代表諸言語におけると同様、道具手段の補語を具格指標で形成することにも注意）：

能動文 *mušep-k karxana geiašenes(i)* 「労働者等が・工場を・建てた」

受動文 *karxana-k iišenu mušepiše (//mušepiš ganiše)* 「工場が・建てられた・労働者等によって」

能動文 *kar-ki ža gořaxu* 「風が・木を・折った」

受動文 *ža-k giřixu kar-it(i)* 「木が・折られた・風によって」。

こうした状況下では、他動詞アオリスト形をもつグルジア語の構造はここに機能する他の諸構造と切り離して観察しても、能格構文の公式に合致せず、グルジア語においてはせいぜい能格構文への多少の近似性だけがあるにすぎない。

同一名詞句削除（*Equi-NP deletion*）テストの結果も、カルトヴェリ諸語の優れて主格構造的な特徴に適合している：

グルジア語 movida Nacarkekia da gaavso guda nacrit

「やって来た・ナツアルケキアが・そして・満たした・革袋を・灰で」,

ラズ語 *koči idu do diška duxaziru* 「人が・やって来た・そして・彼に用意した・薪を」

スヴァン語 (ラシフ方言) *sgāčad mešxa wotaxto Jaqop i iyral*

「入って来た・暗い・部屋へ・ヤコブが・そして・歌う」

主な参考文献

1. 山口巖「類型学序説、ロシア・ソヴェト言語研究の貢献」、京都大学学術出版、1995
2. 山口巖「ロシア文法の周辺—一般言語学への招待」、日本古代ロシア研究会、2005
3. 松本泰丈「言語タイプと主観性」 類型学研究会 2018.7.28
4. 柳沢民雄「ソ連邦における内容類型学について—北西カフカース諸語」、
名大 言語文化論集(1) 1996 (XIII-1) , (2)1997 (XIX-1) , (3)1998 (XIX-2) ,
(4) 1999 (XX-2)
5. 柳沢民雄「ロシア語における有機的所有について」、名大 言語文化論集,
XXI 卷—2号, 2000
6. 柳沢民雄「北西カフカース諸語の文構造について：アブハズ語を中心として」
類型学研究会 2015.1.24
7. Tamio Yanagisawa, A Grammar of ABKHAZ, Hitsuji Syobo Publishing, 2013
8. Tamio Yanagisawa, Analytic Dictionary of ABKHAZ, Hitsuji Syobo Publishing,
2010
9. 米田信子「バントゥ諸語における名詞クラスと文法呼応—スワヒリ語を中心に」
(類型学研究会 2014.4.5)
10. 中島久「スワヒリ語文法」、大学書林, 2000.
11. R.M.W.Dixon, Ergativity, Cambridge University Press, 1994
ディクソン「能格性」(柳沢民雄+石田修一訳), 研究社, 2018
12. Г.А.Климов, Очерк общей теории эргативности, НАУКА, 1973 (URSS,
ЛИБРОКОМ ,2009) (クリモフ「一般能格論概説」)
13. Г.А.Климов, Типология языков активного строя, НАУКА, 1977 (URSS,
ЛИБРОКОМ ,2009)
クリモフ「新しい言語類型学—活格構造言語とは何か」(石田訳), 三省堂, 1999.
14. Г.А.Климов, М.Е.Алексеев, Типология кавказских языков, НАУКА, 1980
(URSS, ЛИБРОКОМ ,2009)
クリモフ、アレクセイエフ「カフカース諸語の類型学」(石田訳)—『北西カ
フカース諸語の類型的研究』資料(科研報告—代表柳沢民雄),名古屋大学, 2015
15. Г.А.Климов, Принципы континентальной типологии, НАУКА, 1983 (URSS,
ЛИБРОКОМ ,2009)
クリモフ「内容類型学の原理」(石田訳)、三省堂、2016
16. О.И.Эсперсен (半田一郎訳)「文法の原理」岩波書店、1958
17. 石田修一「ロシア語歴史文法」(ヴィノクール+石田修一「ロシア語の歴史」,
吾妻書房, 1996)

18. 石田修一「ロシア語の歴史－歴史統語論」, ブイツーソリューション、2007
19. 石田修一「関係類型学と内容類型学－A.E.キブリクと G.A.クリモフ」、
『類型学研究』第4号、2014
20. Б.М.Атаев, Самоучитель аварского языка, Махачкала, 1996
(アターイエフ「アヴァール語自習教本」)
21. М.Е.Алексеев, Б.М.Атаев, Аварский язык, Из-во Academia, 1998
(アレクセーイエフ、アターイエフ「アヴァール語」)
22. А.А.Бокарев, Синтаксис аварского языка, Из-во АН СССР, М.-Л., 1949
(ボカリョフ「アヴァール語統語論」)
23. Т.В.Гамкрелидзе, Вяч.Вс.Иванов, Индоевропейский язык и
индоувропейцы, I, Из-во Тбилис. ун-та, 1984
(ガムクレリゼ、ヴァチェスラフ・イヴァノフ「印欧語と印欧人」)
24. Л.С.Ермолаева, К вопросу о семантической детерминанте языков
номинативного строя – ВЯ, 1995, №5
(イェルモラーイェヴァ「主格構造言語の意味的決定因子に関する問題によ
せて」(言語学の諸問題 1995/№5))
25. С.Д.Кацнедьсон, Типология языка и речевое мышление. Л., 1972 (Изд.4.,
«ЛИБРОКОМ» URSS, 2009)
(カツネリソン「言語の類型学と言語的思考」)
26. М.А.Кумахов, З.Ю.Кумахова, Эргативность и ее отношение к антипассиву
в черкесских (адыгских) языках
(М.А.クマホフ、Z.Ju.クマホヴァ「チェルケス(アディグ)諸語における能
格性とその逆受身 anti-passive の関係」)
－"История языка. Типология. Кавказоведение" (「言語史. 類型学. カフ
カース学」), ИНИОН РАН, Ин-т языкознания РАН, Наука, 2013 所収
27. А.Е.Кибрик, Очерки по общим и прикладным вопросам языкознания,
Изд-во Московского университета, 1992
(А.Е.キブリク「言語学の一般的、応用的諸問題概説」)
28. А.Е.Кибрик, Константы и переменные языка, Санкт-Петербург, АЛТЕЙЯ,
2003 (А.Е.キブリク「言語の定数と変数」)
29. И.И. Мещанинов, Глагол, Из-во АН СССР, 1949 (НАУКА, Лен. От., 1982)
(メッシュャニーノフ「動詞」)
30. Н.Ф.Яковлев, Д.А.Ашхамаф, Грамматика адыгейского литературного языка,
Из-во АН СССР, М.-Л., 1941
(ヤコブレフ、アシハマフ「アディグ標準語文法」)